

# 厚幌1遺跡（2）

# 幌内7遺跡（1）

国営土地改良事業勇払東部（二期）地区  
厚幌導水路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2

2010.3

厚真町教育委員会



1. 厚幌1遺跡近景 (SW→)



2. VH-03完掘 (SW→)

カラー図版2



1. VH-03床面出土余市式土器(SW→)



2. V GP-01遺物出土状態(N→)



1. 幌内7遺跡近景 (SW→)



2. ⅢH-01完掘 (SE→)

カラー図版 4



1. IIIAS-02検出 (S→)



2. IIIH-01鉤状鉄製品 (NW→)



3. IIIPB-04遺物出土状態 (N→)



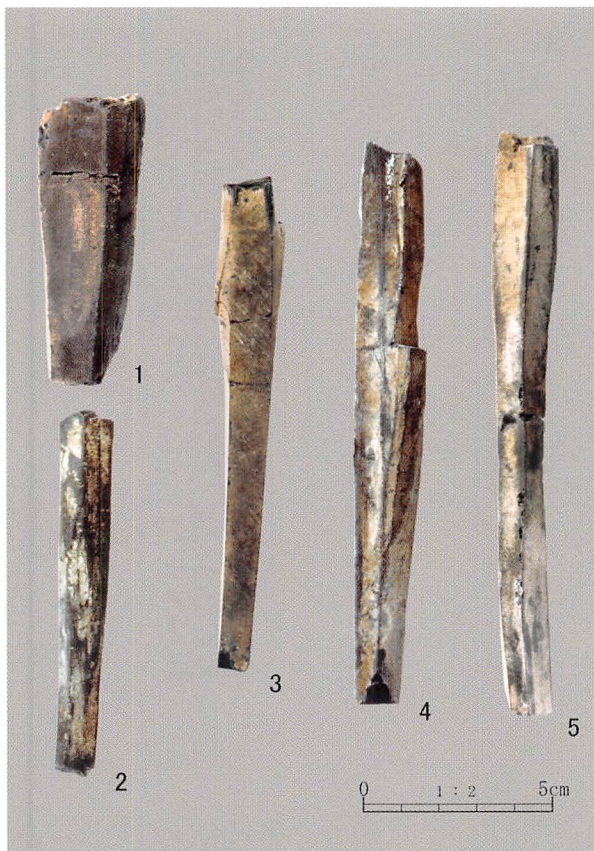
4. IIIPB-05遺物出土状態 (NW→)



5. VF-02(奥)・03(前)検出 (NW→)



6. L-20区 縄文晩期中葉土器 (SW→)



7. 縄文時代包含層出土棒状原石

## 序 文

厚真町は、胆振・日高地区屈指の豊かな水田地帯を有する大いなる田園都市であります。この穀倉地帯を潤す厚真川は夕張山地の南端を源として流れ、農作物への恩恵を授ける大切な河川でもあります。この豊かな厚真川から、農業の町厚真にとって生命線と言える水資源を未来永劫にわたり、田畑へ安定的に供給するため本管総延長 24.5km におよぶ農業用導水管「厚幌導水路」の建設が本格着工されました。

さて、本書はこの厚幌導水路建設と共に、地域に残された埋蔵文化財の記録保存を目的として発掘調査された厚幌 1 遺跡、幌内 7 遺跡の報告書であります。調査により厚幌 1 遺跡ではシカの落とし穴や約 4 千年前の縄文時代の竪穴式住居跡が見つかっております。幌内 7 遺跡では縄文時代、今から約 5 千 5 百年前から 2 千 5 百年前にかけて多量の土器や石器のほか、1 千 5 百年から 1 千年前の焼き火跡や土器、そして、約 5 百年前の北海道の先住民族であるアイヌ民族の平地式住居跡が見つかっています。住居跡からは鉤状の金属製品などが見つかるほか、ゴザを編む時に使ったと思われる棒状の礫が多く出土しています。

これらの発掘成果から、先人たちはこの厚真の自然と共に豊かな文化を育てていたことが克明に分かってきました。

これらの貴重な埋蔵文化財の発見は、厚真町の歴史のみに留まらず、アイヌ民族の歴史、北海道の歴史を考えるうえでも重要な成果と受け止めております。今後は出土品の調査研究は勿論のこと、地域の教育的資源、文化的財産としてより豊かな厚真町を育むための活用を推し進めてまいりたいと思う所存でございます。また、本書が広く埋蔵文化財の保護並びに調査・研究の一助となれば幸いに存じます。

最後となりましたが、発掘調査・整理・報告にあたり御指導、御支援を賜りました関係機関ならびに関係諸氏に、誠に厚く、感謝を申し上げます。

厚真町教育委員会  
教育長 兵頭 利彦

## 例言

1. 本書は、平成 20 年度に行った国営土地改良事業勇払東部（二期）地区厚幌導水路建設工事に伴い発掘調査された厚幌 1 遺跡（登載番号：J-13-25）・幌内 7 遺跡（登載番号：J-13-103）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部の委託を厚真町教育委員会が受託した。
3. 調査・整理は以下の体制で行った。

調査担当者：奈良 智法 乾 哲也

調査補助員：山田 和史

測量技能作業員・写図工：海津孝之 整備技能作業員 中田鐘太郎 発掘作業員 15 名 整理作業員 8 名

奈良：金属製品・擦文・続縄文・縄文土器実測、復元・拓影土器撮影、写真図版作成・編集、遺構図作成

山田：礫石器実測・撮影・剥片石器実測校正、集石構成礫の実測・撮影、遺構図作成

乾：統括・渉外

小野哲也（現札幌市教育委員会）・天方博章：発掘・整理業務協力

4. 本書の編集は奈良・乾が行い、各節の執筆は、文末に記す。
5. 関連諸科学の同定分析については、以下の機関および個人に依頼した。

AMS 法  $^{14}\text{C}$  年代測定：株式会社 加速器分析研究所

動物遺存体同定：千歳市埋蔵文化財センター 高橋 理

炭化種子同定：札幌国際大学 研究員 椿坂 恭代

金属製品保存処理：岩手県立博物館 赤沼 英男

6. 包含層堆積図、剥片石器実測・写真、復元土器実測の一部を株式会社 シン技術コンサルに委託した。
7. 本調査によって得られた資料等は、厚真町教育委員会で保管している。
8. 調査・報告にあたって下記の機関および個人より御指導御協力を頂いた、記して感謝申し上げます。

北海道教育庁生涯学習推進局文化・スポーツ課、国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部、室蘭開発建設部胆振東部農業開発事業所、苫小牧駒澤大学、札幌国際大学、札幌学院大学人文学部、札幌大学、社団法人 北海道アイヌ協会、財団法人 北海道埋蔵文化財センター、釧路市埋蔵文化財調査センター、千歳市埋蔵文化財センター、苫小牧市博物館、平取町沙流川歴史館、平取町立二風谷アイヌ文化博物館、浦河町立郷土博物館、北見市北網圏文化センター、北見市とこ埋蔵文化財センター、恵庭市教育委員会、遠軽町教育委員会、白老町教育委員会、新ひだか町教育委員会、日高町教育委員会、富良野市教育委員会、伊達市噴火湾文化研究所、岩手県立博物館、厚真町富里自治会、厚真町幌内自治会、(有) 沼田重機、(株) 佐藤組

青野友哉、赤井文人、赤石慎三、秋野茂樹、秋山洋二、阿部明義、天野哲也、荒井章一、新家水奈、石井 淳、石川 朗、伊藤昭和、猪熊樹人、白杵 勲、右代啓視、宇田川洋、上屋真一、大沼忠春、岡田路明、長田佳宏、荻野幸男、影浦 覚、柏木大延、加藤 忠、加藤博文、川内谷修、川上 淳、菅野修宏、菊池俊彦、北沢 実、工藤研治、熊谷仁志、熊木俊朗、栗橋和範、栗橋初江、越田賢一郎、小山卓臣、斉藤大朋、笹田朋孝、佐藤一夫、佐藤 剛、佐藤幸雄、澤田 健、芝田直人、杉浦重信、鈴木将太、鈴木琢也、鈴木宏行、鈴木 信、仙庭伸久、高橋和樹、田口尚、竹内 渉、武永 真、田才雅彦、田中哲朗、種市幸生、田村俊之、千葉英一、鶴丸俊明、土肥研晶、豊田宏良、中田裕香、長沼 孝、長町章弘、西田 茂、西脇対名夫、畑 宏明、福井淳一、藤井誠二、藤原秀樹、本田優子、松田淳子、松田宏介、松田 猛、松本建速、丸山浩二、三浦正人、藁島栄紀、宗像公司、森岡健治、福田裕二、藪中剛司、山田 央、山田 哲、山田悟郎、山原敏朗、山本文男、吉田正明。

# 凡例

1. 本書の遺構・遺物等について下記の略号を用いた。なお、層位がこれらの略号に付加している。

〔遺構〕 住居跡：H 住居内のピット：PT 住居の柱穴：HP 住居様遺構：PX 土坑：P 土坑墓：G  
Tピット：TP 溝状遺構：MI 焼土：F 灰集中：AS 杭穴：KP

〔遺物〕 土器：P 擦文土器：SP 続縄文土器：ZP 縄文土器：JP 土製品：CP 剥片石器：FT  
礫石器：ST フレイク・チップ<sup>o</sup>：FC 礫：S 石製品：STP 鉄製品：IP 銅製品：BP  
炭化種子：SD 獣骨：B

〔遺物等集中〕 土器片集中：PB 礫集中：SB 獣骨集中：BB フレイク・チップ集中：FCB

2. 地層等について下記の略号を用いた。

〔堆積土〕 樽前 a 砂質降下火山灰：Ta-a 駒ヶ岳 c2 砂質降下火山灰：Ko-c2 樽前 b 降下軽石：Ta-b  
有珠 b 降下火山灰：Us-b 白頭山-苫小牧火山灰：B-Tm 樽前 c 砂質降下軽石：Ta-c  
樽前 d1 細礫質降下スコリア：Ta-d1 樽前 d2 中礫質降下軽石：Ta-d2. p 恵庭岳 a 降下軽石：En-a  
黄褐色粘土質シルト（いわゆるローム）：L 攪乱：KR

〔色調〕 小山・竹原編著（1994）『新版 標準土色帳』に従った。

〔注記〕 土層注記は下記の略号を用いて、左側より混合比率の順列をつけている。また、混入土については（）内に粒径（単位：mm）、状態を記載した。

混入土の比率

A + B：A と B が同量比混じる A-B：A を主体に B が多量に混じる

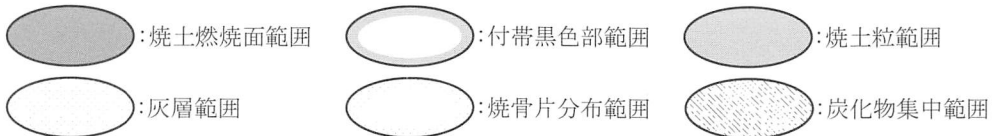
A = B：A を主体に B が少量 A≡B：A を主体に B が微量

φ：粒径（単位：mm） ↓：以下 （状態）：斑状に混じる・均一に混じる

〔層位〕 標準堆積層はローマ数字を用い、遺構覆土や風倒木攪乱などの二次的に堆積したものにはアラビア数字を用いた。また、一覧表中には下記の略号を用いている。

U：上位 M：中位 L：下位

〔焼土〕 被熱による土壤赤色化の度合い等の表現に以下のトーンを用いた。



3. 挿図は基本的に次のように縮尺を統一したが、異なるものについては図中スケールに縮尺を明記している。

遺構周辺図：1/80、1/60、1/40 住居跡：1/40 住居跡に付属する柱穴その他の土坑：1/20

Ⅲ層土坑：1/20 V層土坑：1/40 焼土・灰集中：1/20 集中遺物出土状態：1/10 または 1/20

土器実測図：1/3 または 1/4 土器拓影図：1/3 剥片石器実測図：1/2 礫石器実測図：1/3 または 1/4

金属製品 1/2 または 1/3

4. 遺構実測図中に以下の線種・トーンを用いている。

〔線種〕 -----：オーバーハング ————：トレンチ ————：攪乱・トレンチによる遺構推定

〔柱穴〕 平地式住居跡柱穴の断面図において、しまりの強い壁面に斜線を用いている。

〔断面〕 ：柱穴の壁面周辺が強くしまる部分



5. 土器・石器・金属製品の挿図および写真図版の番号に後続する枝番号は同一個体表記である。また、写真図版中の「●」は実測図掲載遺物である。

6. 遺物実測図中に以下の略号を用いている。

〔断面〕  : たたき痕 |  : 剥片石器 微細剥離 / 礫石器 擦り痕・滑沢面

〔平面〕  : 滑沢面範囲  : 被熱による赤色化/付着物範囲

7. 一覧表中の石材については、奈良および乾が肉眼観察で分類し、下記の略号を用いた。ただし凝灰質砂岩については砂岩に、緑泥片岩は緑色泥岩に含めている。また、頁岩・泥岩の分類については、粒度による基準ではなく、破断面等の肉眼観察によるものである。

Aga. : メノウ Aga-Sh. : メノウ質頁岩 Amp. : 角閃岩 And. : 安山岩 Bl-Sch. : 青色片岩  
Che. : チャート Con. : 礫岩 Dio. : 閃緑岩 Gni. : 片麻岩 Gra. : 花崗岩 Gr-Mud. : 緑色泥岩  
Mud. : 泥岩 Obs. : 黒曜石 Qu. : 石英 Qu-Sch. : 石英片岩 Qua. : 珪岩 Sa. : 砂岩 Sh. : 頁岩  
Sch. : 片岩 Ser. : 蛇紋岩 Tu. : 凝灰岩 Tul. : 滑石

# 本文目次

## カラー図版

- 1-1 厚幌1遺跡近景
- 1-2 V H-03 完掘
- 2-1 V H-03 床面出土余市式土器
- 2-2 V GP-01 遺物出土状態
- 3-1 幌内7遺跡近景
- 3-2 III H-01 完掘
- 4-1 III AS-02 検出
- 4-2 III H-01 鉤状鉄製品
- 4-3 III PB-04 遺物出土状態
- 4-4 III PB-05 遺物出土状態
- 4-5 V F-02・03 検出
- 4-6 L-20 区 縄文晩期中葉土器
- 4-7 縄文時代包含層出土棒状原石

## 序文

## 例言

## 凡例

## 第1部 調査の概要

### 第I章 調査の概要

- 第1節 調査要項と体制 …… 1
  - 1. 調査要項 …… 1
  - 2. 調査体制 …… 1
- 第2節 調査に至る経緯 …… 1
  - 1. 国営土地改良事業勇払東部（二期）地区  
厚幌導水路建設事業 …… 1
  - 2. 厚幌導水路建設事業に係る  
所在確認調査と試掘調査 …… 3

### 第II章 厚真町の概要

- 第1節 地理的環境 …… 3
- 第2節 歴史的環境 …… 4
  - 1. 埋蔵文化財包蔵地の概要 …… 4
  - 2. 町内における埋蔵文化財調査の概要 …… 4
  - 3. 歴史時代 …… 5

## 第III章 出土遺物の分類

- 第1節 土器 …… 10
- 第2節 石器 …… 11

## 第2部 厚幌1遺跡

### 第I章 調査の概要

- 第1節 調査要項と経緯 …… 15
  - 1. 調査要項 …… 15
  - 2. 発掘調査までの経緯 …… 15
- 第2節 調査の方法 …… 16
  - 1. 調査区の設定 …… 16
  - 2. グリッド設定 …… 16
  - 3. 包含層及び遺構の調査方法 …… 18
  - 4. 工事立会 …… 19
  - 5. 整理作業 …… 19
- 第3節 調査結果の概要 …… 20
  - 1. 平成14・15年度の概要 …… 20
  - 2. 平成20年度 III層の調査概要 …… 21
  - 3. 平成20年度 V層の調査概要 …… 21
- 第4節 遺跡の位置と周辺環境 …… 23
  - 1. 自然地理的環境 …… 23
  - 2. 歴史的環境 …… 23
  - 3. 調査区内の地形と地質 …… 24

### 第II章 続縄文・擦文文化期の調査

- 第1節 焼土 …… 30
- 第2節 遺物集中 …… 30
- 第3節 包含層出土遺物 …… 30
  - 1. 土器 …… 30
  - 2. 石器 …… 34

### 第III章 縄文時代の調査

- 第1節 住居跡 …… 39
- 第2節 住居様遺構 …… 44
- 第3節 土坑墓 …… 45
- 第4節 焼土 …… 49
- 第5節 Tピット …… 52

第6節	遺物集中	57
第7節	溝状遺構	60
第8節	包含層出土遺物	61
1.	土器	61
2.	剥片石器	63
3.	礫石器・石製品	68

#### 第IV章 まとめ

第1節	総括	77
第2節	住居跡	78
第3節	土坑墓	78

#### 写真図版

図版1～25	79～103
--------	--------

### 第3部 幌内7遺跡

#### 第I章 調査の概要

第1節	調査要項と経緯	105
1.	調査要項	105
2.	発掘調査までの経緯	105
第2節	調査の方法	106
1.	調査区の設定	106
2.	グリッド設定	106
3.	包含層及び遺構の調査方法	106
第3節	調査結果の概要	108
1.	Ⅲ層の調査概要	108
2.	V層の調査概要	109
第4節	遺跡の位置と環境	110
1.	遺跡の位置と周辺の環境	110
2.	調査区内の地形と地質	113

#### 第II章 アイヌ文化期の調査

第1節	住居跡	118
第2節	灰集中	127
第3節	建物跡	129
第4節	杭跡	132
第5節	焼土及び遺物集中	132
第6節	道跡	138
第7節	包含層出土遺物	138
	金属製品	138

### 第III章 擦文文化期の調査

第1節	土坑	141
第2節	焼土	141
第3節	遺物集中	145
第4節	包含層出土遺物	150
1.	土器	150
2.	石器	151
3.	金属製品	156

#### 第IV章 続縄文文化期の調査

第1節	焼土	157
第2節	焼土及び遺物集中	157
第3節	包含層出土遺物	162
1.	土器	162
2.	石器	162

#### 第V章 縄文時代の調査

第1節	土坑	166
第2節	焼土	171
第3節	Tピット	175
第4節	遺物集中	175
第5節	包含層出土遺物	177
1.	土器・土製品	177
2.	剥片石器	192
3.	礫石器・石製品・棒状原石	193

#### 第VI章 近現代の調査

第1節	建物跡	211
第2節	杭跡	211

#### 第VII章 まとめ

第1節	総括	213
第2節	1号平地式住居跡	213
第3部	北大式土器について	214

#### 写真図版

図版1～35	217～251
--------	---------

### 第4部 自然科学的分析

#### 第I章 理化学的分析

第1節	厚真町厚幌1遺跡・幌内7遺跡出土資料 の放射性炭素年代測定	253
-----	----------------------------------	-----

## 第II章 動植物遺存体同定

第1節 北海道勇払郡厚真町厚幌導水路事業	
調査遺跡出土の動物遺存体	257
第2節 北海道勇払郡厚真町厚幌導水路事業	
調査遺跡出土の炭化種子	261
1. 厚幌1遺跡出土の植物種子について	261
2. 幌内7遺跡出土の植物種子について	262

## 引用・参考文献 報告書抄録

# 挿 図 目 次

## 第1部 調査の概要

### 第I章

図I-1 厚幌導水路計画路線図(全線)	2
---------------------	---

### 第II章

図II-1 厚真町内遺跡分布図	7
-----------------	---

## 第2部 厚幌1遺跡

### 第I章

図I-1 周辺の地形及びグリッド配置図	17
図I-2 小グリッド模式図	18
図I-3 年度別調査範囲及び V層遺構分布図	22
図I-4 大正年間の周辺地形図	23
図I-5 基本土層柱状図(2遺跡分)	27
図I-6 発掘調査区セクション図	28
図I-7 工事立会区セクション図	29

### 第II章

図II-1 続縄文・擦文文化期遺構・遺物分布図	31
図II-2 III F-08 平面及び断面図	32
図II-3 III PB-01 平面及び断面図	32
図II-4 III PB-01 出土土器	33
図II-5 続縄文・擦文文化期包含層出土遺物	34

### 第III章

図III-1 縄文時代遺構分布図	36
図III-2 V H-03 平面・断面図及び遺物分布図	37
図III-3 V H-03 炉跡・ピット・柱穴 平面及び断面図	40
図III-4 V H-03 出土遺物	42
図III-5 V P X-01 平面及び断面図	44
図III-6 V P X-01 出土剥片石器	45

図III-7 V GP-01 平面及び断面図	46
図III-8 V GP-01 出土土器	47
図III-9 V GP-01 出土石器	48
図III-10 V F-17~19・V FCB-09 平面及び断面図	50
図III-11 V F-19・V FCB-09 出土遺物	51
図III-12 T P-96~98 平面及び断面図	53
図III-13 T P-99~101 平面及び断面図	54
図III-14 T P-102・103 平面及び断面図	55
図III-15 T P-101 出土礫石器	57
図III-16 V PB-02・03・V FCB-08 平面図	58
図III-17 V PB-02・03 出土土器	59
図III-18 V FCB-08 出土石器	59
図III-19 M I-01 平面及び断面図	61
図III-20 縄文時代包含層出土土器(1)	62
図III-21 縄文時代包含層出土土器(2)	63
図III-22 縄文時代土器接合線図	65
図III-23 縄文時代包含層出土剥片石器	70
図III-24 縄文時代包含層出土礫石器・石製品	71
図III-25 包含層出土剥片石器分布図	72
図III-26 包含層出土礫石器・石製品分布図	73
図III-27 縄文時代層位別剥片重量分布図	74
図III-28 縄文時代層位別礫重量分布図	75

## 第3部 幌内7遺跡

### 第I章

図I-1 調査区内地形 及び試掘トレンチ位置図	107
図I-2 周辺の遺跡及び旧道、 アイヌ語地名	111

図 I-3	周辺の地形及びグリッド配置図	111
図 I-4	旧石器遺物包含層 確認トレンチ位置図	114
図 I-5	Ta-d テフラ下層柱状図	114
図 I-6	調査区セクション図 (1)	115
図 I-7	調査区セクション図 (2)	116
図 I-8	調査区セクション図 (3) 及び堆積状態実測ライン	117

## 第二章

図 II-1	アイヌ文化期遺構分布図	119
図 II-2	III H-01 周辺遺構分布図	120
図 II-3	III H-01 平面及び炉跡断面図	121
図 II-4	III H-01 柱穴断面図	122
図 II-5	III SB-01~04・06 平面図	123
図 II-6	III H-01 出土遺物 (1)	124
図 II-7	III H-01 出土遺物 (2)	125
図 II-8	III AS-02 平面及び断面図	130
図 II-9	建物跡 3・4 平面及び断面図	131
図 II-10	建物跡 5・杭跡 (1) 平面及び断面図	133
図 II-11	杭跡 (2) ~ (5) 平面及び断面図	134
図 II-12	III F-03・05・III SB-05 平面及び断面図	136
図 II-13	III SB-05 出土礫	136
図 II-14	III BB-01 平面及び垂直分布図	137
図 II-15	道跡 平面及び断面図	139
図 II-16	アイヌ文化期包含層出土金属製品	140

## 第三章

図 III-1	擦文文化期遺構分布図	142
図 III-2	III P-01・02 平面及び断面図	143
図 III-3	III F-06~08 平面及び断面図	144
図 III-4	III F-06 出土土器	145
図 III-5	III PB-01・III SB-08 平面図	146
図 III-6	III PB-02・06 平面図	147
図 III-7	III PB-03・04 平面図	148
図 III-8	III PB-01~04・06 出土土器	149
図 III-9	III SB-07 平面図	151
図 III-10	III SB-07 出土遺物	152
図 III-11	III SB-07・08 出土礫	153
図 III-12	擦文文化期包含層出土土器	155
図 III-13	擦文文化期包含層出土	

礫石器・金属製品	155
----------	-----

## 第四章

図 IV-1	続縄文文化期遺構分布図	158
図 IV-2	III F-09~11・III PB-05・III FCB-01 平面及び断面図	160
図 IV-3	III PB-07・08 平面図	161
図 IV-4	III FCB-02 平面図	163
図 IV-5	III F-09・III PB-05・07・08・ III FCB-02 出土土器及び石器	163
図 IV-6	続縄文文化期包含層 出土土器及び石器	165

## 第五章

図 V-1	縄文時代遺構分布図	167
図 V-2	V P-01・05・12 平面及び断面図	168
図 V-3	V P-13~16 平面及び断面図	169
図 V-4	V P-05・12 出土土器	171
図 V-5	V F-01~04 平面及び断面図	173
図 V-6	V F-01~04 出土遺物	174
図 V-7	T P-01 平面及び断面図	175
図 V-8	V PB-01 平面図	176
図 V-9	V PB-01 出土土器	176
図 V-10	縄文時代包含層出土土器 (1)	181
図 V-11	縄文時代包含層出土土器 (2)	182
図 V-12	縄文時代包含層出土土器 (3)	183
図 V-13	縄文時代包含層出土土器 (4) ・土製品	184
図 V-14	縄文時代晚期土器胎土別 重量分布図	190
図 V-15	縄文時代晚期土器分布図	191
図 V-16	土器接合線図	195
図 V-17	縄文時代包含層出土剥片石器 (1)	197
図 V-18	縄文時代包含層出土剥片石器 (2)	198
図 V-19	縄文時代包含層出土礫石器 (1)	200
図 V-20	縄文時代包含層出土礫石器 (2)	201
図 V-21	縄文時代包含層出土礫石器 (3)	202
図 V-22	縄文時代包含層出土礫石器 (4) ・石製品・棒状原石	203
図 V-23	包含層出土剥片石器分布図	207
図 V-24	包含層出土礫石器等分布図	208
図 V-25	縄文時代層位別剥片重量分布図	209

第VI章

挿 表 目 次

第1部 調査の概要

第II章

表II-1 厚真町内遺跡一覧表(1) …… 8

表II-2 厚真町内遺跡一覧表(2) …… 9

第2部 厚幌1遺跡

第I章

表I-1 厚幌1遺跡試掘調査一覧表 …… 15

表I-2 グリッド設定関係杭座標値一覧表 …… 18

表I-3 厚幌1遺跡層位別概要一覧表 …… 21

表I-4 平成20年度出土遺物一覧表 …… 21

第II章

表II-1 続縄文・擦文文化期遺構群一覧表 …… 31

表II-2 III F-08 属性表 …… 32

表II-3 III PB-01 出土土器属性表 …… 34

表II-4 擦文文化期包含層出土土器属性表 …… 34

表II-5 続縄文文化期包含層出土  
剥片石器属性表 …… 34

第III章

表III-1 縄文時代遺構群一覧表 …… 35

表III-2 V H-03 属性表 …… 41

表III-3 V H-03 付属遺構属性表 …… 41

表III-4 V H-03 柱穴属性表 …… 41

表III-5 V H-03 出土土器属性表 …… 43

表III-6 V H-03 出土石器属性表 …… 43

表III-7 V PX-01 属性表 …… 45

表III-8 V PX-01 出土剥片石器属性表 …… 45

表III-9 V GP-01 属性表 …… 46

表III-10 V GP-01 出土土器属性表 …… 48

表III-11 V GP-01 出土石器属性表 …… 48

表III-12 V F-17~19・V FCB-09 属性表 …… 50

表III-13 V F-19・V FCB-09 出土石器属性表 …… 51

表III-14 Tピット 属性表 …… 56

表III-15 Tピット 逆茂木跡属性表 …… 56

表III-16 T P-101 出土礫石器属性表 …… 57

表III-17 V FCB-08 属性表 …… 58

表III-18 V PB-02・03 出土土器属性表 …… 59

表III-19 V FCB-08 出土石器属性表 …… 60

表III-20 MI-01 属性表 …… 60

表III-21 縄文時代包含層出土土器属性表 …… 64

表III-22 縄文時代包含層出土剥片石器属性表 …… 69

表III-23 縄文時代包含層出土  
礫石器・石製品属性表 …… 69

表III-24 剥片石器器種別グリッド集計表 …… 76

表III-25 礫石器器種別グリッド集計表 …… 76

第3部 幌内7遺跡

第I章

表I-1 幌内7遺跡試掘調査一覧表 …… 107

表I-2 グリッド設定関係杭座標値一覧表 …… 107

表I-3 幌内7遺跡層位別概要一覧表 …… 110

表I-4 出土遺物一覧表 …… 110

第II章

表II-1 アイヌ文化期遺構群一覧表 …… 119

表II-2 III H-01 属性表 …… 122

表II-3 III H-01 付属遺構属性表 …… 122

表II-4 III H-01 柱穴属性表 …… 122

表II-5 III H-01 出土遺物属性表 …… 123

表II-6 III H-01 礫属性表 …… 126

表II-7 III SB-01 礫属性表 …… 126

表II-8 III SB-02 礫属性表 …… 127

表II-9 III SB-03 礫属性表 …… 128

表II-10 III SB-04 礫属性表 …… 128

表II-11 III SB-06 礫属性表 …… 129

表Ⅱ-12	ⅢAS-02 属性表	130
表Ⅱ-13	建物跡3 柱穴属性表	132
表Ⅱ-14	建物跡4 柱穴属性表	132
表Ⅱ-15	建物跡5 柱穴属性表	132
表Ⅱ-16	杭跡 属性表	135
表Ⅱ-17	ⅢF-03・05 属性表	136
表Ⅱ-18	ⅢSB-05 礫属性表	137
表Ⅱ-19	ⅢBB-01 属性表	137
表Ⅱ-20	道跡 属性表	138
表Ⅱ-21	アイヌ文化期包含層 出土金属製品属性表	140
<b>第三章</b>		
表Ⅲ-1	擦文文化期遺構群一覽表	142
表Ⅲ-2	ⅢP-01・02 属性表	143
表Ⅲ-3	ⅢF-06~08 属性表	144
表Ⅲ-4	ⅢF-06 出土土器属性表	145
表Ⅲ-5	ⅢPB-01~04・06 出土土器属性表	150
表Ⅲ-6	ⅢSB-07 出土土器属性表	153
表Ⅲ-7	ⅢSB-07 出土礫石器・ 金属製品属性表	153
表Ⅲ-8	ⅢSB-07 礫属性表	154
表Ⅲ-9	ⅢSB-08 礫属性表	154
表Ⅲ-10	擦文文化期包含層出土土器属性表	156
表Ⅲ-11	擦文文化期包含層 出土礫石器・金属製品属性表	156
<b>第四章</b>		
表Ⅳ-1	統縄文文化期遺構群一覽表	158
表Ⅳ-2	ⅢF-09~11・ⅢFCB-01・02 属性表	162
表Ⅳ-3	統縄文文化期遺構出土土器属性表	164
表Ⅳ-4	ⅢFCB-02 出土石器属性表	164

表Ⅳ-5	統縄文文化期包含層出土土器属性表	164
表Ⅳ-6	統縄文文化期包含層出土石器属性表	164

### 第V章

表V-1	縄文時代遺構群一覽表	167
表V-2	VP-01・05・12~16 属性表	169
表V-3	VP-05・12 出土土器属性表	171
表V-4	VF-01~04 属性表	174
表V-5	VF-01~04 出土土器属性表	174
表V-6	VF-01・03・04 出土 剥片石器属性表	174
表V-7	TP-01 属性表	175
表V-8	VPB-01 出土土器属性表	177
表V-9	縄文時代包含層出土土器属性表(1)	185
表V-10	縄文時代包含層出土土器属性表(2)	186
表V-11	縄文時代包含層出土土器属性表(3)	187
表V-12	縄文時代包含層出土土器属性表(4)	188
表V-13	縄文時代包含層出土土器(5)・ 土製品属性表	189
表V-14	縄文時代晚期土器胎土別重量一覽表	190
表V-15	縄文時代包含層出土剥片石器属性表	199
表V-16	縄文時代包含層出土礫石器・石製品・ 棒状原石属性表	204
表V-17	剥片石器器種別グリッド集計表	205
表V-18	礫石器等器種別グリッド集計表	206

### 第VI章

表VI-1	建物跡1 柱穴属性表	212
表VI-2	杭跡 属性表	212

### 第VII章

表VII-1	厚真町アイヌ文化期住居跡一覽表	215
表VII-2	住居跡年代別一覽表	215

## 写真目次

### 厚幌1遺跡(2)

図版1-1	厚幌1遺跡 遠景	79
図版1-2	厚幌1遺跡 近景	79
図版2-1	N-32区 土層断面	80
図版2-2	N-33区 土層断面	80
図版2-3	立会地点作業状況	80
図版2-4	立会地点土層断面1	80
図版2-5	立会地点土層断面2	80

図版 2-6	立会地点土層断面 3	80	図版 7-6	VH-03 掘り上げ土内遺物出土状態	85
図版 3-1	Ⅲ層調査状況 1	81	図版 7-7	VH-03 掘り上げ土遺物出土状態 1	85
図版 3-2	Ⅲ層調査状況 2	81	図版 7-8	VH-03 掘り上げ土遺物出土状態 2	85
図版 3-3	ⅢPB-01 調査状況	81	図版 8-1	VGP-01 遺物出土状態	86
図版 3-4	Ⅳ層火山灰除去状況	81	図版 8-2	VGP-01 土層断面	86
図版 3-5	V層調査状況	81	図版 8-3	VGP-01 遺物出土状態拡大 1	86
図版 3-6	VH-03 調査状況	81	図版 8-4	VGP-01 遺物出土状態拡大 2	86
図版 3-7	VGP-01 調査状況	81	図版 8-5	VGP-01 完掘	86
図版 3-8	TP-98 調査状況	81	図版 9-1	VPX-01 遺物出土状態	87
図版 4-1	ⅢF-08 検出	82	図版 9-2	VPX-01 土層断面	87
図版 4-2	ⅢF-08 断面	82	図版 9-3	VPX-01 完掘	87
図版 4-3	N-31・32 区擦文土器出土状態	82	図版 9-4	VF-17 断面	87
図版 4-4	N-32 区 擦文土器出土状態	82	図版 9-5	VF-18 検出	87
図版 4-5	ⅢPB-01 出土状態 1	82	図版 9-6	VF-18 断面	87
図版 4-6	ⅢPB-01 土層断面	82	図版 9-7	VF-19 検出	87
図版 4-7	ⅢPB-01 出土状態 2	82	図版 9-8	VF-19 断面	87
図版 4-8	Ⅲ層 25%調査終了	82	図版 10-1	VF-19 遺物出土状態	88
図版 5-1	VH-03 長軸土層断面	83	図版 10-2	VF-19 石皿	88
図版 5-2	VH-03 短軸土層断面	83	図版 10-3	VF-19 石斧	88
図版 5-3	VH-03 床面遺物出土状態	83	図版 10-4	VPB-02 遺物出土状態	88
図版 5-4	VH-03. HF01 及び床面遺物出土状態	83	図版 10-5	VPB-02 遺物出土状態拡大	88
図版 5-5	掘り上げ土 検出	83	図版 10-6	VPB-03 遺物出土状態	88
図版 6-1	VH-03. HF01	84	図版 10-7	VFCB-08 遺物出土状態	88
図版 6-2	VH-03. HF01 短軸土層断面	84	図版 10-8	VFCB-09 遺物出土状態	88
図版 6-3	VH-03. HF01 長軸土層断面	84	図版 11-1	TP-96 土層断面	89
図版 6-4	VH-03. HF01 完掘	84	図版 11-2	TP-96 完掘	89
図版 6-5	VH-03 床面遺物出土状態	84	図版 11-3	TP-97 土層断面	89
図版 6-6	VH-03 ベンチ遺物出土状態	84	図版 11-4	TP-97 完掘	89
図版 6-7	HP01 断面	84	図版 11-5	TP-98 土層断面	89
図版 6-8	HP03 断面	84	図版 11-6	TP-98 完掘	89
図版 6-9	HP06 断面	84	図版 12-1	TP-99 土層断面	90
図版 6-10	HP03 完掘	84	図版 12-2	TP-99 完掘	90
図版 7-1	VH-03. PT01 検出	85	図版 12-3	TP-100 土層断面	90
図版 7-2	VH-03. PT01 断面	85	図版 12-4	TP-100 完掘	90
図版 7-3	VH-03. PT01 完掘	85	図版 12-5	TP-101 土層断面	90
図版 7-4	VH-03. PT01 遺物出土状態	85	図版 12-6	TP-101 完掘	90
図版 7-5	VH-03 掘り上げ土遺物出土状態	85	図版 13-1	TP-102 土層断面	91



図版 13-2	T P-102 完掘	91
図版 13-3	T P-103 土層断面	91
図版 13-4	T P-103 完掘	91
図版 13-5	T P-99~103	91
図版 14-1	M I-01 検出	92
図版 14-2	M I-01 土層断面	92
図版 14-3	M I-01 完掘	92
図版 14-4	L-32 区 遺物出土状態	92
図版 14-5	M-31 区 すり石	92
図版 14-6	N-35 区 遺物出土状態 1	92
図版 14-7	N-35 区 遺物出土状態 2	92
図版 14-8	N-35 区 遺物出土状態 3	92
図版 15-1	地すべり堆積土検出 1	93
図版 15-2	地すべり堆積土検出 2	93
図版 15-3	地すべり堆積土下土器検出状態 1	93
図版 15-4	地すべり堆積土下土器検出状態 2	93
図版 15-5	地すべり堆積土検出	93
図版 15-6	地すべり堆積土下北筒式土器 検出状態	93
図版 15-7	地すべり堆積土下 北筒式土器出土状態	93
図版 15-8	立会区調査終了	93
図版 16-1	III PB-01 出土土器	94
図版 16-2	縄文・擦文文化期包含層出土遺物	94
図版 17-1	V H-03 出土遺物 (1)	95
図版 18-1	V H-03 出土遺物 (2)	96
図版 18-2	V P X-01 出土石器	96
図版 19-1	V G P-01 出土土器	97
図版 19-2	V G P-01 出土石器	97
図版 20-1	V G P-01 出土礫	98
図版 21-1	V F・V FCB・T P 出土遺物	99
図版 22-1	V P B 出土土器	100
図版 23-1	縄文時代包含層出土土器	101
図版 24-1	縄文時代包含層出土剥片石器	102
図版 25-1	縄文時代包含層出土礫石器・石製品	103

## 幌内 7 遺跡 (1)

図版 1-1	北壁東側土層断面	217
図版 1-2	北壁西側土層断面	217
図版 1-3	J-30・31 区 北側土層断面	217
図版 1-4	K-29 区 北側土層断面	217
図版 1-5	東壁土層断面	217
図版 2-1	III H-01・III AS-02 検出	218
図版 2-2	HF01 検出	218
図版 2-3	HF01 断面	218
図版 2-4	HF02 検出	218
図版 2-5	HF02 断面	218
図版 3-1	III SB-01 出土状態	219
図版 3-2	III SB-02 出土状態	219
図版 3-3	III SB-03 出土状態 1	219
図版 3-4	III SB-03 出土状態 2	219
図版 3-5	III SB-04 出土状態	219
図版 3-6	III SB-06 出土状態	219
図版 3-7	III H-01 金属製品出土状態 1	219
図版 3-8	III H-01 金属製品出土状態 2	219
図版 4-1	III H-01 Ta-c 分布範囲断面	220
図版 4-2	III H-01 完掘	220
図版 4-3	HP-01 断面	220
図版 4-4	HP-05 断面	220
図版 4-5	HP-11 断面	220
図版 4-6	HP-19 断面	220
図版 4-7	HP-24 断面	220
図版 4-8	HP-29 断面	220
図版 4-9	HP-35 断面	220
図版 4-10	HP-05 完掘	220
図版 4-11	HP-11 完掘	220
図版 4-12	HP-29 完掘	220
図版 4-13	HP-35 完掘	220
図版 4-14	HP-36 完掘	220
図版 5-1	III AS-02 黒色土被覆状態	221
図版 5-2	III AS-02 シカ四肢骨出土状態	221
図版 5-3	III AS-02 検出	221
図版 5-4	III AS-02 長軸土層断面	221

図版 5-5	ⅢAS-02 短軸土層断面	221	図版 9-8	Ⅲ F-07 検出	225
図版 6-1	建物跡 3 ⅢKP-37 断面	222	図版 10-1	Ⅲ F-07 断面	226
図版 6-2	建物跡 3 ⅢKP-38 断面	222	図版 10-2	Ⅲ F-08 検出	226
図版 6-3	建物跡 4 完掘	222	図版 10-3	Ⅲ F-08 断面	226
図版 6-4	建物跡 4 ⅢKP-42 断面	222	図版 10-4	ⅢPB-01 出土状態 1	226
図版 6-5	建物跡 4 ⅢKP-43 断面	222	図版 10-5	ⅢPB-01 出土状態 2	226
図版 6-6	建物跡 4 ⅢKP-42 完掘	222	図版 10-6	ⅢPB-02 出土状態 1	226
図版 6-7	建物跡 4 ⅢKP-43 完掘	222	図版 10-7	ⅢPB-02 出土状態 2	226
図版 6-8	建物跡 5 完掘	222	図版 10-8	ⅢPB-03 出土状態	226
図版 6-9	建物跡 5 ⅢKP-23 断面	222	図版 11-1	ⅢPB-06 出土状態	227
図版 6-10	建物跡 5 ⅢKP-23 完掘	222	図版 11-2	ⅢPB-07 出土状態	227
図版 6-11	ⅢKP-10 断面	222	図版 11-3	ⅢSB-07 出土状態	227
図版 6-12	ⅢKP-19 断面	222	図版 11-4	ⅢSB-07 刀子	227
図版 6-13	ⅢKP-29・30 断面	222	図版 11-5	ⅢSB-07 鉤状鉄製品	227
図版 7-1	Ⅲ F-03 検出	223	図版 12-1	ⅢSB-08 出土状態	228
図版 7-2	Ⅲ F-03 断面	223	図版 12-2	J-30 区 板状鉄製品	228
図版 7-3	Ⅲ F-05 検出	223	図版 12-3	K-20 区 鉄製品	228
図版 7-4	Ⅲ F-05 断面	223	図版 12-4	Ⅲ F-09 検出	228
図版 7-5	ⅢSB-05 出土状態	223	図版 12-5	Ⅲ F-09 断面	228
図版 7-6	ⅢBB-01 出土状態	223	図版 12-6	Ⅲ F-10 検出	228
図版 7-7	ⅢBB-01 シカ四肢骨出土状態	223	図版 12-7	Ⅲ F-10 断面	228
図版 7-8	ⅢBB-01 シカ歯列出土状態	223	図版 12-8	Ⅲ F-11 検出	228
図版 8-1	道跡 検出	224	図版 13-1	Ⅲ F-11 断面	229
図版 8-2	道跡 検出状況	224	図版 13-2	ⅢPB-05 出土状態	229
図版 8-3	道跡トレンチ 2 検出	224	図版 13-3	ⅢPB-05・ⅢFCB-01 出土状態	229
図版 8-4	道跡トレンチ 4 検出	224	図版 13-4	ⅢPB-08 出土状態 1	229
図版 8-5	道跡トレンチ 2 土層断面	224	図版 13-5	ⅢPB-08 出土状態 2	229
図版 8-6	道跡トレンチ 4 土層断面	224	図版 13-6	ⅢFCB-02 出土状態	229
図版 8-7	K-32 区 内耳鉄鍋	224	図版 13-7	K-26 区 北大式土器注口部分	229
図版 8-8	K-32 区 銅製金具	224	図版 13-8	K-21 区 北大式土器	229
図版 9-1	Ⅲ P-01 土層断面	225	図版 14-1	V P-01 短軸土層断面	230
図版 9-2	Ⅲ P-01 完掘	225	図版 14-2	V P-01 完掘	230
図版 9-3	Ⅲ P-02 土層断面	225	図版 14-3	V P-05 土層断面	230
図版 9-4	Ⅲ P-02 完掘	225	図版 14-4	V P-05 完掘	230
図版 9-5	Ⅲ F-06 検出	225	図版 14-5	V P-12 土層断面	230
図版 9-6	Ⅲ F-06 断面	225	図版 14-6	V P-12 完掘	230
図版 9-7	Ⅲ F-06 擦文土器出土状態	225	図版 14-7	V P-13 土層断面	230

図版 14-8	V P-13 完掘	230	図版 19-5	建物跡 1 IIIKP-07 柱痕完掘	235
図版 15-1	V P-14 土層断面	231	図版 19-6	IIIKP-26 断面	235
図版 15-2	V P-14 完掘	231	図版 19-7	IIIKP-27 断面	235
図版 15-3	V P-15 土層断面	231	図版 20-1	III H-01 出土礫石器・金属製品	236
図版 15-4	V P-15 完掘	231	図版 20-2	III H-01 出土礫	236
図版 15-5	V P-16 土層断面	231	図版 20-3	IIISB-01 出土礫	236
図版 15-6	V P-16 完掘	231	図版 21-1	IIISB-02 出土礫	237
図版 15-7	V F-01 検出	231	図版 21-2	IIISB-03 出土礫	237
図版 15-8	V F-01 断面	231	図版 21-3	IIISB-04 出土礫	237
図版 16-1	V F-02 検出	232	図版 21-4	IIISB-06 出土礫	237
図版 16-2	V F-02 断面	232	図版 22-1	IIISB-05 出土礫	238
図版 16-3	V F-03 検出	232	図版 22-2	アイヌ文化期包含層出土金属製品	238
図版 16-4	V F-03 断面	232	図版 23-1	III F-06・IIIPB-01~04・06 出土土器	239
図版 16-5	V F-04 検出	232	図版 24-1	IIISB-07 出土遺物	240
図版 16-6	V F-04 断面	232	図版 24-2	IIISB-07 出土礫	240
図版 16-7	V F-01・04 周辺の遺物出土状態	232	図版 24-3	IIISB-08 出土礫	240
図版 16-8	VPB-01 出土状態	232	図版 25-1	擦文文化期包含層出土土器	241
図版 17-1	T P-01 土層断面	233	図版 25-2	擦文文化期包含層出土石器 ・金属製品	241
図版 17-2	T P-01 完掘	233	図版 26-1	続縄文文化期遺構出土遺物	242
図版 17-3	東側晩期遺物出土状態	233	図版 26-2	続縄文文化期包含層出土土器	242
図版 17-4	26・27 区 前期遺物出土状態	233	図版 26-3	続縄文文化期包含層出土石器	242
図版 17-5	20~27 区 縄文時代晩期 遺物出土状態	233	図版 27-1	V P・V F・VPB 出土遺物	243
図版 18-1	K-23 区 晩期土器	234	図版 28-1	縄文時代包含層出土土器 (1)	244
図版 18-2	L-23 区 晩期土器	234	図版 29-1	縄文時代包含層出土土器 (2)	245
図版 18-3	K-26 区 北海道式石冠片	234	図版 30-1	縄文時代包含層出土土器 (3)	246
図版 18-4	K-31 区 石製品	234	図版 31-1	縄文時代包含層出土土器 (4) ・土製品	247
図版 18-5	縄文時代調査終了	234	図版 32-1	縄文時代包含層出土剥片石器 (1)	248
図版 18-6	旧石器確認調査土層断面	234	図版 33-1	縄文時代包含層出土剥片石器 (2)	249
図版 18-7	旧石器確認調査終了	234	図版 34-1	縄文時代包含層出土礫石器 (1)	250
図版 19-1	建物跡 1 完掘	235	図版 35-1	縄文時代包含層出土礫石器 (2) ・石製品	251
図版 19-2	建物跡 1 IIIKP-01 断面	235			
図版 19-3	建物跡 1 IIIKP-03 断面	235			
図版 19-4	建物跡 1 IIIKP-07 断面	235			

## 第1部

# 調査の概要

## 第 I 章 調査の概要

### 第1節 調査要項と体制

#### 1. 調査要項

事業名：国営土地改良事業勇払東部（二期）地区 厚幌導水路建設用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部

受託者：厚真町教育委員会

調査遺跡：厚幌 1 遺跡（J-13-25）、北海道勇払郡厚真町字幌内 487-1、調査面積 1,098 m<sup>2</sup>  
（うち 371 m<sup>2</sup>は工事立会）

幌内 7 遺跡（J-13-103）、北海道勇払郡厚真町字幌内 949-1・7、調査面積 952 m<sup>2</sup>

受託期間：平成 20 年 4 月 1 日 ～ 平成 21 年 3 月 31 日

平成 21 年 4 月 1 日 ～ 平成 22 年 3 月 31 日（報告書刊行・発送業務）

#### 2. 調査体制

以下の調査体制は厚幌 1 遺跡および幌内 7 遺跡に共通する。

厚真町教育委員会 教育長 兵頭 利彦

生涯学習課社会教育グループ

参事 佐藤 照美 主査 森田 正樹 学芸員 乾 哲也（調査担当者）

嘱託職員 奈良 智法（調査担当者）・山田 和史（調査補助員）・大塩 裕子（事務員）

臨時職員 海津 孝之（測量技能作業員及び写真工）・中田鐘太郎（整備技能作業員）

他発掘作業員 12 名 整理作業員 8 名 (乾)

### 第2節 調査に至る経緯

#### 1. 国営土地改良事業勇払東部（二期）地区 厚幌導水路建設事業

町内を縦貫する厚真川中下流域には約 3,000ha 以上もの水田、畑作地帯が広がる胆振日高管内随一の穀倉地帯で、農業が厚真町の基幹産業となっている。これらの水田は流域沿いの沖積低地に形成されているため厚真川の洪水による冠水被害が生じている。さらに近年では一部の地域で農業用水が不足する事態も発生しており営農に深刻な影響が及んでいる。このため洪水調整や農業用水確保などを兼ね備えた多目的ダム「厚幌ダム」建設工事が平成 14 年度より着工された。

本遺跡の発掘調査原因となった国営土地改良事業勇払東部（二期）地区 厚幌導水路建設事業は国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部が進める農業農村整備事業である。北海道で事業を進めている厚幌ダム建設事業と連動し、平成 7（1995）年に北海道と厚真町との間で締結された「厚真川総合開発事業厚幌ダム建設工事に関する基本協定」に含まれ、厚幌ダムから安定的かつ効率的な農業用水の供給を目的として地下埋設の大口径パイプライン方式の農業用導水管である。導水管の直径は最大で 2.2m あり、幌内地区厚幌ダムから厚真町南部の鯉沼地区までの総延長は約 24.5km に達し、埋設施工のため最大で上幅約 17.5m の掘削幅が発生する。導水管方式は、厚幌ダムから高低差を利用し、経営体育成整備事業により大規模化した水田の代かき期間の短縮化及び深水かんがい対応等を行うために採用された方式である。自然流下を維持するために丘陵部の高

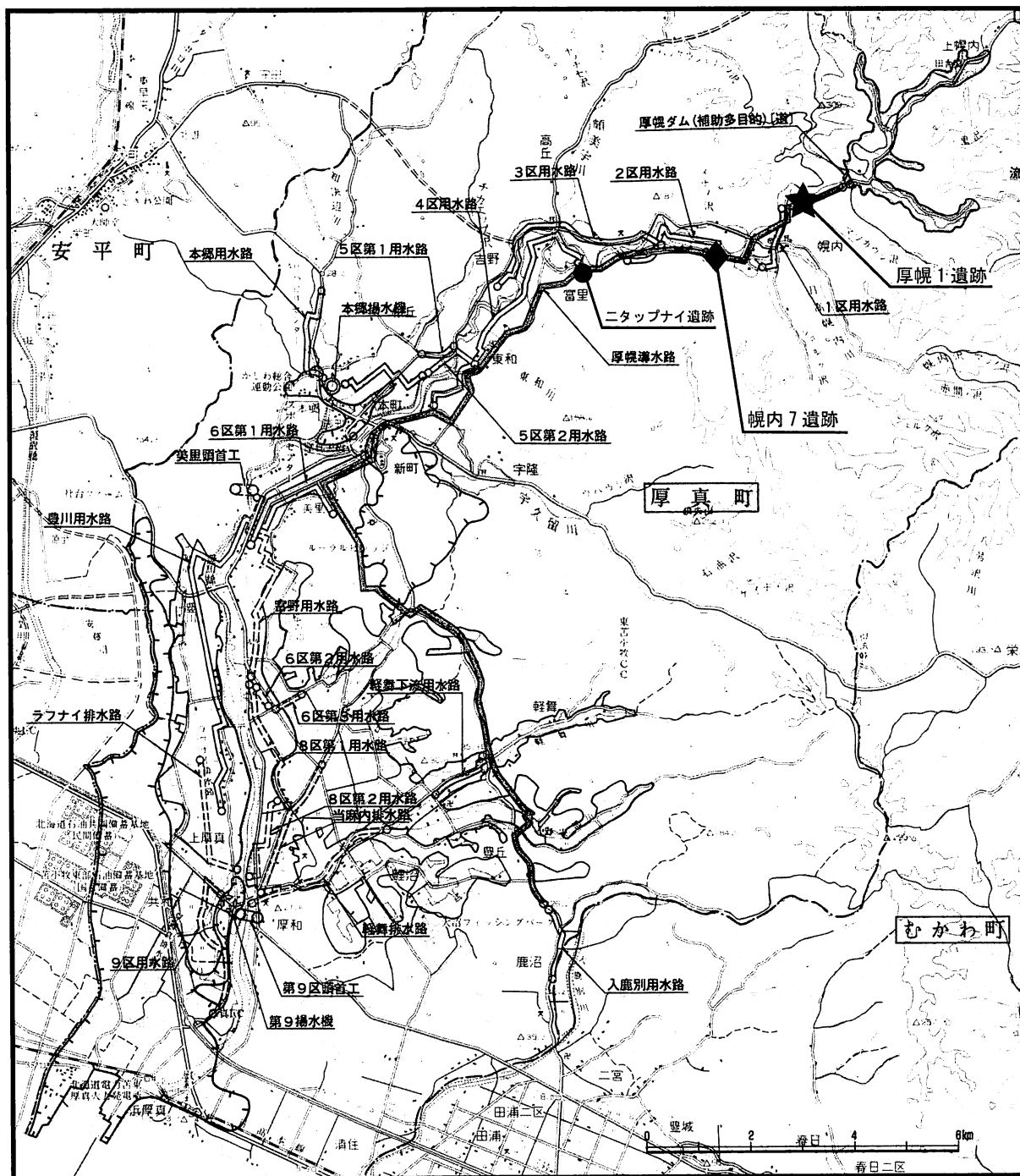


図 I-1 厚幌導水路計画路線図（全線）

地に分水施設を設置する必要性があり、沖積低地と丘陵部にまたがる計画路線となっている。また、計画路線は維持管理を考慮し、道路および耕地境界を選択し、かつ最短距離で送水する設計となっている。このため段丘縁辺部等に立地する埋蔵文化財包蔵地を避けることが不可能に近い部分が生じている。また、これと同時に支線用水路の整備も進め、地域用水機能の維持、増進も図り、厚幌ダム建設と連動した総合的な灌漑事業となっている。本格着工は平成18年より開始され、これに伴う埋蔵文化財発掘調査は平成19年度から着手し、富里地区ニタツナイ遺跡で行われた（厚真町教育委員会2009b）。

## 2. 厚幌導水路建設事業に係る所在確認調査と試掘調査

厚幌導水路建設工事に伴う発掘調査は、前述の厚幌ダム建設事業の本格化を踏まえ、平成 15 年 10 月に国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部（以下、室開建）より厚真町教育委員会（以下、町教委）経由で北海道教育委員会（以下、道教委）宛に「埋蔵文化財保護のための事前協議書」（室建企第 73 号 平成 15 年 10 月 15 日付）が提出されたことに始まる。

協議を進めるにあたり、所在確認調査は道教委で実施し、事務連絡調整等については担当部署の室開建胆振東部農業開発事業所（以下、開発事業所）と町教委で行うこととなった。しかし、室開建より幌内地区から富里地区にかけての 3.2km 区間について、早急な所在確認調査実施の要望があり、この区間に限り町教委が実施した（平成 15 年 12 月 10 日付）。町教委は所在確認調査報告書を道教委へ提出し、4 地点の「要試掘調査」の回答がされた（平成 15 年 12 月 17 日付け教文第 4779 号）。平成 19 年度に発掘調査したニタツナイ遺跡（厚真町教育委員会 2009b）や本書所収の幌内 7 遺跡の新規登載の端緒となった。

導水路計画路線のほぼ全線の所在確認踏査は、平成 17 年 4 月に道教委によって実施され、15 ヶ所の「要試掘調査」が回答された（平成 17 年 6 月 13 日付 教文第 78 号）。支線用水路の区間についても平成 16 年 11 月 29 日付け室建企第 95 号で事前協議書が提出された。本線支線ともに施工路線が確定次第、所在確認踏査や試掘調査が道教委によって行われ、これまでに試掘調査は 10 回実施され、14 地点の要発掘調査・要工事立会が回答されている。このうち新規登載が 9 遺跡、周知の遺跡が 5 遺跡で、要発掘調査面積は約 10,000 m<sup>2</sup>、工事立会が約 3,000 m<sup>2</sup>（平成 21 年 11 月 1 日現在）となっている。（乾）

## 第 II 章 厚真町の概要

### 第 1 節 地理的環境

厚真町は石狩低地帯南部の東縁、北海道胆振支庁の東部に位置し、夕張山地南部から太平洋に注ぐ二級河川厚真川水系に水田地帯が広がる、人口 4,905 人（平成 21 年 11 月 30 日現在）の農業の町である。町域の総面積は 404.56 km<sup>2</sup>で、流路 52.3km の二級河川厚真川流域を中心に広がり南北 32.5km、東西 17.3km と細長く、南部は約 6.5km にわたって太平洋に面し、勇払平野の東端に位置している。全国においても、源流部から河口までの 1 河川流域で行政区域を有する自治体は数少ない。北部は、夕張市や由仁町と接し、夕張山地南端域の標高 200～600m の山地が続き、総面積の約 70% を山林が占めている。東には夕張山地から続く低い山地を挟んでむかわ町と接し、北西には標高 100m 前後の山地性丘陵を挟んで安平町、西は厚真町域を含む苫小牧東部工業地帯（以下、苫東地区）で苫小牧市と接している。厚真の語源は 3 説ほどあるが、最も有力な説として「アットマム」(at-to-mam「向こうの湿地帯」)で、南部に広がる湿地帯に付けられたものが転訛したと言われている（厚真村 1956）。

町内は大きく 4 つの地区に分かれ、厚真川下流域の浜厚真・上厚真地区、中流域の厚真市街地周辺、中流から上流域の幌内地区があり、むかわ町と接する入鹿別川流域の鹿沼地区がある。本節では厚幌 1 遺跡、幌内 7 遺跡が位置する厚真町北部の概略を述べる。なお、町内の概要についてはニ

タツナイ遺跡の調査報告書（厚真町教育委員会 2009b）を参考とされたい。

北部の幌内地区は厚真川流域沿いの沖積地最奥部で、本流とシュルク川、幌内川の3河川の合流点に市街地が形成され、厚真川の河口から約28.5km、厚真町中心市街地より北東に約11kmの位置にある。厚真川下流域、南部の太平洋岸地域とは異なり年間の寒暖差が大きい内陸性の気候でもある。幌内市街地より下流側は厚真川流域に沖積低地が広がり左岸には河岸段丘が発達する中流域で、市街地より上流側は新第三紀の堆積岩を基盤とする山地が続き、厚真川本流域、支流には狭小な河岸段丘が発達する谷状地形を呈する上流域である。この幌内市街地は厚真川の上流域と中流域の結節地点であり、厚真川流路延長のおおよそ中間地点でもある。周辺の山地は標高400m以上の頂部は少ないが、小河川の浸食により比較的急峻な山稜を呈している。厚真川は夕張市、由仁町との1市2町の境界線付近、標高500m付近の夕張山地南域が源流部となっている。（乾）

## 第2節 歴史的環境

### 1. 埋蔵文化財包蔵地の概要

厚真町内には平成21年4月1日現在で109ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、後期旧石器時代から近世アイヌ文化期にいたるまでである（図Ⅱ-2 表Ⅱ-1・2）。遺跡の分布傾向として、開発行為の多寡に左右されるが、南部の苫東地区や厚真川下流域左岸から入鹿別川流域右岸にかけての仮称厚和台地や仮称鯉沼台地、厚真川中流域の支流河川沿い、北部の高丘地区および幌内地区にやや集中する傾向がある。遺跡の立地は、南部において湿地と隣接する台地縁辺部や湧水地付近、中部では厚真川沿いや小河川との合流点付近の河岸段丘縁辺部に多い。北部の山間部では、頗美宇（はびう）川流域の高丘地区や厚幌ダム水没地域内に多く分布する。これらは安平町安平地区や夕張市滝之上地区、むかわ町穂別・豊田地区に抜ける山越えのルート上の遺跡と考えられる。

時期的には、町内で最も古いものとして上幌内モイ遺跡で札滑型細石刃核を伴う石器集中が1ヶ所検出されており、AMS法炭素年代測定の結果、補正年代3点の平均で14,591.69±60yrB.P.が得られている（厚真町教育委員会2006a）。縄文時代の最も古いものでは豊沢4遺跡の試掘調査で早期前半の物見台系貝殻文土器片1点が出土し、時期が下って浜厚真3遺跡で東釧路Ⅱ式土器がややまとまって出土している（道埋文2003）。遺跡数の増加や規模の拡大は縄文時代前期前半の縄文尖底土器群の時期と考えられ、多量の被熱礫や哺乳網の焼骨片が出土する遺跡が厚真町南部から北部に至るまで多数確認されている。これ以降、漸移的に遺跡数が増加し、中期末葉から後期初頭の北筒・余市式期の遺跡数でピークを迎える。縄文時代後期中葉から後葉にかけての遺跡数が激減し、晩期前葉以降、続縄文文化期に再び増加し、擦文文化期前期は遺跡数が再び減少する傾向にある。このような各時期における遺跡数の偏りは苫小牧市における傾向と概ね一致している。苫小牧市との差異として擦文文化期中期から中世アイヌ文化期にかけてはやや遺跡数が増加する傾向がある。

### 2. 町内における埋蔵文化財調査の概要

町内における埋蔵文化財の調査・研究の始まりは、大正5年、現在の朝日遺跡と思われる地点から出土した縄文土器を教材として学校に保管する許可書が発行されたことである（厚真村郷土研究会1956）。以後現在まで大きく3期に分けることが可能で、概要のみを記す。

第1期は昭和20年代後半から40年代中頃にかけての厚真村（町）郷土研究会による資料収集、調査研究が活発に行われ、昭和31年には『厚真村古代史』（厚真村郷土研究会1956）が刊行されて



いる。現在の埋蔵文化財保護の基礎資料である「埋蔵文化財包蔵地カード」にも研究会の記載が多く、その功績は多大なものである。活動の中心的存在で、長く会長を務めていた故亀井喜久太郎氏は厚真村長にも就任しており、現在、厚真町の名誉町民として町民からも功績が讃えられている。

第2期は昭和48年から54年にかけて苫小牧市埋蔵文化財調査センターによって苫小牧東部工業地帯の開発に伴う大規模な試掘調査、発掘調査が行われた。厚真町域にかかるもので新規登載14遺跡、調査着手11遺跡があり、縄文時代早期～擦文文化期までの資料が得られている（苫小牧市教育委員会1986・1987・1990・1992）。厚真1遺跡では、この地域で初めてのTピットが確認され、縄文時代中期中葉の「厚真1式土器」（赤石1999）の標識遺跡ともなっている（苫小牧市教育委員会1986）。共和遺跡では苫東地区内で唯一の擦文文化期前期の竪穴式住居跡2軒が調査されている（苫小牧市教育委員会1987）。整理・報告後の出土遺物等は平成13年度に厚真町教育委員会へ返却されている。

なお、昭和54年9月に北海道教育委員会による「埋蔵文化財包蔵地資料整備の一般分布調査」が行われ、52遺跡の包蔵地カードが作成された。

第3期は平成10年以降、民間の開発事業に伴う試掘調査や工事立会調査が増加した（厚真町教育委員会2001a・b、2005、2006b、2008）。平成14年以降は厚幌ダム建設事業、平成19年からの厚幌導水路建設事業等の大型公共事業に伴う発掘調査が進められ、約50,000㎡の調査終了面積となっている（北海道埋蔵文化財センター2003、厚真町教育委員会2004、2006a、2007、2009a・b）。

これらの大規模開発に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成27年度まで継続される予定である。

### 3. 歴史時代

厚真周辺の記録として、1643（寛永20）年に編纂された北海道最古の文書とされる『新羅之記録』（松前1643）によると、「松前以東は阪川西は與依地迄人間往古する事、右大将頼朝卿進発して奥州の泰衡を追討し御ひし節、糠部津軽より人多く此国に逃げ渡って居住す。」とあり12世紀末葉には東北北部の和人が厚真周辺域まで進出していたことが伺われる。

厚真町とほぼ特定できる最初の記述は、1692（元禄5）年に書かれた『蝦夷記』（野澤1692）でシャクシャインの戦い（1669・寛文9年）に関連して「於多久見具印住處阿津摩ニテ討取ル」というものである。関連するものとして厚真町中部に位置する桜丘チャシ跡が想定されていたが、平成21年度のトレンチ調査により樽前bテフラより1～2cm程度黒色土を被覆することが判明し、より古い時期の中世アイヌ文化期のチャシ跡であることが判明している。この時期の遺跡は厚真川中上流域の厚幌ダム建設や厚幌導水路建設関連の発掘調査において多数の遺構遺物が検出されており、今後も増加するものと思われる。

これ以降の記録としては、1700年の『松前家臣支配所持名前帳』には鳥屋支配所として「志古津ノ阿津満」と記され、2ヶ所の鷹打場が設けられている。シャクシャインの戦いに係わる『津軽一統志』（相坂兵右衛門1731）の調査報告の中で、「あつまへつ～川有、戸田義兵衛 商場」と記されているが、産物や周辺のコタンについての記述は見られない。1739年頃に成立した『蝦夷商賣聞書』には義経伝説を交えた記述の中に「右之山奥ニアツマト申所ニ城跡ト申而松柏之古木沢山ニ繁リテアリ～」や1785年の「三国通覧図説蝦夷国全図」に「アヅマ」と記載があり、注記に「鬼ヒンノ出処」と記されている（林子平1785）。また、寛政から文化年間（18世紀末～19世紀初）の『東蝦夷地道中記』（1791）や『蝦夷記行』（谷元旦1799）、『拾遺北日本地図全図蝦夷地出産交通略図』などの紀行文や古地図に僅かな記述にすぎず、1800年に八王子千人同心等、数名の和人が浜厚真に

移り住むが定住することはない。近世アツマ場所や明治期の産物としては干鮭や椎茸、シナ縄、鹿皮が挙げられているが、詳細な記述はない。以降の紀行文や測量日誌にも記されるが、交通路であった勇払と鶴川間の厚真川河口周辺の簡単な記述に留まっている。本町の和人定住者としては、明治3(1870)年に新潟県人の青木与八が厚真川河口に渡船場を開業したことが始めとされている(厚真村 1956)。

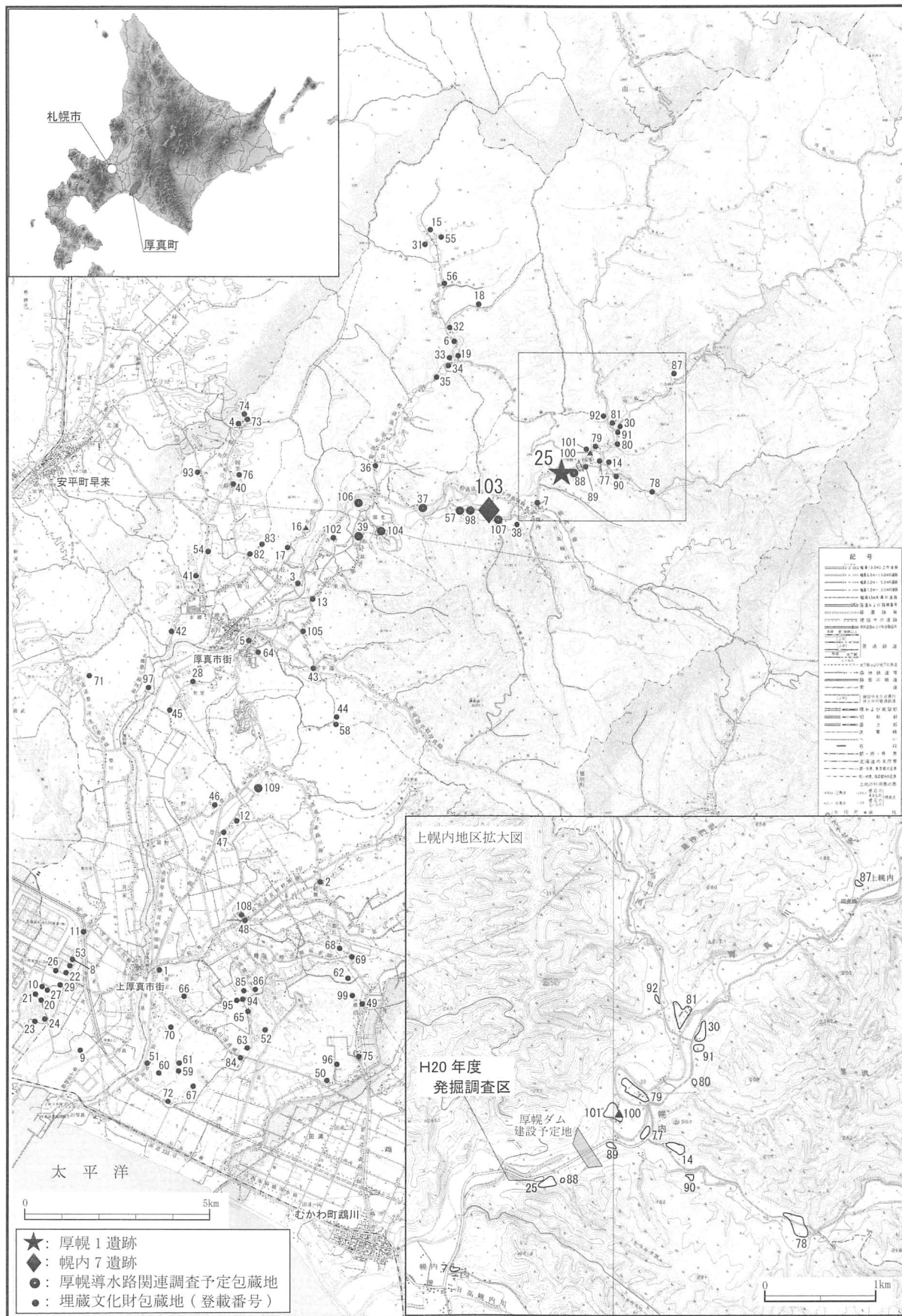
内陸部まで詳述したものは、松浦武四郎による『戊午安都麻日誌』(松浦・吉田 1962、松浦・秋葉他 1985)で、1857(安政5)年6月に苫小牧市勇払から厚真川河口を経てトンニカ(現富里)にて2泊している。蝦夷地探検の6回目で、町内には6ヶ所のコタンが記録されている。この中で比較的規模の大きいコタンでは、粟、稗、隠元、蕪などの畑作が盛んに行われているが、直前に襲った厚真川の洪水によって、畑地のほとんどが流されていることも記され、かつてより氾濫の多い河川であったことが伺える。宿泊したトンニカコタンのイカシユ(乙名板蔵)の家中について「西同所の土人等とは大に違ひ、凡行器の三十も有、耳盥の七ツ八ツ、筐の式ツ計、蝦夷太刀の二十五六振も懸、また此余短刀の七八本も有るよし語りけるなり。」(松浦・秋葉他 1985)とあり漆器や刀剣類の宝物が多く、その裕福さに驚いている。この他、猟犬としての北海道犬厚真系の活躍についても記述している(松浦・吉田 1962)。上流部に関しては聞き取りによる記述で、3穴の吊耳鉄鍋の残置伝承があるカニシユウ(現幌内・一里沢遺跡)も記述されている。

苫小牧駒澤大学 蓑島栄紀氏は、これらの松浦武四郎の記録から古交通路について論じており、トンニカコタンの記述や上流の上幌内モイ遺跡の搬入系遺物の出土量から鶴川水系や夕張水系への内陸交通ルートの存在についても述べている(蓑島 2005)。

これらの記録以前のアイヌ文化期については、厚幌ダム建設に係わる発掘調査で確認された厚幌1遺跡(厚真町教育委員会 2004)、上幌内モイ遺跡(厚真町教育委員会 2007a・2009a)、オニキシベ2遺跡の他、試掘調査でも上幌内2遺跡、一里沢遺跡がある。この他平成19年度に厚幌導水路建設事業関連の発掘調査で発見されたニタツプナイ遺跡(厚真町教育委員会 2009b)や本書の幌内7遺跡、平成21年度発掘調査の富里2遺跡がある。さらに、試掘調査で層位的確認がされた新町遺跡のほか、厚和1遺跡、幌内5遺跡では近世アイヌ墓が単独で発見されている。近年、発掘調査によってアイヌ文化期の遺跡が新たに発見されており、今後も資料の増加が期待される。

明治維新後、廃藩置県までは高知藩所管の時代があり、1873(明治6)年以降に開拓使苫小牧出張所や勇払郡役所の所管となる。現在の厚真町が行政単位として独立したのは1897(明治30)年4月1日に苫小牧外6ヶ村から分離独立し、厚真村戸長役場が現桜丘地区の専厚寺境内に設置されたことによる。

内陸部の和人開拓は明治20年代からで、ほぼ同時期に手掘りによる石油掘削も始められた。明治21年には開拓使から農事指導員が派遣され西老軽舞(現吉野地区)へ集住させられたアイヌ民族への勸農政策も実施されている。1892(明治25)年には鉄道室蘭線が開通し、近隣である厚真の内陸部も開拓移住者が増加した。これらは明治19年の国有未開地の開放によって北海道開拓の促進を図る「北海道土地払下規則」が制定されたことにもよる。以後、開拓移住者の増加が続き農業の町厚真町の礎が確立されていく。(乾)



図II-1 厚真町内遺跡分布図 (平成21年4月1日現在)

表Ⅱ-1 厚真町内遺跡一覧表(1)

登載 番号	種 別	名 称	時 代 等	文 献 等
1	遺物包含地	上厚真遺跡	縄文中～後期・統縄文・擦文	1. 魚形石器出土？.
2	遺物包含地	軽舞遺跡	縄文中期・統縄文	1
3	遺物包含地	朝日遺跡	縄文後～晩期・統縄文・擦文、(文献1:振老-近悦 府近郊)・晩期土偶	1・2・3. 土偶出土.
4	遺物包含地	幌里1遺跡	縄文中・晩期・統縄文(文献1:仁達幌)	1
5	遺物包含地	新町遺跡	縄文中期・統縄文・擦文・アイヌ(文献1:上振内)	1
6	遺物包含地	高丘1遺跡	縄文中期・統縄文	
7	遺物包含地	幌内1遺跡	縄文中期・統縄文(文献1:幌内)	1
8	集落跡	共和遺跡	縄文晩期・擦文	1・4
9	遺物包含地	浜厚真遺跡	縄文?	
10	溝穴遺構	厚真10遺跡	縄文中・晩期	5
11	遺物包含地	厚真11遺跡	縄文晩期	
12	遺物包含地	豊沢1遺跡	擦文(文献1:当麻内)	1
13	遺物包含地	東和遺跡	縄文中期・統縄文(文献1:東老軽舞)	1
14	集落跡	オニキシベ1遺跡	縄文中～後期・アイヌ?(旧幌内2遺跡)	1. ダム要発掘.
15	遺物包含地	高丘3遺跡	縄文中期	1
16	チャシ跡	桜丘チャシ跡	アイヌ、丘先式	6・7
17	遺物包含地	桜丘1遺跡	縄文晩期	
18	遺物包含地	高丘2遺跡	縄文?	
19	遺物包含地	高丘10遺跡	縄文?	
20	集落跡	厚真1遺跡	縄文中期	5
21	溝穴遺構	厚真2遺跡	縄文中期?	5
22	溝穴遺構	厚真3遺跡	縄文早・中～晩期・統縄文	8
23	集落跡	厚真4遺跡	縄文	
24	遺物包含地	厚真5遺跡	縄文前～晩期・統縄文・擦文	9
25	集落跡	厚幌1遺跡	縄文早～後期・中世アイヌ	10.本報告
26	集落跡	厚真7遺跡	縄文早・中～晩期・統縄文・擦文	4
27	集落跡	厚真8遺跡	縄文中～晩期	5
28	遺物包含地	美里2遺跡	縄文早・中期・アイヌ?	
29	墳墓	厚真12遺跡	縄文中・晩期・擦文	8
30	遺物包含地	上幌内1遺跡	縄文中期(旧幌内3遺跡)	
31	遺物包含地	高丘4遺跡	縄文	
32	遺物包含地	高丘5遺跡	縄文?	
33	遺物包含地	高丘6遺跡	縄文?	
34	遺物包含地	高丘7遺跡	縄文?	
35	遺物包含地	高丘8遺跡	縄文?	
36	遺物包含地	高丘9遺跡	統縄文	
37	遺物包含地	富里1遺跡	縄文前～晩期(文献1:楢山)	1. 導水路支線要発掘.
38	遺物包含地	幌内4遺跡	縄文中期?	
39	遺物包含地	チコマナイ遺跡	縄文?	導水路要立会.
40	遺物包含地	幌里2遺跡	縄文中期	
41	遺物包含地	本郷1遺跡	縄文中・晩期	
42	遺物包含地	本郷2遺跡	縄文後期	
43	遺物包含地	宇隆1遺跡	縄文・擦文・中世アイヌ	中世陶器出土.
44	遺物包含地	宇隆2遺跡	統縄文	
45	遺物包含地	美里1遺跡	縄文中期(文献1:振内)	1
46	遺物包含地	豊沢2遺跡	擦文	
47	遺物包含地	豊沢3遺跡	統縄文	
48	遺物包含地	鯉沼1遺跡	縄文	1
49	遺物包含地	鹿沼2遺跡	縄文中期	11
50	遺物包含地	鹿沼1遺跡	縄文	11
51	遺物包含地	厚和1遺跡	縄文中期・近世アイヌ(文献1:周文)	1・2・7
52	遺物包含地	鹿沼3遺跡	縄文中・晩期	
53	溝穴遺構	厚真13遺跡	縄文早～中・晩期・統縄文・擦文	12
54	遺物包含地	本郷3遺跡	縄文?	
55	遺物包含地	高丘11遺跡	縄文晩期	
56	遺物包含地	高丘12遺跡	縄文	
57	墳墓	幌内5遺跡	縄文前期・近世アイヌ	導水路要発掘
58	溝穴遺構	豊沢4遺跡	縄文早・中～後期	

表Ⅱ-2 厚真町内遺跡一覧表(2)

登録番号	種別	名称	時代等	文献等
59	遺物包含地	厚和2遺跡	縄文中期	
60	遺物包含地	厚和3遺跡	縄文後期	
61	遺物包含地	厚和4遺跡	縄文中期	
62	遺物包含地	鹿沼4遺跡	縄文	
63	遺物包含地	厚和5遺跡	縄文	
64	遺物包含地	新町2遺跡	縄文中・後期	
65	遺物包含地	鹿沼5遺跡	縄文後期	
66	遺物包含地	厚和6遺跡	縄文前期	
67	遺物包含地	浜厚真2遺跡	縄文早期	
68	溝穴遺構	鯉沼2遺跡	縄文中期	13
69	遺物包含地	豊丘遺跡	縄文前・中期	
70	集落跡	厚和7遺跡	縄文後期	
71	集落跡	豊川1遺跡	縄文前・後～晩期	14
72	溝穴遺構	浜厚真3遺跡	縄文早・後期、極めて多数のTピット群	15
73	遺物包含地	ニタツポロ沢遺跡	縄文後・晩期	
74	遺物包含地	幌里神社遺跡	縄文早・後期	
75	溝穴遺構	入鹿別沼遺跡	縄文	
76	溝穴遺構	幌里3遺跡	縄文	
77	集落跡	オニキシベ2遺跡	縄文中～後期・続縄文・擦文・中世アイヌ	ダム発掘済。
78	遺物包含地	オニキシベ3遺跡	縄文後期	ダム要発掘。
79	集落跡	上幌内モイ遺跡	旧石器・縄文早・中～後期・続縄文・擦文・中近世アイヌ	16・17・18・23。 ダム発掘済。
80	遺物包含地	一里沢遺跡	縄文前～中期・アイヌ	6・7・19。ダム要発掘
81	集落跡	シヨロマ1遺跡	縄文前・後期	ダム要発掘。
82	遺物包含地	東ニタツポロ1遺跡	縄文中・晩期	
83	遺物包含地	東ニタツポロ2遺跡	縄文中・晩期	
84	遺物包含地	浜厚真4遺跡	縄文中期	
85	集落跡	鯉沼3遺跡	縄文前～後期	20・21・24
86	遺物包含地	鯉沼4遺跡	縄文	
87	遺物包含地	イクバンドユクチセ遺跡	縄文後期、厚真川最上流域の遺跡	
88	遺物包含地	厚幌2遺跡	縄文前期	導水路要発掘。
89	遺物包含地	オニキシベ4遺跡	縄文	ダム要発掘。
90	遺物包含地	オニキシベ5遺跡	縄文中期	ダム要発掘。
91	溝穴遺構	上幌内2遺跡	縄文・アイヌ	ダム要発掘。
92	遺物包含地	シヨロマ2遺跡	縄文前・中期	ダム要発掘。
93	溝穴遺構	幌里4遺跡	縄文	
94	集落跡	厚和8遺跡	縄文中～後期	
95	遺物包含地	厚和9遺跡	縄文中期	
96	遺物包含地	鹿沼6遺跡	縄文	
97	遺物包含地	豊川2遺跡	続縄文・擦文	
98	遺物包含地	幌内6遺跡	縄文後期	導水路要発掘。
99	溝穴遺構	鹿沼7遺跡	縄文早～晩期、前期盛土遺構	
100	チャン跡	ヲチャラセナイチャン跡	中世アイヌ(丘先式)	ダム要発掘。
101	集落跡	ヲチャラセナイ遺跡	縄文早～後期・続縄文・擦文・中世アイヌ期	ダム要発掘。
102	遺物包含地	吉野1遺跡	縄文中・晩期	
103	集落跡	幌内7遺跡	縄文早～晩期・続縄文・擦文・中世アイヌ	本報告。
104	集落跡	ニタツナイ遺跡	縄文前～晩期・続縄文・擦文・近世アイヌ	22。導水路調査済
105	遺物包含地	宇隆3遺跡	縄文中期	
106	遺物包含地	富里2遺跡	縄文後・晩期、近世アイヌ	導水路要発掘。
107	遺物包含地	オコッコ1遺跡	縄文前～後期・擦文、前期盛土遺構	導水路要発掘。
108	遺物包含地	軽舞2遺跡	縄文前期・続縄文	
109	遺物包含地	豊沢5遺跡	縄文後期	導水路要発掘。

1: 厚真町郷土研究会 1956『厚真村古代史』2: 亀井喜久太郎 1957『厚真出土の土偶』『先史時代』3 3: 北海道大学付属図書館 HP 北方資料データベース 4: 苫小牧市教育委員会 1987『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』5: 苫小牧市教育委員会 1986『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅰ』6: 亀井喜久太郎・池田実 1976『厚真の旧地名を尋ねて』7: 亀井喜久太郎・池田実 1978『続厚真の旧地名を尋ねて』8: 苫小牧市教育委員会 1990『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅲ』9: 苫小牧市教育委員会 1974『苫小牧市東部工業地帯内埋蔵文化財分布調査報告書』10: 厚真町教育委員会 2004『厚幌1遺跡』11: 鶴川町教育委員会 1977『鶴川町遺跡分布調査報告』12: 苫小牧市教育委員会 1992『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅳ』13: 厚真町教育委員会 2001『鯉沼2遺跡』14: 厚真町教育委員会 2001『豊川1遺跡』15: (財)北海道埋蔵文化財センター 2003『厚真町 浜厚真3遺跡』16: 厚真町教育委員会 2006a『上幌内モイ遺跡(1)』17: 厚真町教育委員会 2007『上幌内モイ遺跡(2)』18: 養島栄紀『松浦武四郎の旅程から見た胆振東部・日高西部の古交通路』『前近代アイヌ民族における交通路の研究(胆振・日高1)』19: 松浦武四郎(高倉新一郎校訂・秋葉実解説) 1985『戌午東西蝦夷山川地理取調日誌』中 20: 厚真町教育委員会 2005『鯉沼3遺跡』21: 厚真町教育委員会 2006『鯉沼3遺跡(2)』22: 厚真町教育委員会 2009『ニタツナイ遺跡(1)』23: 厚真町教育委員会 2009『上幌内モイ遺跡(3)』24: 厚真町教育委員会 2008『鯉沼3遺跡(3)』

## 第三章 出土遺物の分類

### 第1節 土器

縄文時代早期から擦文文化期までの土器をローマ数字に群別し、アルファベットで時期や系統、器種に細分した。

#### 第I群土器 縄文時代早期に属する土器群

A類 貝殻条痕文土器

B類 早期後半の東釧路式土器群 絡条体圧痕文、組紐圧痕文などを施すもの

B1類 東釧路Ⅱ式に相当するもの

B2類 東釧路Ⅲ式、コッタロ式に相当するもの

B3類 中茶路式に相当するもの

B4類 東釧路Ⅳ式に相当するもの

#### 第II群土器 縄文時代前期に属する土器群

A類 縄文丸底・尖底土器群

A1類 美沢3式、網文式に相当するもの

A2類 トビノ式、静内中野式に相当するもの

A2類 a：胎土に滑石を含むもの

A2類 b：胎土に繊維を多量に含み厚手で脆い

B類 円筒下層式系土器群

B1類 円筒下層 a 式ないし b 式、虎杖浜 2 式に相当するもの

B2類 円筒下層 c 式ないし d 式、植苗式、大麻 V 式に相当するもの

#### 第III群土器 縄文時代中期に属する土器群

A類 中期前半の円筒上層式土器群

A1類 円筒上層 a 式または b 式に相当するもの

A2類 円筒上層 c 式または d 式、厚真 1 式に相当するもの

B類 中期後半から末葉の土器群

B1類 萩ヶ岡 1・2 式、天神山式に相当するもの

B2類 柏木川式に相当するもの

B3類 a：北筒式に相当するもの

B3類 b：煉瓦台式に相当するもの

#### 第IV群土器 縄文時代後期に属する土器群

A類 後期初頭の土器群

円形刺突文の有無に関わらず、貼付帯や地文縄文が多段の羽状構成の土器

A1類 a：古手の余市式

A1類 b：IVA1 土器に並存する沈線文系土器の非在地系土器

A2類 新しい段階の余市式、タブコブ式の古手階段状の器表面や斜め下方からの刺突文や縄端圧痕文が施される土器

B類 後期前葉の土器群

B1類 新手のタブコブ式、縦位の棒状貼付帯縄線文や地文縄文のみが施されるもの

B2類 手稲砂山式に相当するもの

B3類 入江式、大津式、白坂 3 式に相当するもの

C類 後期中葉の土器群

C1類 ウサクマイ C 式に相当するもの

C2類 手稲式に相当するもの

C3類 鮎澗式に相当するもの

D類 後期後葉の土器群

D1類 堂林式、御殿山式に相当するもの

#### 第V群土器 縄文時代晩期に属する土器群

A類 晩期前葉の土器群

A1類 爪形文や刺突文を施すもの

A2類 大洞 B・BC 式に相当するもの

B類 晩期中葉の土器群

B2類 縄線文や円弧文を施すもの 美々 3 式、ママチ I・II 群に相当するもの

B2類 大洞 C1・C2 式に相当するもの

C類 晩期後葉の土器群

C1類 ママチ III・IV・V 群に相当するもの

C2類 大洞 A・A' 式に相当するもの

#### 第VI群土器 続縄文文化期に属する土器群

A類 初頭から前葉の土器群

A1類 砂沢式・二枚橋式に並存する在地の土器

A1類 a：札幌市 H37 遺跡丘珠空港地点相当のもの

A1類 b：いわゆる汐見式相当。縄線文が施され、地文に帯縄文発達以前の土器

A2類 砂沢式・二枚橋式に並存する搬入系土器

A2類 a：砂沢式系土器

A2類 b：二枚橋式系土器

B類 恵山式系土器

- B1 類 アヨロ 2 類土器相当の土器  
 B1 類 a : アヨロ 2 類 a 相当の土器  
 B1 類 b : アヨロ 2 類 b 相当の土器  
 B2 類 アヨロ 3 類相当の土器  
 C 類 後北式系土器  
 C1 類 江別太 1 ~ 3 式土器  
 C2 類 後北 B 式土器 C3 類 後北 C<sub>1</sub> 式土器  
 C4 類 後北 C<sub>2</sub>-D 式土器  
 D 類 宇津内・下田ノ沢式系土器  
 D1 類 宇津内 II a 式土器  
 D2 類 宇津内 II b 式土器  
 E 類 後半期の弥生式土器  
 E 類 天王山・赤穴式系土器  
 F 類 北大式系土器  
 F1 類 北大 I 式土器  
 F2 類 北大 II 式土器
- 第 VII 群土器 擦文文化期に属する土器群**
- A 類 初頭に位置付けられるもので、十勝茂寄式および北大 III 式相当  
 B 類 甕形  
 B1 類 擦文「前期」に相当するもの  
 主に胴部上半に横走沈線のみを施す一群  
 B1 類 a : 軽い段により頸部を形成した無文もしくはは数条の横走沈線を廻らすもの  
 B1 類 b : 横走沈線を施すものもの  
 B2 類 擦文「中期」に相当するもの  
 主に口縁部文様帯が未形成もしくは単調な刻みのみの一群  
 B2 類 a : 横走沈線を地文とし、刻文を重ねるもの  
 B2 類 b : 刻文のみのもの
- B2 類 c : 無文のもの  
 B3 類 擦文「後期」に相当するもの  
 主に口縁部文様帯を形成した一群  
 B3 類 a : 横走沈線を地文とするもの  
 B3 類 b : 綾杉文主体のもの  
 B3 類 c : 斜位、あるいは縦位の沈線で鋸歯状文、「X」字状文等を施すもの  
 B3 類 d : 胴部文様帯を 3 段以上に区画した上で B3 類 a~c の文様要素を施したもの  
 B3 類 e : 無文のもの  
 B3 類 f : 口縁部文様帯に数条の沈線を廻らせたもの
- C 類 坏形  
 C1 類 台部を有さないもの  
 C2 類 平底の低い台部を有するもの  
 C3 類 平底の高台部を有するもの  
 C3 類 a : 口縁部に沈線を有するもの  
 C3 類 b : 体部に刻文を施すもの  
 C4 類 上げ底の高台部を有するもの
- D 類 壺形  
 E 類 ロクロ成形土器  
 E1 類 甕形  
 E2 類 壺形  
 E3 類 鉢形  
 E3 類 a : 軟質で内面黒色処理を施さないもの  
 E3 類 b : 軟質で内面黒色処理を施すもの  
 E3 類 c : 硬質で酸化炎焼成のもの  
 E3 類 d : 硬質で還元炎焼成のもの  
 E4 類 坏形

(奈良)

## 第 2 節 石器

石器の分類については、石器・製作技術・石材の関連性を考慮し、3 大別（剥片石器群、石斧石器群、礫石器群）を基準として分類した。また、III 層の石器の器種分類は、上幌内モイ遺跡（1）・（2）の分類基準を踏襲し、適時対応させることとした。石製品等はその他とした。

### III 層

**火打石** メノウ、チャート、石英（水晶）を石材とし縁辺部等に微細剥離が観察できるもの。

**滑沢面のある礫** 素材礫の形状を変えず、平滑な面を有するもの。線状痕はほとんど観察できない。

**線状痕のある礫** 肉眼観察において、明瞭な線状痕があるもの。

## V層 剥片石器群

### ポイント類

A 石鏃：長軸4cm未満のもので、薄手に作られているもの

- 1 細身・薄手のもの
- 2 無茎のもの
- 3 明瞭な茎部をもつもの
- 4 不明瞭な茎部をもつもの

B 石槍：長軸4cm以上のもの

- 1 明瞭な茎部をもつもの
- 2 不明瞭な茎部をもつもの

C 未製品・欠損品

### 石 錐

A 剥片の一部に機能部を作出したもの

B 柄と機能部の区別が明瞭なもの

C 柄と機能部の区別が不明瞭なもの

D 柄と機能部の区別が不明瞭で棒状のもの

E 他石器からの転用と思われるもの

### ナイフ・スクレイパー類

A つまみ付ナイフ

- 1 素材側縁のみに加工が施されるもの
- 2 素材片面全体に加工が施されるもの
- 3 素材両面全体に加工が施されるもの
- 4 明瞭な刃部の作出が認められないもの

## 石斧石器群

### 石 斧

A 磨製石斧

B 未製品1：剥離敲打により成品に近い形状まで整形されたもの

C 未製品2：自然面を残すが、擦り切り・剥離・敲打調整により素材礫形状が不明瞭なもの

D 未製品3：剥離・敲打調整が部分的に施され素材礫の形状を大きく残すもの

B 搔器

- 1 「ラウンド・スクレイパー」
- 2 「エンド・スクレイパー」

C 削器

- 1 「サイド・スクレイパー」
- 2 「コンケープ・スクレイパー」
- 3 「抉入石器」

D 欠損品

### ピエス・エスキュー

対向する縁辺に両極剥離による圧縮型の剥離痕が集積するもの。または、両極剥離の特徴である剪断面がみられるもの。

### RF・UF

素材縁辺に対し、連続する加工痕が半分以下の範囲にとどまるものを「RF」、使用によると考えられる連続した微細剥離痕を伴うものを「UF」として分類した。また、RFには定型石器の破片や未成品と思われるもので、分類が困難なものも含めた。

### 石 核

2単位以上の目的剥片が剥離されているもの

### 石斧片

石斧石材で、敲打調整および使用時に剥離された剥片と考えられるもので背面に敲打調整痕や研磨面が残るもの。剥離面や自然面のみのは「剥片」として扱った。

### 石斧原材

石斧石材として利用される緑色泥岩・片岩などの石材で、自然礫もしくは、単一の剥離面からなるもの



## 礫石器群

### たたき石

素材礫形状と敲打痕位置により分類した。また、敲打痕が面的に観察されるもののうち、重量が 1,700g 未満のものを対象とした。

- I 平面形が縦長のもの
- II 平面形が方形～不整形で幅広のもの
- III 平面形が円～楕円形のもの
- IV 破片
  - A 扁平のもの B 棒状または角柱状のもの
  - C 球形のもの

#### [敲打位置]

- 1 平坦面 2 端部・側縁
- 3 1・2が並存するもの

### すり石

- I 断面三角形の礫の稜に擦り面があるもの
- II 断面楕円形の礫の側縁に擦り面があるもの
- III 扁平礫の側縁に擦り面があるもの
- IV 北海道式石冠
- V 破片

### 砥石

同一方向の擦痕が明瞭に観察されるものを砥石として扱い、使用面の位置により細分した。

- I 板状礫を使用したもの
- II 転礫もしくはその破片を使用したもの
- III 角柱状のもの
- IV 破片
  - A 片面 B 両面
  - C 対面しない2面もしくは3面以上

### 石皿

設置による使用が考えられる大型のもので、素材の平坦面に多方向の擦痕、滑沢面が観察されるもの。または、台石と併用されるもののうち、擦痕・滑沢面が主体のもの。

- I 板状礫を使用したもの
- II 転礫もしくはその破片を使用したもの
- III 角柱状のもの
- IV 破片

### 台石

設置による使用が考えられる大型のもので、素材の平坦面に敲打痕が観察されるもの。または、石皿と併用されるもののうち、敲打痕が主体のもの。

- I 板状礫を使用したもの
- II 転礫もしくはその破片を使用したもの
- III 角柱状のもの
- IV 破片

### 石鋸

#### 加工痕のある礫

礫の一端に加工痕が観察されるもの。

- I 転礫の一部に剥離痕が観察されるもの
- II 礫の側縁に連続した剥離痕が観察されるもの
- III 破片

#### その他

石製品・軽石製品・棒状黒曜石原石

(山田)

第2部

# 厚幌1遺跡

## 第 I 章 調査の概要

### 第1節 調査要項と経緯

#### 1. 調査要項

遺跡名：厚幌1遺跡（J-13-25）

所在地：北海道勇払郡厚真町字幌内 487-1

調査面積：1,098 m<sup>2</sup>（うち 371 m<sup>2</sup>は工事立会）

受託期間：平成 20 年 4 月 1 日 ～ 平成 21 年 3 月 31 日

調査期間：（発掘）平成 20 年 5 月 14 日 ～ 平成 20 年 7 月 16 日

（整理）平成 20 年 11 月 1 日 ～ 平成 21 年 3 月 18 日

#### 2. 発掘調査までの経緯

厚幌1遺跡は北海道室蘭土木現業所（以下、室蘭土現）が事業者となる厚幌ダム建設事業に係る一般道道上幌内早来停車場線切替工事の所在確認、試掘調査で道教委により発見、登載された（事前協議書：平成 12 年 7 月 18 日付 室土厚幌 158 号 要試掘調査：平成 15 年 12 月 17 日付 教文第 4779 号 要発掘調査：平成 13 年 7 月 18 日付 教文第 4265 号）。道道路線の変更は不可能であったことから、町教委が平成 14・15 年度の 2 ヶ年で 9,360 m<sup>2</sup>の発掘調査を行った（厚真町教育委員会 2004）。

今回報告対象となった平成 20 年度の発掘調査範囲は、平成 17 年 4 月の所在確認踏査での要試掘調査の回答（平成 17 年 6 月 13 日付 教文第 78 号）から始まる。その後、切替道道との関係で設計路線変更が生じ事前協議書の再提出（変更）手続きを行っている（平成 18 年 11 月 24 日付 室建企第 86 号）。道教委回答の要試掘調査は導水路設計センターで 130m となった。

道教委による試掘調査は、この変更路線で平成 19 年 5 月に行われた。設計センターに 20m 間隔で 6 ヶ所のトレンチを掘開し、うち 5 ヶ所から遺物が出土した。これにより厚幌1遺跡の遺物包含層が平成 14・15 年度の調査区より厚真川方向（北側）の河岸段丘面縁辺部へ広がることが判明し、設計センターの延長で 130m の要発掘調査が回答された（平成 19 年 6 月 8 日付 教文第 1082 号）。

しかし、既に一次施工が完了していた切替道道の排水溝や道路下の横断管との施工関係より、これを北側へ迂回するルートに変更され室開建より 2 回目の変更協議書が提出された（平成 19 年 11 月 29 日付 室建企第 95 号）。これが、平成 20 年度の発掘調査区となっている。調査区の確定については、道道切替工事による素掘り側溝（12m×2m×1.5m）の法面から遺物を採集できなかったこと、平成 14・15 年度の遺物分布図と照合し、側溝より西側を「工事立会」とする道教委の回答がなされた（平成 19 年 12 月 17 日付 教文第 3771 号）。

表 I-1 厚幌1遺跡試掘調査一覧表

調査日	TR. No.	遺構		遺物											合計	
				土器		石器		剥片類		礫		他	小計			
		Ⅲ層	V層	Ⅲ層	V層	Ⅲ層	V層	Ⅲ層	V層	Ⅲ層	V層	Ⅲ層	Ⅲ層	V層		
平成19年5月	1	なし	なし	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	1
	2	なし	なし	-	1	-	2	-	-	-	4	-	-	7	7	
	3	なし	なし	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	
	4	なし	なし	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	1	
	5	なし	倒木痕	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	4	4	
	6	なし	なし	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	1	
合計	-	-	0	1	0	2	0	0	0	10	0	0	14	14		

平成20年度の調査範囲については、開発事業所で作成した道道切替部分の導水管埋設施工設計図面に従った掘削範囲とし、設計センター延長49.8m×幅16.2mで面積807㎡が発掘調査、工事立会が設計センター延長29.7m、面積472㎡となった。この面積で道教委からの「平成20年度埋蔵文化財発掘調査の実施について（通知）」（平成20年2月29日付 教文ス第4510号）によって町教委が受託することとなった。

その後、開発事業所との現地協議や室開建用地課への調査計画書等の提出を進め、平成20年4月1日付けで、幌内7遺跡発掘調査業務、ニタツナイ遺跡の報告書刊行業務を含めた「国営土地改良事業勇払東部（二期）地区 幌内7遺跡外用地内埋蔵文化財発掘調査」の委託業務契約を室蘭開発建設部長と厚真町教育委員会教育長との間に取り交わした（平成20年4月1日付 室建用第37号）。なお、発掘調査委託契約の締結に先立ち、文化財保護法94条第1項の規定により「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」が室開建より町教委を経て道教委へ提出されている（平成20年3月14日付 室建用第1121号）。

この他、一般道道上幌内早来停車場線から発掘調査現場への仮設進入路敷設のため道道の側溝にヒューム管を埋設することから、北海道室蘭土木現業所苫小牧出張所へ道路工事（維持）施工承認申請書と道路占用許可申請書を提出した。

発掘調査は町職員調査担当者1名、嘱託職員調査担当者1名、嘱託調査補助員1名、嘱託事務員1名と発掘調査作業員等14名の調査体制で5月14日から7月16日までの期間で行った。（乾）

## 第2節 調査の方法

### 1. 調査区の設定

厚幌1遺跡の発掘調査範囲は、厚幌導水管埋設工事で掘削施工される幅16.2m、延長は49.8mで、道教委の試掘調査によって回答された「要発掘調査」の導水路設計センターの延長に基づいている。調査区幅等は開発事業所の施工設計図面に基づき、面積も開発事業所のCADシステムより算出されたものである。現地での発掘区境界杭設定は有限会社幅田測量に委託した。

工事立会区についても、道教委回答文書に従った範囲とし、発掘調査終了と同時に導水管埋設工事の施工が計画されていた。開発事業所からは、施工時の立会であるものの遺構調査や遺物回収が生じた場合、工事の支障となることから工事着手前に埋蔵文化財に係る不確定要素を可能な限り除外しておく必要性、要望があった。町教委としては本調査に隣接する工事立会区であることから、一連の体制で重機による黒色土除去、遺構確認等を合わせて行うこととした。このため工事立会区の検出遺構、出土遺物も本書に一括して掲載した。

### 2. グリッド設定

平成14年度のグリッド設定は日本測地系公共座標に従い、厚幌1遺跡の立地する河岸段丘面全域を網羅する設定であった。基点は北東コーナーにA-0杭として図面上で設定している。平成20年度の調査区もこの範囲内にあり、これに従ったものである。ただし、平成20年度はグリッドポイントを14年度と同一地点としながらも、世界測地系公共座標数値に変換している。このため図面上での基点（A-0杭）等の公共座標値に端数が生じている。

グリッド網の各単位は5×5m四方のメッシュとした。グリッド呼称は南北方向のX軸ラインをA・B・C・・・のアルファベット列で、Y軸ラインを1・2・3・・・のアラビア数字列とした。各グリッ

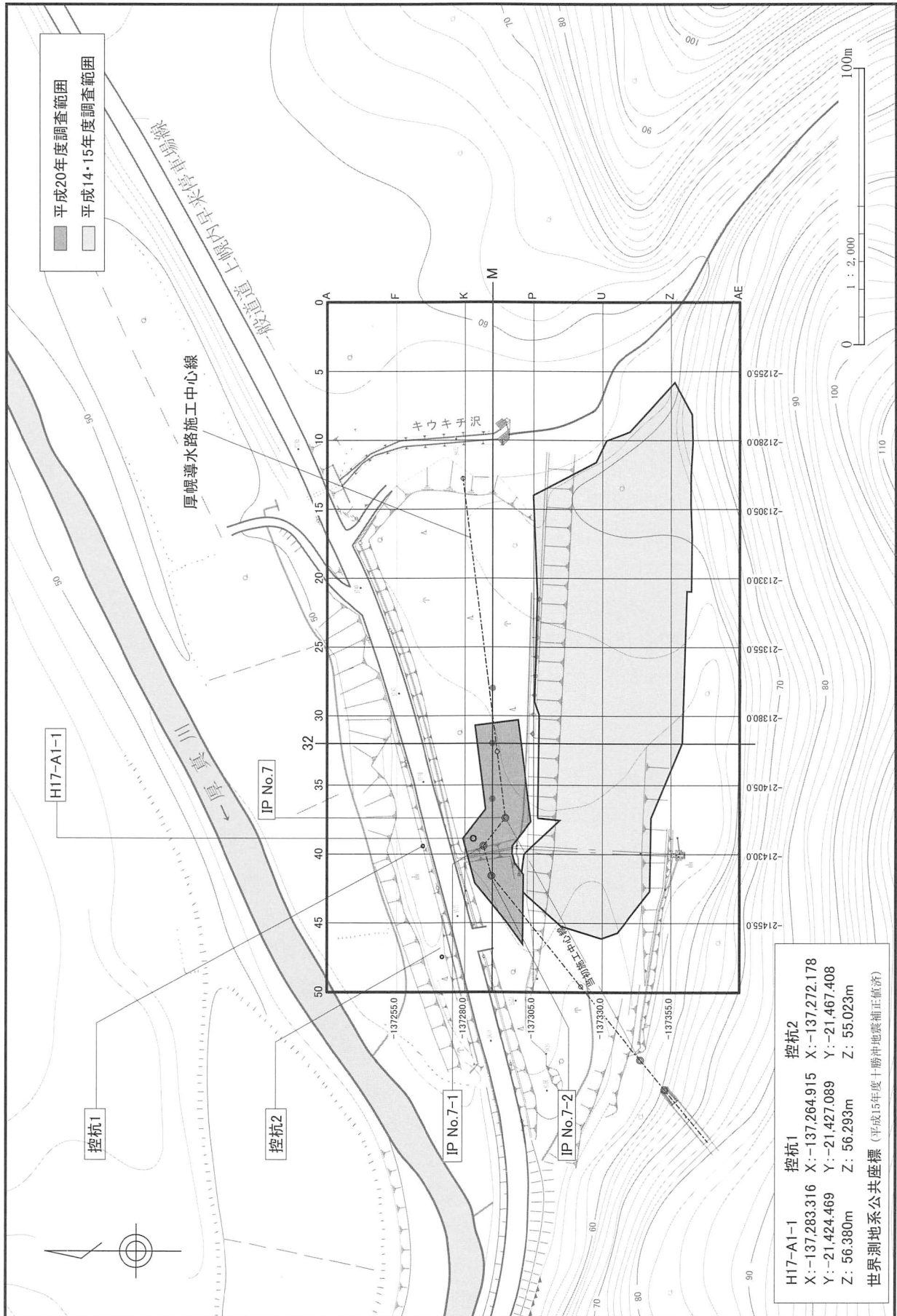


図 I-1 周辺の地形及びグリッド配置図

表 I-2 グリッド設定関係杭座標値一覧表

杭名	X座標	Y座標	Z座標
H17-A1-1	-137,283.316	-21,424.469	56.380
控杭1	-137,264.915	-21,427.089	56.293
控杭2	-137,272.178	-21,467.408	55.023

※ 世界測地系公共座標(平成15年度 十勝沖地震補正值済)

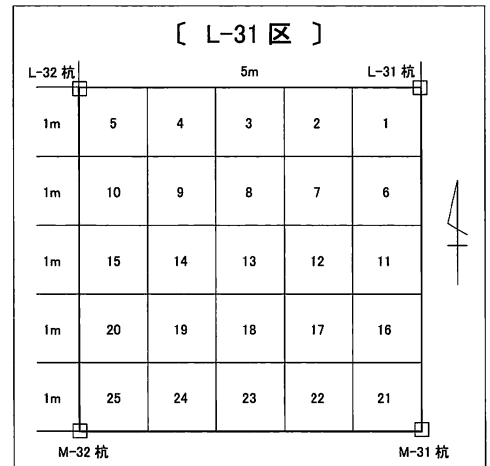


図 I-2 小グリッド模式図

ドの呼称は全体のグリッド網の起点同様に、グリッドに対し東北側に位置する杭名称とした。なお、報告書作成で図中の位置関係を示すためグリッドを1m四方に25分割した小グリッド(図I-2)を作成している。現地におけるグリッド杭設定は、基準杭設置を有限会社幅田測量に委託し、発掘調査区内に打設されていた1級基準点 H17-A 1-1 の移設に伴う控杭からのトラバース測量で設置した。調査区内には樽前b火山灰除去後のⅢ層黒色土上面 M-32・36 杭、調査区外に M-28 杭の3本を設定とした。この基準杭から調査補助員と測量技能作業員が光波式トータルステーションを用いて調査区内のグリッド杭の設置を行っている。

絶対高は、グリッド基準杭打設と同時にっており、上記の1級基準点より導き出したものである。調査にあたり基準杭から各グリッド杭への移設も行った。

### 3. 包含層及び遺構の調査方法

調査区内の地目はカラマツの植林地で伐採は開発事業所で行い、町教委へは伐採後の引渡しとなった。表土・火山灰除去は調査員の立会のもと外部委託したバックホーで行い樹根を残しての除去作業となった。火山灰は3~5cm前後残し、Ⅲ層黒色土上面まではジョレンを用いての人力による火山灰除去を行い、同時にチェンソーを用いて樹根の枝根除去作業を行った。

これらの作業終了後のⅢ層上面で遺跡近景の撮影を行った。その後、調査補助員と測量技能作業員がオートレベルを用いて地形測量を行い、合わせて攪乱範囲なども光波式トータルステーションとデータコレクター、(株)シン技術コンサル図化ソフト「遺跡管理システム」でデジタル記録した。なお、この時点で発掘区北東側に縄文時代後期初頭の竪穴式住居跡 VH-03 の窪みを検出している。

Ⅲ層の包含層調査は、平成14・15年度の発掘調査で続縄文文化期から中世アイヌ文化期の遺物が出土していたことから、調査区全面のⅢa~Ⅲb層上位を移植ゴテで掘り下げたが、出土遺物はほとんど無く、以下の包含層を25%調査とした。なお、Ⅲ層における包含層調査はこれまでの厚真町内における発掘調査成果から層位毎の面的調査に重点をおき遺構遺物の時期決定に注意した。出土遺物の取り上げは全点に遺物番号を付番し、調査員による層位と種別を確認したうえで、光波式トータルステーションとデータコレクターによるXYZ座標(世界測地系公共座標)の位置情報をデジタル記録し、取り上げた。この時、手簿(日付・グリッド・層位・遺物名等)の記載も行い、データ入力ミスの補完を行っている。

Ⅲ層の調査終了後は、バックホーで人力調査残存のⅢ層とⅣ層(樽前cテフラ)の除去を行った。

除去後のV層上面で再度、グリッド杭の打設を行った。なおグリッド杭名は同一名称となることから、V層グリッド杭名の末尾に「B」を記入して区別した。

V層の包含層調査は、移植ゴテで約5cm毎の層厚で調査を進めた。竪穴住居跡（VH-03）周辺は遺物の密度が高いことが想定されたので、東側より調査を開始した。出土遺物は平成14・15年度の調査を踏襲し、全点XYZ座標を記録して、個々に取り上げた。

遺構調査は包含層調査で検出した焼土や灰集中などの平面的遺構については、周囲の遺物出土状態との検討も行い、検出状態の撮影後、平面形を光波式トータルステーションで三次元データとして記録した。その後長軸ラインを半裁する方法や規模の大きいものは十字にトレンチ設定し、堆積状態の実測、撮影等の諸記録を行った。土坑や柱穴などの遺構はⅢc層上位から下位、またはVc層からVI層にかけての層位面でジョレンによる精査を行い、検出作業を行った。平面形や規模に合わせてトレンチを掘開し、遺構認定後に堆積状態の実測を行った。完掘後、写真撮影を行い、平面形およびエレベーションを光波式トータルステーションで記録した。なお柱穴に関しては、確認面から箱掘りのトレンチを設定し、堆積状態等の観察確認を行ってから柱穴認定を行っている。

遺構に準じる集中出土遺物等は、包含層の面的調査時に集中範囲の広がりを確認し、出土状態の撮影、図化を行った。出土状態の図化はトータルステーションで遺物輪郭線を記録し、5分の1ないしは10分の1に縮小したプリントアウトの図面を利用し詳細図化を行った。

なお、遺構名は平成14・15年度に継続した番号で付番し、遺物番号は便宜的に35,001からの付番とした。諸記録については㈱シン技術コンサルの「遺跡管理システム」を活用し、報告書図版作成においても作業の簡素化と効率化の向上につながった。撮影記録は、35mm一眼カメラではリーバースルフィルムとデジタルカメラで行い、一部については6×7中盤カメラを使用している。

#### 4. 工事立会

工事立会区は調査補助員、発掘作業員の立会のもと、Ⅲ層からV層をバックホーで10～20cmの層厚で数回に分けて掘削した。掘削中に焼土2ヶ所（VF-18・19）、フレイクチップ集中1ヶ所（VFCB-09）を検出し、周辺も含め移植ゴテによる調査に切り替えた。遺構確認面はVII層上面とし、Tピット5基を検出した。この他、平成14年度調査で発見された地震起因による地すべり堆積物の一部を検出し、範囲等を記録した。

#### 5. 整理作業

一次整理は、発掘調査期間中から雨天日や10月の日没後の時間に水洗、注記作業、フローテーション作業を行った。整理期間では遺構や包含層遺物の各担当調査員が調査区遺構名や層位、種別、細分類、材質等の台帳確認作業を行った。また並行してフローテーション処理後の二次選別作業も行った。

二次整理は遺構堆積図や遺物出土状態等の実測図のスキャニング作業、「遺跡管理システム」による平面図データの変換、遺構平面図と堆積図の照合作業、各種遺物の接合・復元・実測・拓本等の作業を行った。遺構遺物のトレース作業・編集については、パソコン（0s Windows Adobe IllustratorCS）で行った。なお、各種金属製品や炭化樹皮などの脆弱遺物については、パソコン上での写真実測を行い、剥片石器の撮影・実測については㈱シン技術コンサルに委託した。その他の遺物写真撮影は35mm一眼レフデジタルカメラで行い、パソコン（0s Windows Adobe Photoshop7.0）での等倍化、陰影等の切り抜き作業、コントラスト補正等を行っている。報告書掲載図や写真図版、一覧表の編集・版組みも上記のソフトで行い、本文のMicrosoft Word文書と合わせて印刷所へデジタル入稿している。

遺物の収納保管は報告書掲載遺物を図版毎に行い、それ以外のものは分類および調査区毎にコンテナに収納し町内の廃校舎に収蔵している。なお、金属製品の保存処理および分析は（財）岩手県文化振興事業団へ委託し、整理事務所の防湿庫へ収蔵している。（乾）

### 第3節 調査結果の概要

#### 1. 平成14・15年度の概要

平成14・15年度の道道切替工事に伴う発掘調査の概要は、縄文時代早期後葉から近現代までの遺構・遺物が検出された（厚真町教育委員会2004）。調査区は厚真川支流キウキチ沢に面した河岸段丘縁辺部から地すべり堆積物のマウンド地形までを含み、東西に切替道路設計センターの延長で約200m、南北に道路盛土幅の最大56mで、調査面積は9,360㎡である。出土遺物点数は69,035点で、縄文時代早期後葉の中茶路式土器から中世アイヌ文化期の内耳鉄鍋までの時代幅にわたる。

Ⅲ層の検出遺構は中世アイヌ文化期の焼土7ヶ所、集石7ヶ所、灰集中2ヶ所、獣骨集中7ヶ所、炭化物集中22ヶ所がある。これらの遺構群は調査区の東側に分布が偏っており、平成20年度の調査では当該期の遺物が皆無であることから限定された分布域と思われる。出土遺物は遺構分布と重なる範囲より1,898点が出土しており、中世アイヌ文化期の棒状礫、シカを主体とする未被熱獣骨、金属製品のほか、続縄文時代前葉の土器片（1個体分）、擦文土器片1点が出土している。

特筆すべきものは、被熱した棒状礫の集中（ⅢSB-01）と内耳鉄鍋片、砥石、星兜片、靴（こはぜ）の集中区でいわゆる「物送り」の跡と思われる。ほぼ同様な類例として安平町大町2遺跡（北海道埋蔵文化財センター2006）がある。また、ⅢCB-03とした炭化種子集中区からは短粒形裸性オオムギを主体に、アワやキビ、アズキなどの栽培種とブドウ科やキハダ属などの野生種が多量に出土している。短粒形裸性オオムギはユーラシア大陸起源のオホーツク文化に伴って出現するもので破片も含め876粒が出土している。この地域、時期のものとしては初例となっている（吉崎・椿坂2004）。この炭化物集中区には焼土が伴っていないことから、別地点で生成された炭化種子等をこの地点へ持ち込んで投棄されたものであり、「送り」の行為の可能性が示唆される。炭化種子3点のAMS法放射性炭素年代測定の結果、いずれも14世紀代の測定結果が得られている（厚真町教育委員会2004）。この他、樽前bテフラ直下の近世初頭と思われる時期で、大木の樹根に伴う灰の集中、シカ頭蓋骨の出土地点を2ヶ所（ⅢAS-01・02）検出した。大木を意識したシカ送り場跡と思われる（高橋2004）。

樽前cテフラより下層のⅤ層調査では、縄文時代後期初頭の竪穴式住居跡2軒とTピット95基、土坑11基などを検出した。出土遺物は、縄文時代早期後葉から後期初頭にかけての時期のものが67,137点出土している。竪穴式住居跡は、いずれも縄文時代後期初頭の住居跡で床面より伊達山式期の余市式が出土している。このうちVH-01は板状礫を用いた方形配置の石組炉で、床面はベンチ構造を有し、壁際の楕円形ピットや掘り上げ土を伴う点など平成20年度に調査した住居跡（VH-03）との共通性が強い。平成15年度の調査の最大の特徴としては、95基のTピット群の検出である。分布状況は遺跡が立地する河岸段丘面背後の山体側に高密度で、急斜面に対しての構築場所の選択が読み取れる。この様なTピットの立地は上幌内モイ遺跡でも確認されている（厚真町教育委員会2009a・）。出土遺物では、縄文土器の胎土に高温型石英結晶粒を多量に含む仮称富良野盆地系土器が提唱され、内陸交通路について示唆されている（厚真町教育委員会2004）。

その他の特記事項としては、樽前d火山灰降下（約8,000yBP）以降、樽前c火山灰降下（約



2,500yBP) 以前の石狩低地帯東縁活断層の地震起因による地すべり堆積物が確認されている(田近・大津 2004)。平成 20 年度の調査においても同一堆積物の先端部が確認されている。(乾)

## 2. 平成 20 年度 III 層の調査概要

樽前 b テフラ直下の遺構及び遺物は認められなく、III b 層下位から遺物が調査区南東側を中心に僅かな分布域を示している。包含層から出土する土器は、いずれも横走沈線地に鋸歯文と刻みが認められる擦文中期後葉の資料である。遺構は調査区と立会区の境界付近にあたる M-39 区の倒木痕から焼土が 1 ヶ所単独で見つかっているほかは、続縄文文化期の土器集中が 1 ヶ所検出されるのみである。平成 14・15 年度の調査においても、III 層の遺構分布範囲は東側に集中する傾向にあり、本年度の遺物出土分布域は平成 14・15 年度の北側低位面に主な分布域を示すことから同一の資料であると思われる。(奈良)

## 3. 平成 20 年度 V 層の調査概要

樽前 c テフラと樽前 d テフラに狭在する黒色腐植土の本層からは、縄文時代前期前葉から中期、後期初頭までの資料が出土している。遺物の分布範囲に時代ごとの特徴はなく、調査区全体に遺物が散在している。

検出遺構は、竪穴式住居跡 1 軒、住居様遺構 1 基、焼土 3 ヶ所、土坑墓 1 基、Tピット 8 基検出されている。竪穴式住居跡は調査区北壁に半分ほどかかり、規模は不明であるが、ベンチ構造をもち、床面とベンチ上に余市式土器を伴っている。また、付属遺構として床面ほぼ中央に石組炉が配置され、南東側端部にはピットが構築されている(図 III-2)。土坑墓は坑内に大型の板状礫と前期前葉の静内中野式土器が折り重なるように出土し、土坑墓の様相を示していたが他に墓と断定できる資料は出土していない。Tピットは 8 基検出しているが、調査区より西側の立会区域で 5 基と分布数が多い。Tピットは平成 14・15 年度からの配列に組み込まれるような地点に検出されていないが、西側の立会区域で「A1 型」の 3 基が並列している。

出土土器は余市式土器が主体的で、調査区全域に広がり全体の 55%と半分以上を占めている。次いで前期の土器が 18%と土坑墓の北側に殆どの分布を示しているが、胎土に滑石を多く含む破断面の風化は著しいため接合には至っていない。胎土に石英粒を多く含む富良野盆地系土器も僅かながら出土しているが、在地系土器との分布や層位の違いなどは認められなかった。また、立会区西側先端に地すべり地形の断面が検出されたが、この地すべり堆積物より下層から北筒式土器が出土したため、地すべりは北筒式期以降に発生した現象と捉えることができた。(奈良)

表 I-3 厚幌1遺跡 層位別概要一覧表

項目	III 層		V 層	合計
	擦文	続縄文		
竪穴住居跡	-	-	1	1
Tピット	-	-	8	8
焼土	1	-	3	4
竪穴様遺構	-	-	1	1
溝状遺構	-	-	1	1
土器集中	-	1	2	3
フレイクチップ集中	-	-	2	2
遺物点数	447		8,307	8,754
表採遺物点数	1			1
遺物総点数				8,755

表 I-4 平成20年度出土遺物一覧表

層位	細分類						計
	土器	剥片石器	礫石器	剥片類	礫	その他	
III層	432	1	-	6	8	-	447
V層	686	124	37	7,135	324	1	8,307
表採	-	1	-	-	-	-	1
計	1,118	126	37	7,141	332	1	8,755



図I-3 年度別調査範囲及びV層遺構分布図

## 第4節 遺跡の位置と周辺の環境

### 1. 自然地理的環境

厚幌 1 遺跡は厚真町幌内地区に所在し、厚真川河口から約 30km、厚真町市街地から直線で東北東に約 10km の厚真川上流域左岸に位置し、標高 50～60m の河岸段丘上に立地する。堆積状態から樽前 d テフラ降下によって離水形成した河岸段丘である。段丘基盤層は周辺の山体も含め第三紀堆積岩の「振老層」(石田・松野 1960) で、周辺の露頭で砂岩泥岩の互層が観察できる。厚幌 1 遺跡より上流 1.3km に比較的規模の大きい支流オニキシベ川、ショロマ川との合流点、同じく下流 2.8km には日高幌内川、シュルク川、オコッコ川との合流点で、それぞれ盆地状の地形を形成しているのに対し、遺跡周辺は厚真川両岸域が山地となっており、幅約 350m の谷底状の地形となっている。

遺跡周辺の環境として北側に厚真川本流が並流し、南側の標高 162m の山体とに挟まれた河岸段丘面上に遺跡が立地している。段丘面背後の山体頂部との比高差は約 110～120m で、第四紀更新世における厚真川本流やキウキチ川の浸食によって形成された急斜面と接しているため日照条件は良好とは言えない。遺跡の立地する河岸段丘面は厚真川と並行して東西約 280m、南北に幅約 130m にわたって形成された 1 面である。東側は南側山体から流下する支流キウキチ川の浸食によって分断され、対岸の同一段丘面上には縄文時代前期を主体とする厚幌 2 遺跡が立地している。キウキチ川は厚真川合流点までの流路延長が約 1.5km、幅 1 m 前後の小河川である。遺跡の立地する河岸段丘面上に沖積錐地形を形成して厚真川へ注ぎ込む。河岸段丘面と厚真川本流との比高差は 4～6 m で、キウキチ川との比高差は 5 m 前後で、上幌内モイ遺跡の T2 面に相当する河岸段丘面である。

調査前の現況は樹齢 45～50 年のカラマツの植林地であった。

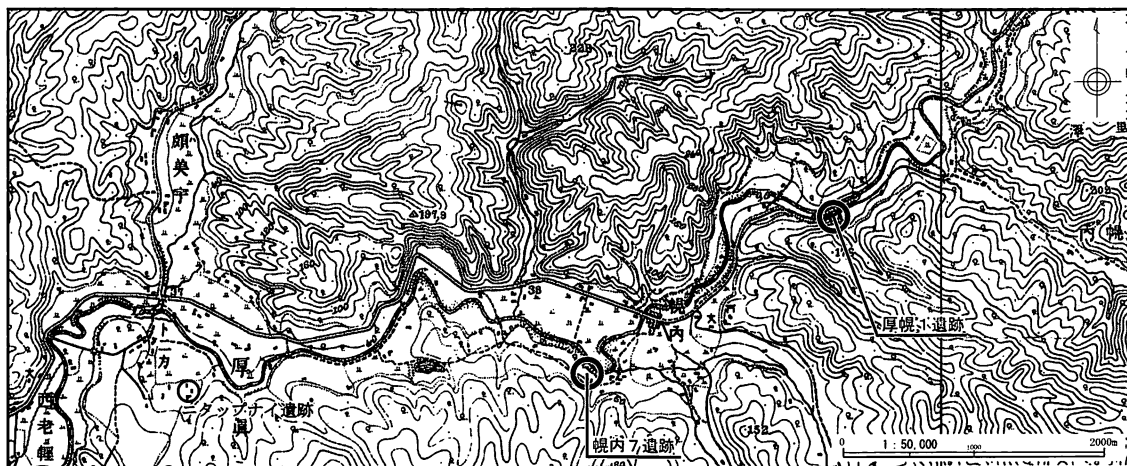


図 I-4 大正年間の周辺地形図 (1921 年発行の 50,000 分の 1 地形図「早来」と「穂別」を統合)

### 2. 歴史的環境

#### A 先史時代

厚幌 1 遺跡周辺は谷状地形となっていることから、遺跡の立地も限られており、東側を開析するキウキチ川の対岸約 40m の位置にある厚幌 2 遺跡のみが掲載されている。厚真川本流の対岸にも河岸段丘が発達しているが、埋蔵文化財包蔵地の有無は現在のところ確認されていない。厚幌 2 遺跡は平成 15 年に道道切替工事の調整池掘削土より遺物が回収されたことによって発見、掲載された。平成 19 年度の厚幌導水路建設に係わる試掘調査で縄文前期前葉の縄文尖底土器と多量の被熱破砕

礫が出土している。平成23年度以降の発掘調査を予定しており、小河川を挟んで対岸にある本遺跡との関係等に留意したい。

## B 歴史時代

和人による文字資料としての幌内地区の最初の記録は、先述の1857（安政5）年6月に厚真を訪れた松浦武四郎によるものである。しかし、武四郎は厚幌1遺跡周辺の厚真川上流域までの踏査は行っておらず、聞き取りによって上流域の沢の名前等を記述している。厚幌1遺跡東岸のキウキチ川は「ヘンケマカヲシ」に相当するものと思われる。なお、同じ厚真川左岸の下流に「マカヲシ」（「藪の臺の・群生している・所」の義 厚真村1956）が記されており、現在のマッカウシ川に相当する。武四郎が訪れた幕末期には現在の幌内地区にはコタンが存在していなかったようで、いわゆる「フシコタン」の記録が残るのみである。厚真を離れるにあたり、厚真川左岸のシュルク川の分水嶺を越えて鶴川筋ニワン（現栄地区）へ抜けている。

幌内地区の市街地形成の始まりは1895（明治28）年に遡り20数戸が開拓入地している。畑作を中心に水田の開墾も行われた。明治34年には振老（現厚真町市街）・幌内間道路が開通し、1911（明治44）年に室蘭本線早来駅からの馬車軌道が敷設されたことにより、周辺山間部から産出される豊富な林産資源の集積地として発展した。明治30年代には三井物産などの木材業者によってオニキシベ川やショロマ川流域に牧場が開かれ、澱粉工場や簡易教育所、国から割譲された地方林を管理する幌内監護員駐在所も設置され、古くから林業が盛んな地域であった。

大正10年の地形図（図I-4）で厚幌1遺跡が立地する河岸段丘には家屋1軒が記されている。幌内地区の古老からの聞き取り調査では藤根キウキチ氏がここに開拓に入り、現在の河川名「キウキチ沢」と名付けられたとのことであった。なお、近現代の遺構として平成14・15年度の調査では表土層の耕作痕と約80mにわたって構築目的不明の柵列跡が確認されている。

## 3. 調査区内の地形と地質

### A 地形

工事立会区も含めた調査区内の基盤層は新第三紀の砂岩泥岩層の「振老層」で、より表層の地質については「5万分の1地質図幅早来」で「第四紀更新世河岸段丘堆積層 tr」に区分されている（松野・石田1960）。厚真川流域の河岸段丘については、「上幌内モイ遺跡（1）」に報告（出穂2006）されている。本遺跡では樽前d1・d2テフラ（VIIIa・b層 Ta-d 約8,000年前降下）より下層の堆積物を確認していないことから厳密な河岸段丘形成時期の検証は不可能であるが、樽前dテフラの堆積状態と現河床面との比高差から上幌内モイ遺跡のT2面に相当すると思われる。

調査区内の微地形は樽前bテフラ（II d層、Ta-b、1667年降下）除去後のIII層上面における等高線図で大きく4面に分かれ、Tピット壁面で観察できる樽前d1テフラより上層のキウキチ川沖積錐堆積物（VII層）から2つに細別できる。この他に樽前cテフラ（IV層、Ta-c、約2,500年前降下）降下以前の地すべり堆積物も確認されており、表層地形形成に関連する堆積物も含めて記述する。

#### (1) 傾斜部

調査区の東側はキウキチ川に隣接していることから沖積錐地形を形成する際の浸食、再堆積作用が激しく、樽前d1テフラとd2テフラの再堆積互層が顕著に発達している。沖積錐堆積物のVII層は樽前d1テフラ基質の砂層堆積物が主体を占め、亜角礫の泥岩も混入している。堆積土壌の粒度淘汰は悪い。沖積錐堆積物のVII層は90cm以上と厚く堆積している（TP-96・97・98）。

## (2) 平坦部

工事立会区の標高 55.5m 以下の範囲で、Ⅶ層は樽前 d2 テフラの二次堆積物を主体とし、堆積物の粒度淘汰は比較的良く、安定的な堆積状態を示している。Ⅶ層の層厚も 60cm 前後で傾斜部より薄い (TP-99・100・101・103)。

## (3) 微高地

K-42 区から M-44 区にかけて北東-南西軸のほぼ直線状の微高地となっている。調査区内での高さは約 50cm を測る。この微高地はキウキチ川からの沖積錐堆積物が堆積しておらず、風化によって粘土化していない樽前 d テフラが堆積している。標準堆積の様相を呈しており降下以前より微高地であった可能性が高い。微高地の長軸は厚真川の河岸段丘浸食崖と概ね並行していることから、本段丘面が完全に離水形成する直前の自然堤防堆積物が存在している可能性がある (TP-102)。

## (4) マウンド地形

工事立会区の N-42・43 区と N-46 区の 2ヶ所に調査区の北側に見られるマウンド地形の裾部がかかっている。特に N-46 区は現地表面においても明瞭に確認できる地形である。このマウンド堆積物は樽前 c テフラを被覆し、Ⅴ層黒色土中の上位に挟在している。構成土壌は攪拌の度合いが低い樽前 d テフラを主体とし、最大 85cm の層厚を測る。類似した堆積物は平成 14 年度の調査でも検出されており、地震起因の地すべり堆積物と報告されている (田近・大津 2004)。この地すべり堆積物については次章で詳述する。

## B 地質

本遺跡は縄文時代からアイヌ文化期にかけての形成時期で、前節で詳述したキウキチ沢から供給された沖積錐堆積物 (Ⅶ層) より上層のテフラや遺物包含層の堆積状態等について記述する。

調査区内は笹根等の表土層 (Ⅰ層) があり、樽前 b テフラ上位まで近現代の耕作や伐採植林に伴う砂質の攪乱層 (Ⅰ層) と礫質降下軽石の樽前 b テフラ (Ⅱd 層、Ta-b、1667 年降下) が調査区内のほぼ全面に堆積している。平成 14・15 年度の調査では、本来の基本土層としての樽前 a テフラ (Ⅱa 層、Ta-a、1739 年降下) や駒ヶ岳 c2 テフラ (Ⅱc 層、Ko-c2、1694 年降下) の堆積を部分的に確認しているが、今回の調査ではこれらの堆積の有無は確認できなかった。樽前 b テフラの直下には砂質降下火山灰の有珠 b テフラ (Ⅱe 層、Us-b、1663 年降下) が層厚 3mm 以下で部分的に堆積している。なお、樽前 a テフラと樽前 b テフラとの間層に黒色砂質土層 (0B 相当層) が堆積している。

縄文時代晩期後葉から近世アイヌ文化期にかけての遺物包含層であるⅢ層は樽前 b テフラと砂質降下軽石の樽前 c テフラ (Ⅳ層、Ta-c、約 2,500 年前降下) に挟在する黒色腐植土層で、平均層厚が 15cm 前後である。Ⅲa～Ⅲc 層に分層が可能で、主体層を成すⅢb 層はやや粘性を有する黒色土層で、Ⅲc 層は均質にⅣ層を多量に含む黒褐色から暗褐色の砂質土層である。Ⅲb 層とⅢc 層との層境には白頭山苦小牧火山灰 (B-Tm、10 世紀前半降下) が風倒木痕の窪みや沢状地形等に堆積している。概ねⅢb 層上位から中位にかけてはアイヌ文化期、Ⅲb 層下位からⅢc 層上位は擦文文化期、Ⅲc 層中位から下位にかけては続縄文文化期から縄文晩期後葉の遺物包含層である。なお、Ⅳ層の樽前 c テフラは均質で、1 層のフォールユニットから成っている。

縄文時代早期から晩期中葉にかけての遺物包含層である、Ⅴ層黒色腐植土層も a～c の 3 層に分層した。Ⅴa 層はⅣ層と斑状に堆積し、Ⅴb 層は粘性が強い黒色土層である。Ⅴc 層はⅦ層起源の樽前 d テフラが均質に混じり、泥岩などの混入物もⅤb 層より多く含む。Ⅵ層はⅤ層とⅦ層が植物痕

跡等により斑状に堆積する漸移層である。概ねVa層は縄文時代晩期、Vb層は縄文時代中期・後期、Vc層は縄文時代前期、VI層は縄文時代早期の遺物包含層と考えられる。

III層も含め、これらの細分層と時期区分については、これまでの厚幌ダム建設や厚幌導水路建設に係わる発掘調査結果と矛盾しない。

### C 地すべり堆積物

平成14年度の発掘調査において、調査区南側の山体斜面から地震によって誘発された可能性が高い地すべり堆積物（田近・大津2004）と同種の堆積物と考えられる。平成20年度の調査では工事立会区に3ヶ所検出した。調査区の南壁面で堆積状態を観察し、いずれも樽前cテフラとVa層を被覆している。構成土壌は成層構造を残した状態の樽前dテフラを主体とし、部分的にV層ブロックや泥岩の角礫を含み、分層の単位は大きい。基底面はほぼ水平でマウンド状に堆積している。堆積物の供給起源である山腹斜面裾からは約50mの距離にある。

うち東側のN-42・43区では560×360cmの範囲で検出し、層厚が約45cmであった。検出位置および範囲から平成14年度に調査された地すべり堆積物の先端部と考えられる。堆積状態の特徴として、樽前d2テフラで構成され、マウンド断面のほぼ中央部にV層単層のレンズ状ブロックが堆積している。これは地すべり堆積物の移動時に河岸段丘上に堆積していたV層黒色土が切り剥されたものと思われる。

N-44区に検出したものは最も小規模で、層厚が20cm以下の比較的低平な堆積物であった。このため重機掘削時に範囲を記録せずに掘削した。構成土壌は泥岩を多量に含む層が主体となっている。

工事立会区の西端N-46区に検出した地すべり堆積物は、調査区の形状から堆積範囲および移動方向が不明であるものの、最も規模が大きい堆積物で層厚85cmを図る。現地表面においても堆積物のマウンド地形となっていたが供給源斜面との間は道道切替工事の造成によって現地形を失っており、供給地を推察するに至っていない。堆積状態は7層以上に分層でき、下位から樽前d2テフラがマウンド状に堆積し、上層に帯状のV層と樽前d2テフラ、窪地を埋積する状態で角礫の泥岩を多量に含む黄褐色粘土層が堆積している。このような堆積状態は今年度検出した他の2ヶ所とは異なり、平成14年度に調査した堆積物と共通している。この堆積物は平成14年度に調査されたものとは別地点からの移動体の可能性がある。

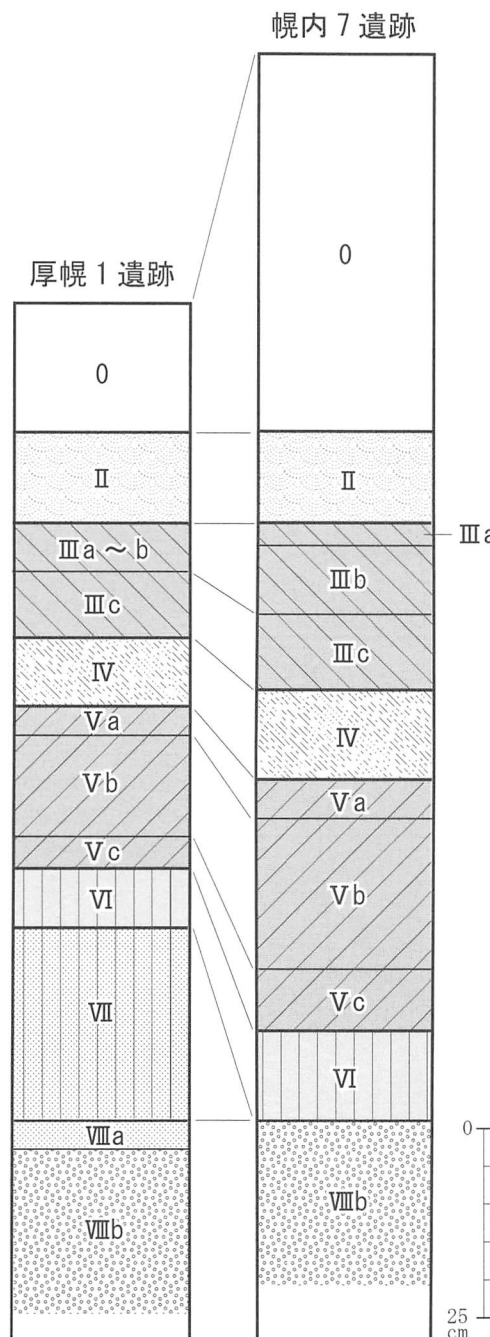
この堆積物の直下と縁辺部から14点、2個体分の北筒式土器が出土している（図III-20-3・11）。堆積物の直下からは10点が出土しており、ほとんどがVb層上位より面的に出土している。

平成14年度では、樽前cテフラ降下以前で、Vb層上位に相当する層位からの時期推定と堆積物直上、直下の放射性炭素年代測定の結果から4,600yB.P.～3,000yB.P.の年代が報告されている。

今回の調査結果による堆積物の発生時期は、縄文中期末葉北筒式土器以降、樽前cテフラ降下以前という時間幅となり、前回の調査結果を肯定するもので、かつより絞り込んだ情報が得られた。

（乾）

〔厚幌 1 遺跡・幌内 7 遺跡 基本土層〕



※幌内 7 遺跡に再堆積層の VII 層は認められない

- 0 層 : 攪乱・耕作土
- I 層 : 近現代表土 7.5YR3/1 黒褐色砂質土
- II 層 : 近世火山噴出物及び黒色砂質腐植土
  - a ; 樽前 a テフラ (Ta-a) 10YR6/4 にぶい黄橙色 砂質降下火山灰 1739 年降下。耕作により部分的に堆積。層厚 8cm 前後。
  - b ; 黒色砂質腐植土層 10YR2/1 黒色 新千歳空港 (美沢川流域の遺跡群) の調査における 0 黒層相当。
  - c ; 駒ヶ岳 c2 テフラ (Ko-c2) 10YR8/3 浅黄橙色 砂質降下火山灰 1694 年降下。II b 層中において部分的に堆積している。
  - d ; 樽前 b テフラ (Ta-b) 2.5YR7/3 浅黄色 細礫質降下軽石 1667 年降下。層厚 20 ~ 30cm 前後。
  - e ; 有珠 b テフラ (Us-b) 2.5YR6/1 黄灰色 シルト質降下火山灰 1663 年降下。層厚数 mm。III a 層上面に堆積。
- III 層 : 黒色腐植土
  - a ; 砂質シルト 7.5YR2/1 黒色 II d・e 層を斑状に含む。層厚 1 cm 前後。やや赤味あり。近世初頭遺物包含層。
  - b ; シルト 10YR1.7/1 黒色 やや粘性あり。層厚 10cm 前後。上位から中位が中近世アイヌ文化期遺物包含層。下位が擦文文化期包含層。III b 層と III c 層との層境に白頭山苦小牧火山灰 (B-Tm シルト質降下火山灰 10c 前半降下) が部分的に堆積する。
  - c ; 砂質シルト 10YR2/3 黒褐色 層厚 10cm 前後。続縄文~縄文晩期後半の包含層。
- IV 層 : 樽前 c テフラ (Ta-c) 10YR6/6 明黄褐色 砂質降下軽石 B. P. 2,500 年前後降下。層厚 10cm 前後。1 層のフォール・ユニット。
- V 層 : 黒色腐植土
  - a ; シルト 10YR3/2 黒褐色 層厚 2cm 前後。縄文晩期前半の遺物包含層。
  - b ; シルト 10YR1.7/1 黒色 層厚 25cm 前後。縄文中・後期の遺物包含層。
  - c ; シルト 10YR2/3 黒褐色 層厚 15cm 前後。縄文前・中期の遺物包含層。
- VI 層 : 漸移層 2.5YR4/6 褐色 暗褐色シルト。層厚 10cm 前後。縄文早期の遺物包含層。
- VII 層 : 樽前 d テフラ再堆積層 (沖積錐堆積物で厚幌 1 遺跡に堆積)
  - a ; VII a 層起源の砂層と VII b 層の互層堆積層。調査区東側に堆積。
  - b ; シルト 10YR4/4 褐色 層厚 25cm 前後。上層に少量の角礫シルト岩 ( $\phi 30 \downarrow$ ) を含む。
- VIII 層 : 樽前 d テフラ B. P. 8,000 年前後降下。
  - a ; 樽前 d1 テフラ (Ta-d1) 5G4/1 暗緑灰色 細礫質降下スコリア ( $\phi 5 \downarrow$ ) 層厚 10cm 前後。幌内 7 遺跡では塊状 ( $\phi 20 \downarrow$ ) で、VI 層中に少量混じる。
  - b ; 樽前 d2 テフラ (Ta-d2) 5YR4/8 赤褐色 中礫質降下スコリア 層厚 100cm 前後。部分的に水成風化による粘土化も有る。

図 I -5 基本土層柱状図 (2遺跡分)

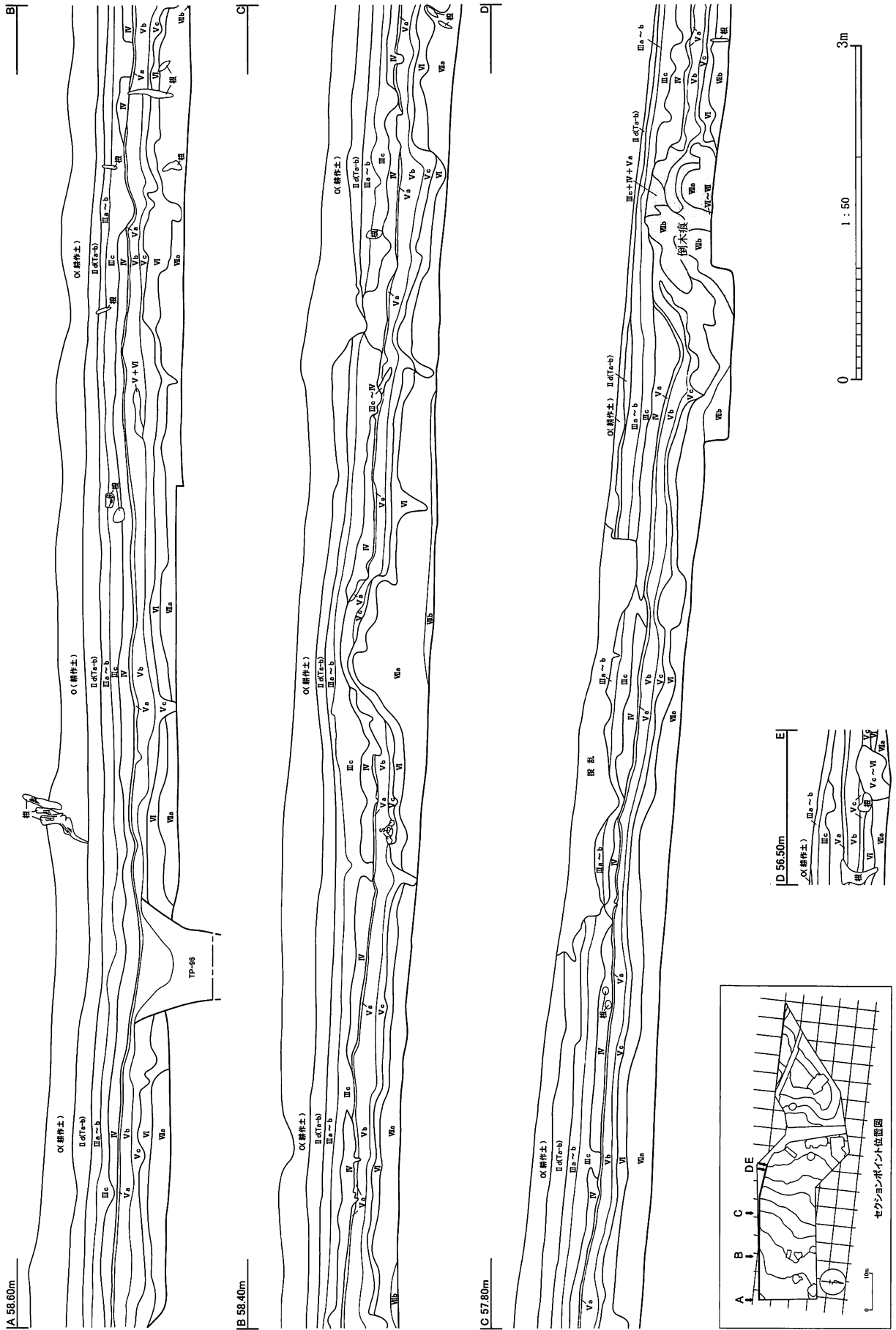


図 I-6 発掘調査区セクション図



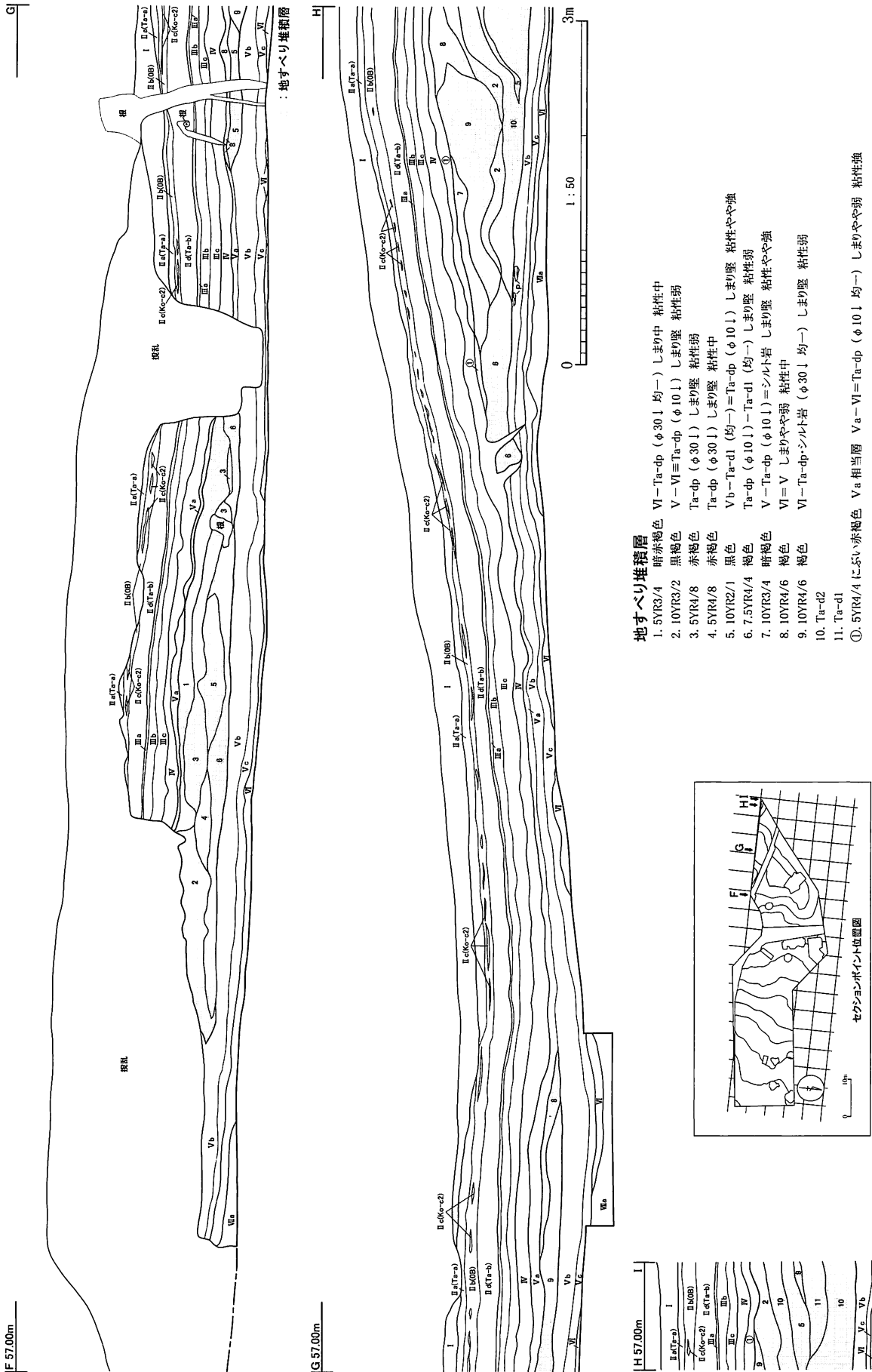


図 I-7 工事立会区セクション図

## 第Ⅱ章 続縄文・擦文文化期の調査

本章で取り扱う続縄文・擦文文化期の層順は樽前bテフラと樽前cテフラに挟まれた黒色腐植土を対象としたものである。本遺跡においてはⅢ層の遺構・遺物が少なく、擦文文化期の焼土1ヶ所、続縄文文化期の土器集中1ヶ所のみを検出で、遺物はⅦB2aの土器229点、ⅥA1の土器203点、石器1点、礫8点、フレイク・チップ6点が出土している。擦文土器は中期後葉の資料が出土しており、調査区南東側に遺物が集中するのみで、調査区全体に広がる様相は認められない。(奈良)

### 第1節 焼土

#### ⅢF-08 (図Ⅱ-2 図版4-1)

位置：M-39 規模：126×54×10 cm

Ⅲc層調査中、M-39区のグリッドで倒木痕を検出した。長軸方向にトレンチを設定し倒木起源の確認を行っていたところ、黒色土に僅かな焼骨片と地山被熱層を確認した。上位は一部根痕による攪乱のため燃焼面は不明瞭であるが、本焼土は被熱層が乱れていないことから、倒木の窪みに形成された焼土と考えられる。周辺には擦文文化期の様相を示す遺構や遺物は出土していないが、燃焼面下位にB-Tmが認められることから、擦文文化期の所産であると考えられる。(奈良)

### 第2節 遺物集中

土器集中を1ヶ所検出しているのみである。土器は続縄文初頭に位置づけられる深鉢1個体のみで倒木痕の窪みからまとまって出土している。

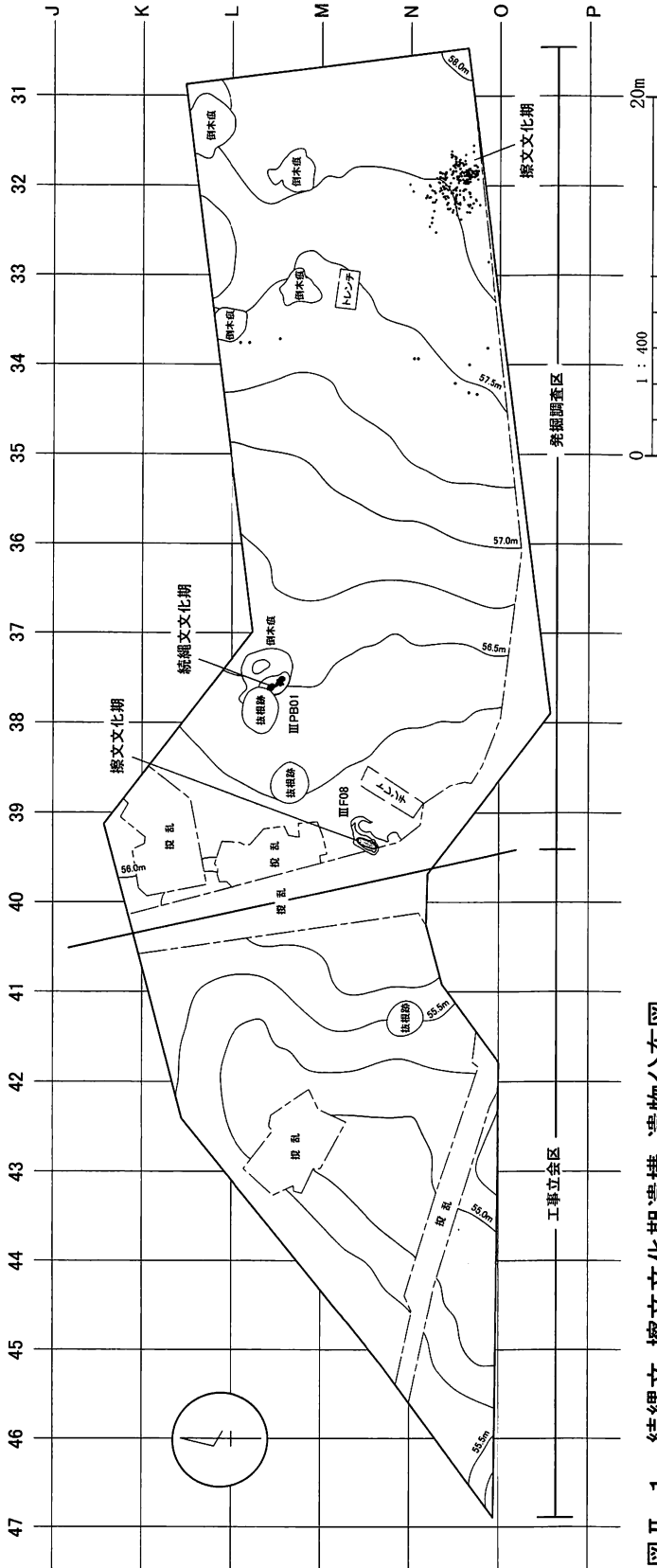
#### ⅢPB-01 (図Ⅱ-3・4-1 図版4-5・16-1)

L-37区の倒木痕はⅢc層以降に形成されたものと思われ、Ⅲc層上にまとまって203点の土器片が出土している。接合した資料は口縁部から胴部下半までで底部は出土していない。1はⅥA1に分類した続縄文初頭の土器である。口縁部は波状を呈し、復元で確認できた波頂部は5ヶ所であるが、推定で6～7ヶ所あると思われる。口唇には棒状工具による刻みが連続して施されている。口縁部から胴部にかけて地文にLR斜行縄文が横走気味に施文されている。(奈良)

### 第3節 包含層出土遺物

#### 1. 土器 (図Ⅱ-5-1・2 図版16-2-2・3)

包含層からはⅦB2aの土器が229点出土している。いずれも調査区南東部に主な分布域を示し、文様構成が解る範囲での分類はⅦB2aの擦文中期後葉のみである。1は数条の横走沈線地に鋸歯状の沈線文を施した口縁部片。口唇部は角状で、口縁部直下に連続して刻みが認められる。2は胴部下半で、胎土等の観察から1と同一個体と思われる。(奈良)

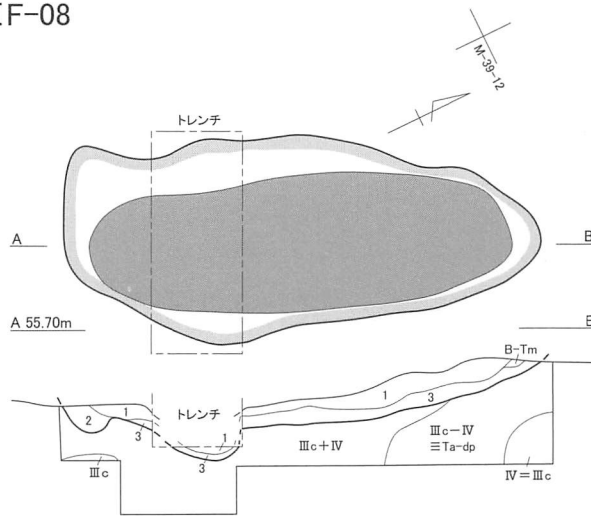


図Ⅱ-1 統縄文・擦文文化期遺構・遺物分布図

表Ⅱ-1 統縄文・擦文文化期遺構群一覽表

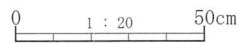
遺構名	規模(cm)		グリッド	層位	付属・関連遺構	備考
	長軸	短軸				
III F-08	126	54	M-39	III cU	-	倒木痕跡み
III PB-01	114	52	L-37	III c	-	倒木痕跡み

ⅢF-08



ⅢF-08

1. 10YR4/6 褐色 地山被熱層 (Ⅲc) しまり弱 粘性弱
2. 10YR2/1 黒色 Ⅲc-Ⅳ(均一)=炭化物(斑状) しまり弱 粘性なし
3. 7.5YR2/3 極暗褐色 付帯黒色土-焼土(漸移的) しまり弱 粘性中

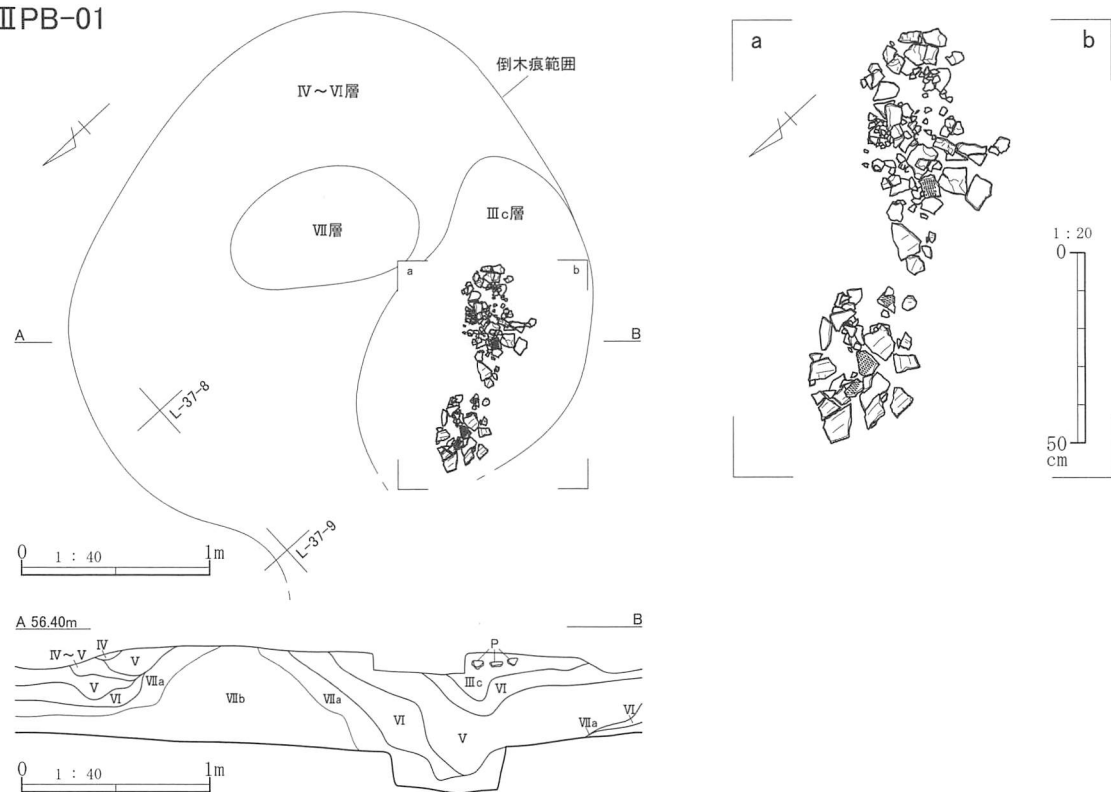


図Ⅱ-2 ⅢF-08 平面及び断面図

表Ⅱ-2 ⅢF-08属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅱ-2	4-1	ⅢF-08	M-39	ⅢcU	楕円形	126	54	10	無	

ⅢPB-01



図Ⅱ-3 ⅢPB-01 平面及び断面図



図II-4 III PB-01 出土土器

表Ⅱ-3 ⅢPB-01出土土器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	部位	遺物番号/調査区 /層位	器形等	文様	胎土	備考
						口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点-底面	口唇-口縁-内面 /胴部-内面/底側面-底面-内面		
Ⅱ-4	16-1-1	ZP01A	VIA1	口縁~胴 部下半	36750/L-37/Ⅲc	波状・やや外傾-隅 丸角状/やや外傾	刻み-LR斜行縄文(横走気 味)-LR斜行縄文(横走気 味)	砂粒少量	倒木痕の 窪み



図Ⅱ-5 続縄文・擦文文化期包含層出土遺物

表Ⅱ-4 擦文文化期包含層出土土器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺物番号	グリッド	層位	器種	部位	器面調整		点数	備考
									内側	外側		
Ⅱ-5-1	16-2-2	SP01A	VII B2a	35013	N-32	ⅢbL	甕	口縁部	ナデ	ナデ	1	
Ⅱ-5-2	16-2-3	SP01B	VII B2a	35072・35231 他3点	N-31	ⅢbL	甕	胴部	ハケメ	ハケメ	10	
				35165・35042 他2点	N-32				ナデ	ミガキ		

表Ⅱ-5 続縄文文化期包含層出土剥片石器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	グリッド	遺物番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-5-3	16-2-4	—	L-33	35155	石 鏃	A2	ⅢbL	(16.3)	14.6	1.4	(0.42)	Bl-Sch.	

2. 石器 (図Ⅱ-5-3 図版 16-2-4)

石鏃1点、剥片6点、計7点(重量 6.94g)が出土した。石鏃は青色片岩製、剥片は黒曜石製。3は無茎石鏃(A2類)、調査区東側のⅢbL層から出土した。背面に横方向の剥離痕が残る薄手の剥片を素材とする。縁辺に微細な二次加工を施して整形している。先端部は欠損している。

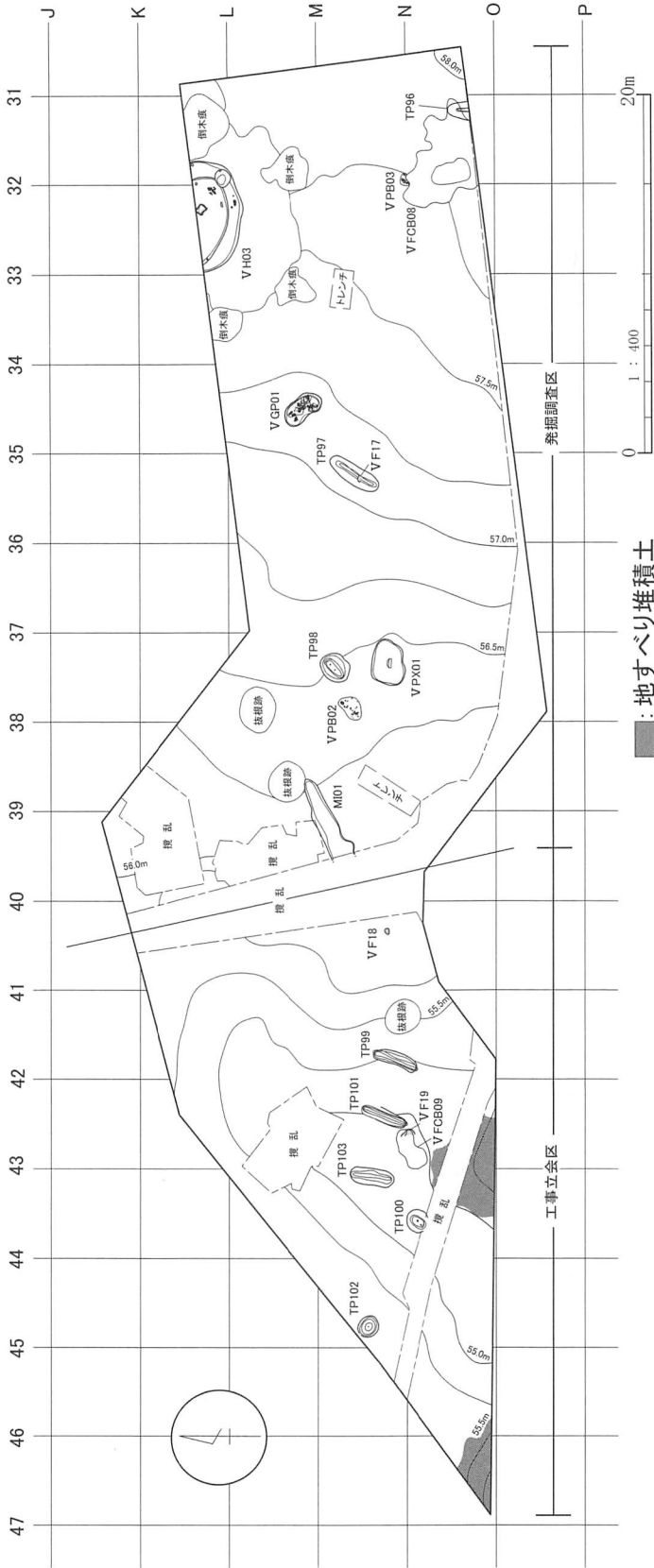
(山田)

## 第三章 縄文時代の調査

本書で取り扱う縄文時代の層順はIV層（樽前 a テフラ）とVIII層（樽前 d テフラ）に挟まれた黒色土及び漸移層を対象としたものである。遺物は縄文時代前期前葉から晩期前葉までの土器が出土し、静内中野式、柏木川式、北筒式、余市式土器が出土している。主体となる時期は後期初頭の余市式期で、調査区域の全体に散在している。本遺跡は平成 14・15 年度に調査が行われ、縄文早期から後期初頭にかけて遺構、遺物が出土している。今年度の調査は厚真川本流に近い低位面で、遺構、遺物の濃淡により東側の発掘調査区域と西側の立会区域に分けて発掘調査を行い、西側立会区域からは遺物はほとんど出土していないが、地すべり堆積層の下位から北筒式土器が出土したため、地すべり堆積層は北筒式期以降であることが解った。遺構は竪穴式住居跡 1 軒、住居様遺構 1 軒、焼土 3 ヶ所、土坑墓 1 基、Tピット 8 基検出している。竪穴式住居跡は調査区外に延びているが、中心と考えられる地点には石組炉が配置され、ベンチ構造をもつタイプである。床面およびベンチ上には余市式土器が出土しており、後期初頭の住居形態を知る上で貴重な発見となった。また、平成 15 年度に調査された石組炉の住居跡も本遺構の形態から余市式期と思われる。遺物は土器 686 点、剥片石器 124 点、礫石器 37 点、礫 324 点、フレイク・チップ 7, 135 点出土している。（奈良）

表Ⅲ-1 縄文時代遺構群一覧表

遺構名	規模(cm)		グリッド	層位	付属・関連遺構	備考
	長軸	短軸				
VH-03	324	320	K・L-31・32	VbL		
VPX-01	266	194	M-37	VI		
VGP-01	236	128	L・M-34	V		土坑墓
VF-17	16	14	M-35	V		
VF-18	34	28	M-40	Vc		
VF-19	73	26	M-42	Vc	VFCB-09	
VPB-02	122	47	M-37	VbL		
VPB-03	65	45	N-31	VbU	VFCB-08	
VFCB-08	252	190	N-31・32	VbU	VPB-03	
VFCB-09	119	61	N-42	Va	VF-19	
TP-96	106	102	N-31	Vc		
TP-97	310	105	M-35	Vc		
TP-98	178	140	M-37	Vc		
TP-99	253	70	M-42	Vc		
TP-100	128	124	N-43	Vc		
TP-101	264	72	M・N-41	Vc		
TP-102	126	110	M-44	Vc		
TP-103	248	92	M-42・43	Vc		
MI-01	244	74	L・M-38・39	Vc		溝状遺構

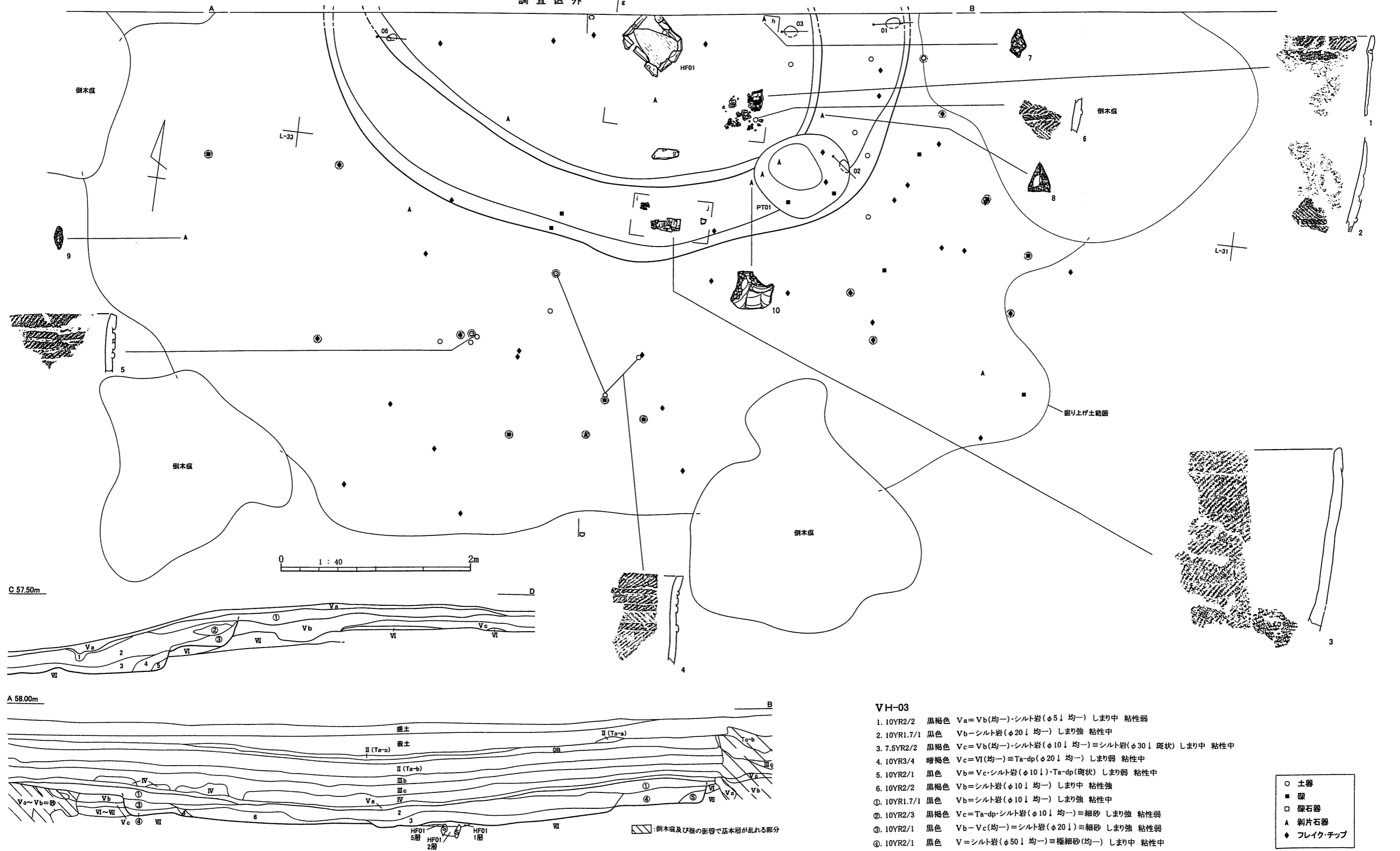


図Ⅲ-1 縄文時代遺構分布図



VH-03

調査区外



VH-03

- 1. 10YR2/2 黒褐色 Va=Vb(均一)・シルト岩(φ5↓均一) しまり中 粘性弱
- 2. 10YR1.7/1 黒色 Vb=シルト岩(φ20↓均一) しまり強 粘性中
- 3. 7.5YR2/2 黒褐色 Vc=Vb(均一)・シルト岩(φ10↓均一)≡シルト岩(φ30↓斑状) しまり中 粘性中
- 4. 10YR3/4 暗褐色 Vc=VI(均一)≡Ta-dp(φ20↓均一) しまり弱 粘性中
- 5. 10YR2/1 黒色 Vb=Vc・シルト岩(φ10↓)・Ta-dp(斑状) しまり強 粘性中
- 6. 10YR2/2 黒褐色 Vb=シルト岩(φ10↓均一) しまり中 粘性強
- ①. 10YR1.7/1 黒色 Vb=シルト岩(φ10↓均一) しまり強 粘性中
- ②. 10YR2/3 黒褐色 Vc=Ta-dp・シルト岩(φ10↓均一)≡細砂 しまり強 粘性弱
- ③. 10YR2/1 黒色 Vb=Vc(均一)=シルト岩(φ20↓)≡細砂 しまり強 粘性弱
- ④. 10YR2/1 黒色 V=シルト岩(φ50↓均一)≡極細砂(均一) しまり中 粘性中
- ⑤. 10YR2/1 黒色 V=シルト岩(φ50↓均一)≡細砂(均一) しまり中 粘性中

- 土器
- 礫
- 礫石器
- △ 剥片石器
- ◆ フレイク・チップ

※ ①は掘り上げ土中の出土遺物

図III-2 VH-03 平面・断面図及び遺物分布図

## 第1節 住居跡

本遺跡で取り扱う住居跡は1軒であるが、平成14・15年度に1・2号住居跡が調査されているため3号住居跡から報告を行うものである。

**3号住居跡**（竪穴式住居跡）[VH-03]（図Ⅲ-2～4 カラー図版1-2・2-1 図版5～7・17・18-1）

位置：K・L-31・32 規模：(324) × (320) × 40 cm 検出層位：VbL

長軸方向：N-61° W 平面形：楕円形 付属遺構 HF01・PT01

**確認・調査：**Ta-b 除去の段階で壁面にかかるように半円形の窪みが確認された。IV層も落ち込み、規模から縄文時代の竪穴式住居跡が想定され、V層調査時に長短軸トレンチを設定し断面観察および床面の確認を行った。VII層で調査区壁面に一部かかる状態で石組炉を検出し、長短軸共に立ち上がりを確認したため住居跡と判断した。断面記録後ベルトを外して、住居内部の付属遺構及び出土遺物の調査に切り替えた。住居南東側の端部にあたる地点からは楕円形のプランを検出したため、長軸で半截、記録を行った。石組炉に関しては十字ベルトを設定し平面、断面の記録をとった後にベルトを外して床面の遺物と合わせて写真撮影を行った。また、短軸トレンチで更に1段立ち上がりが認められたことからベンチ構造が想定され、3ヶ所のトレンチで立ち上がりを確認しながら掘り進め、ベンチ構造の完掘を行った。住居周囲にはVbU層下位よりV層とTa-dが混在した層が広がっていたため、掘り上げ土と判断し範囲確認と記録を行い全体の完掘を撮影して調査終了とした。

**堆積状態：**1～6層はV層を起源としてシルト岩を多～少量含む。4・5層は床面からベンチにかけて三角堆積層、3・6層はVII層上面にほぼ水平に堆積し、3層下位からは石組炉を検出している。②～⑤層はベンチ上に流れ込む層であるが、2・②～④層は色調やシルト岩の含有量に違いがあるものの、同一過程で堆積した層と考えられる。①層は住居周辺に広がる掘り上げ土で、シルト岩を少量含む一部住居に流れ込む。

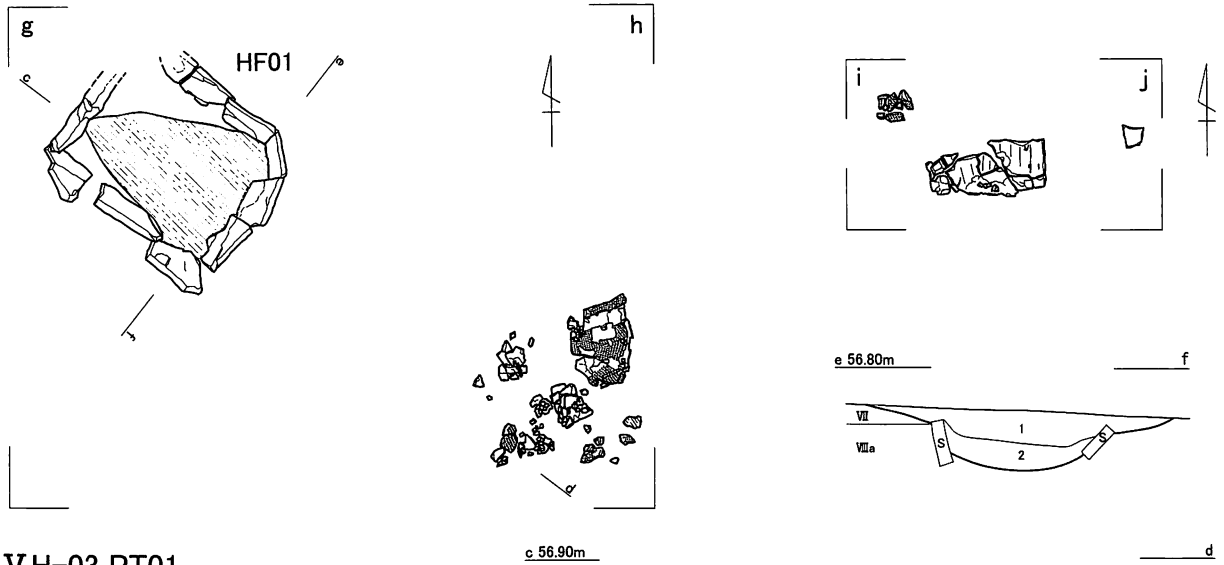
**石組炉：**住居はおよそ半分のみを検出であるが、炉の検出位置は住居のほぼ中央付近と考えられる。石組炉は板状の砂岩礫10点で構成され、規模は長軸56 cm、短軸44 cmの方形状でほぼ垂直状に配置されている。炉石の内側は炭化物層（2・3層）より上位が被熱しており、住居床面3層を起源とする1層を被覆している。燃焼面と考えられる2層は炭化物が約6 cm堆積しているが、下層には地山被熱層を確認することは出来なかった。また、フローテーションからは不明炭化種子が8点採取できたのみである。

**付属土坑・柱穴：**土坑は住居南東側の先端に1基検出している。形状は99×87×24 cmの楕円形状を呈している。土坑は先端の壁面にかかっているため、ベンチを一部切る形で構築されている。覆土は自然堆積でV層を基層としているが、シルト岩、Ta-d パミスを含むことから掘り上げの再流入と思われる。また、炭化物も少量だが混入している。

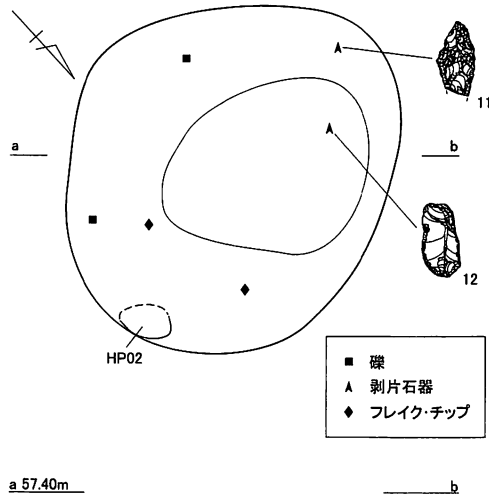
柱穴は4本検出しており、HP01・02はベンチ上の壁面付近、HP03・06は床面に検出しているが、HP06はより壁面付近で検出している。いずれもやや内側に傾いているが、シルト岩を多く含んでいるため判然としない。住居外には柱穴の痕跡を認めることは出来なかった。

**遺物出土状態：**土器は住居南東側床面より1個体と、ベンチ上に1個体の2個体が住居内から出土し、その他床面から珪藻土1点が出土している。いずれも保存状態が悪く、床面土器は脆く崩れやすいため土壌ごと取り上げを行っている。付属土坑の覆土中位からは剥片石器2点、剥片1点、礫1点、計4点（重量22.95g）が出土している。掘り上げ土からは石鏃2点、石錐1点、スクレイ

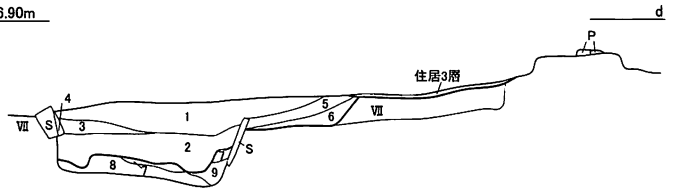
VH-03 HF01



VH-03 PT01



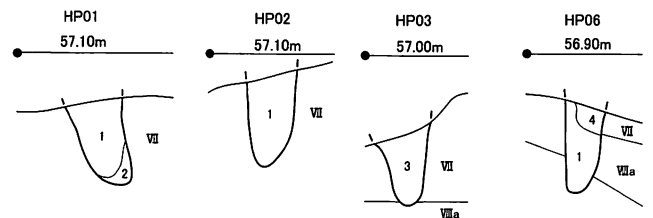
c 56.90m



VH-03 HF01

- |                   |  |
|-------------------|--|
| 1. 10YR3/3 暗褐色    | Vc=Ta-dp(均一)≡シルト岩(φ30↓)・炭化物(均一) しまり中 粘性中 |
| 2. 10YR1.7/1 黒色   | V=炭化物(均一)≡細砂(均一) しまり中 粘性強                |
| 3. 10YR2/3 黒褐色    | V-炭化物(均一) しまり弱 粘性強                       |
| 4. 10YR1.7/1 黒色   | 炉壁面に付着する炭化物                              |
| 5. 10YR2/3 黒褐色    | V≡シルト岩(φ10↓)・Ta-dp(均一) しまり弱 粘性中          |
| 6. 10YR3/3 暗褐色    | VI≡炭化物(均一) しまり中 粘性中                      |
| 7. 7.5YR5/8 明褐色   | VII                                      |
| 8. 10YR5/4 にぶい黄褐色 | VII層起源-細砂                                |
| 9. 10YR4/2 灰黄褐色   | VII起源 やや色調暗い                             |

VH-03 HP01~03・06



VH-03 HP01~03・06

- |                   |                                     |
|-------------------|-------------------------------------|
| 1. 10YR3/2 黒褐色    | Vc=シルト岩(φ30↓ 均一)≡Ta-dp(均一) しまり強 粘性中 |
| 2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 | VII=VI・Ta-dp(均一) しまり強 粘性強           |
| 3. 10YR3/1 黒褐色    | Vc=Ta-dp(均一)・シルト岩(φ10↓)             |
| 4. 10YR2/1 黒色     | Vc=Ta-dL(均一)・シルト岩(φ10↓ 斑状) しまり強 粘性中 |

図Ⅲ-3 VH-03 炉跡・ピット・柱穴平面及び断面図

表Ⅲ-2 VH-03属性表

挿図 番号	図版 番号	グリッド	層位	長軸方向	規模(cm)						付属遺構	備考	
					上端		下端		深さ	ベンチ			
					長軸	短軸	長軸	短軸		幅			高さ
Ⅲ-2	5-1	K・L-31	VbL	N-61° W	324	320	228	220	40	76	16	HF01.PT01	ベンチ構造

表Ⅲ-3 VH-03付属遺構属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	タイプ	平面形	規模(cm)					灰・骨片 の有無	備考
							上面		底面		深さ		
							長軸	短軸	長軸	短軸			
Ⅲ-3	6-1	HF01	K-32	3	石組	方形	56	44	44	34	16	無	炭化物多量
Ⅲ-3	7-1	PT01	K-31・32・ L-31	3	-	円形	99	87	48	48	24	-	先端ピット

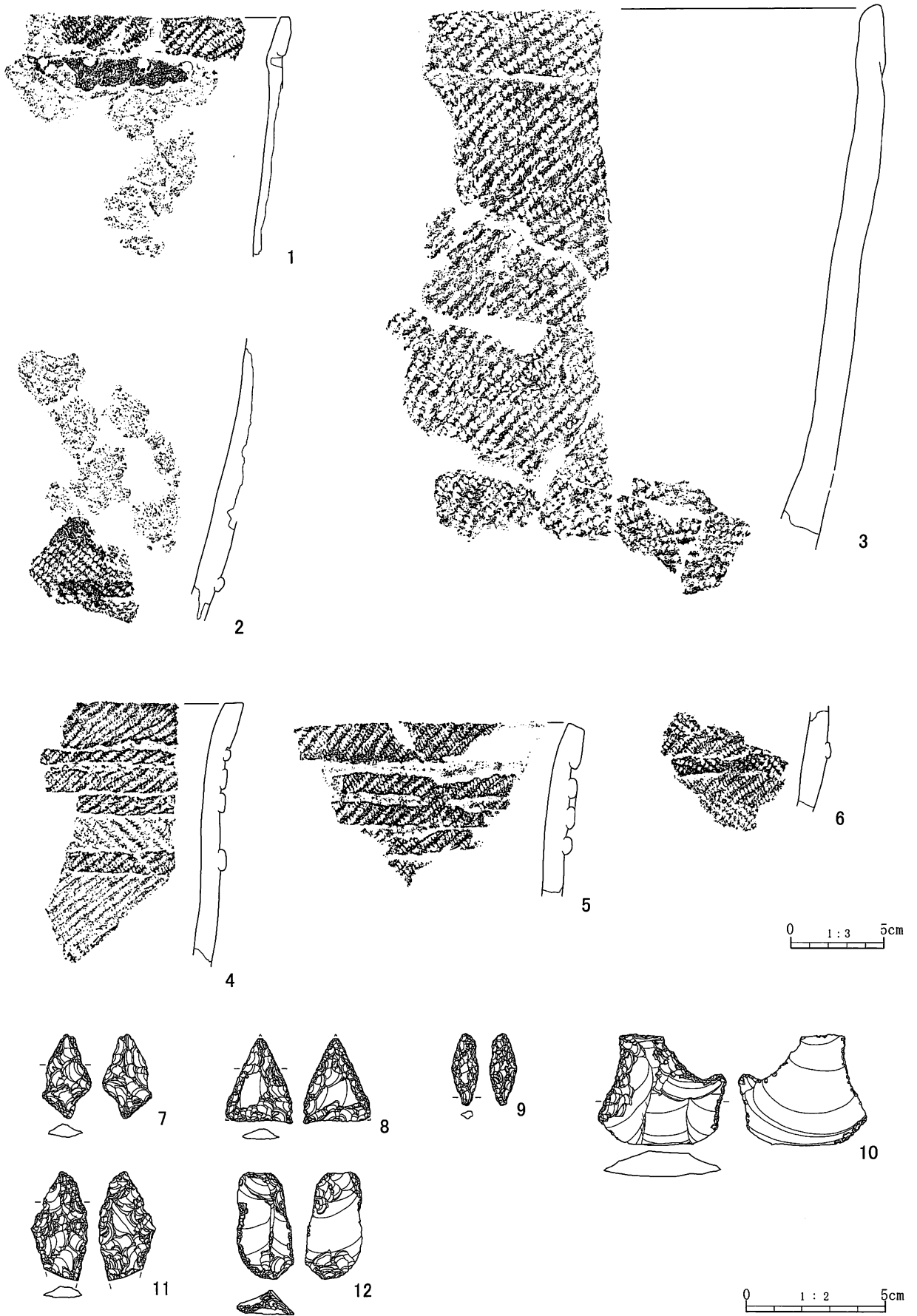
表Ⅲ-4 VH-03柱穴属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	規模(cm)			傾き (度)	タイプ	備考
			上端	下端	深さ			
Ⅲ-3	6-7	HP01	14	4	24	15°	打込み	
Ⅲ-3	-	HP02	14	2	26	4°	打込み	
Ⅲ-3	6-8	HP03	14	2	22	7°	打込み	
Ⅲ-3	6-9	HP06	10	2	24	7°	打込み	

パー 2 点、RF 2 点、UF 1 点、剥片 44 点、礫 14 点、計 66 点（重量 1088.32g）が出土している。石器類はすべて黒曜石製である。（奈良）

出土遺物：(図Ⅲ-4-1～12 図版 17-1～12・18-1-13～23) 1～6 はⅣ群 A1a 類の土器である。1・2 は住居 床面から出土した土器で同一個体である。1 は口唇部角状で、口縁部は幅広の貼付帯で構成される。貼付帯下位は無文帯に円形刺突文が施される。2 は胴部で貼付帯が 1 段認められる。接合では剥落が激しく文様構成が解りづらいが、取り上げ時には無文帯下位は少なくとも 2 段以上の羽状縄文で構成されている（カラー図版 2-1）。3 はベンチ上から出土した土器で、口縁部に幅広の貼付帯、地文に LR 斜行縄文が施され、器表面が弱くナデられている。胎土は砂粒を少量含み破断面の風化が著しい。4・5 は掘り上げ土上位と中位の接合した資料で、5 は貼付帯が一部繋がり区画されている。両資料共に焼成が良く胎土に砂礫を中量含んでいる。6 は 2 段の羽状縄文に貼付帯をもつ胴部で、胎土や出土地点などから 2 と同一の可能性が高い。

石器類は竪穴内覆土、掘り上げ土から石鏃 2 点、石錐 1 点、スクレイパー 2 点、RF 2 点、UF 1 点、剥片 44 点、礫 14 点、計 66 点（1,088.32g）が出土した。剥片石器、剥片ともに黒曜石製である。礫は砂岩 11 点、泥岩 1 点、礫岩 2 点である。床面遺物は珪藻土 1 点が出土した。板状で、軟質かつ脆弱である。加工などはみられず、用途は不明である。7・8 は石鏃、7 は両面調整により尖頭部と基部を作出しているが、器体が左右非対称で厚い。有茎鏃の未成品もしくは失敗品の可能性がある。8 は無茎三角鏃、背腹両面に素材面が残る。9 は石錐、両面調整により紡錘形に整形され、下端に断面菱形の錐部が作出されている。錐部先端は微細剥離痕と磨滅痕が観察される。10 はスクレイパー、末端がヒンジ・フラクチャーとなる不定形剥片を素材とし、背面左側縁と右側縁斜位に内湾する刃部が施されている。打点部が欠損し、この欠損部および右側縁に微細剥離痕が観察される。



図Ⅲ-4 VH-03 出土遺物

表Ⅲ-5 VH-03出土土器属性表

挿図番号	図版番号	個体名称	分類	部位	遺物番号/調査区/層位	器形等	文様	胎土	備考
						口縁-口唇/胴部/底側面-変換点-底面	口唇-口縁-内面/胴部-内面/底側面-底面-内面		
Ⅲ-4-1	17-1	JP001A	IVA1a	口縁～胴部	36750/VH-03・K-32/3	平縁・直立-角状-直立	貼付帯1A+LR斜行線文・OI円形刺突文	砂礫中量	床面
Ⅲ-4-2	17-2	JP001B	IVA1a	胴部	36750/VH-03・K-32/3	直立	RL斜行縄文+貼付帯2・RL斜行縄文	砂礫中量	床面
Ⅲ-4-3	17-3	JP002A	IVA1a	口縁～胴部	37108/VH-03・L-32/4	平縁・直立-角状(内削ぎ)/直立	貼付帯1A+LR斜行線文/LR斜行縄文+ナデ	砂粒少量	ベンチ上
Ⅲ-4-4	17-4	JP012	IVA1a	口縁～胴部	36401・36385・35347/L-32	平縁・直立-角状/直立	貼付帯1A+LR斜行縄文/異原体羽状縄文・貼付帯2+LR斜行縄文	砂礫中量	掘り上げ土中
Ⅲ-4-5	17-5	JP017A	IVA1a	口縁部	36402・36089/L-32/VbL	平縁・直立-角状(外削ぎ)	貼付帯1A+LR斜行縄文/LR斜行縄文・貼付帯2+LR斜行縄文	砂礫中量	掘り上げ土中
Ⅲ-4-6	17-6	JP018	IVA1a	胴部	36571/VH-03・K-32/3	直立	異原体羽状線文+貼付帯2+RL斜行縄文	砂礫中量	

表Ⅲ-6 VH-03出土石器属性表

挿図番号	図版番号	個体名称	遺物番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ4-7	17-7	-	35349	石 鏃	A4	2	VH-03	K-32	30.0	17.2	5.7	2.32	Obs.	
Ⅲ4-8	17-8	-	36426	石 鏃	A2	2	VH-03	K-31	30.0	23.7	4.7	3.02	Obs.	
Ⅲ4-9	17-9	-	36086	石 錐	D	掘上土	VH-03	L-33	25.7	9.4	3.8	1.06	Obs.	
Ⅲ4-10	17-10	-	36470	スクレイパー	C2	3	VH-03	K-32	40.1	45.9	9.8	15.96	Obs.	
Ⅲ4-11	17-11	-	36483	石 槍	B2	1	PT01	K-32	39.4	20.1	5.4	3.85	Obs.	
Ⅲ4-12	17-12	-	36492	スクレイパー	B2	1	PT01	K-31	39.3	19.2	7.6	5.62	Obs.	
-	18-23	-	36971	珪藻土	-	-	VH-03	K-32	265.0	93.0	35.0	620.0	珪藻土	
-	18-21	-	37120	炉石	-	-	VH-03	K-32	15.6	13.6	39.5	860.0	Sa.	
-	18-15	-	37116	炉石	-	-	VH-03	K-32	12.8	10.4	17.6	380.0	Sa.	
-	18-22	-	37119	炉石	-	-	VH-03	K-32	34.8	10.4	52.0	245.0	Sa.	
-	18-16	-	37114	炉石	-	-	VH-03	K-32	14.8	13.6	25.7	880.0	Sa.	
-	18-19	-	37112	炉石	-	-	VH-03	K-32	18.8	11.2	26.0	660.0	Sa.	
-	18-13	-	37118	炉石	-	-	VH-03	K-32	16.0	14.0	34.0	660.0	Sa.	
-	18-20	-	37111	炉石	-	-	VH-03	K-32	19.2	13.2	26.1	109.0	Sa.	
-	18-17	-	37115	炉石	-	-	VH-03	K-32	15.2	10.4	29.7	590.0	Sa.	
-	18-14	-	37117	炉石	-	-	VH-03	K-32	20.0	14.0	39.6	106.0	Sa.	
-	18-18	-	37113	炉石	-	-	VH-03	K-32	16.0	12.0	20.3	490.0	Sa.	

PT01 覆土1層から石槍1点、スクレイパー1点、剥片1点、礫1点、計4点(22.95g)が出土した。礫は砂岩製、他は黒曜石製である。

11は石槍、両面調整により左右非対称な菱形に整形されている。基端が欠損する。12はスクレイパー、縦長剥片を素材とし、剥片末端から側縁にかけて刃部が施されている。刃部は腹面側の平坦剥離痕を打面とする急角度剥離により作出されている。刃部平面はU字形を呈する。

時期：床面及びベンチ上より出土した余市式土器から縄文時代後期初頭～前葉と思われる。HF01から採取した炭化材で年代測定を行ない、3,850±30yrBPという結果を得ている。(第4部第I章第1節)。(1～6：奈良 7～12：山田)

## 第2節 住居様遺構

本遺構については、プランの規模が大きく立ち上がりも比較的明瞭であったが、坑底面に焼土や遺物は伴わない遺構を住居様遺構とした。1基のみの検出である。

1号住居様遺構[VPX-01] (図Ⅲ-5・6 図版9-1～3・18-2-24)

位置:L・M-34 規模:(266)×194×4.2cm 検出層位:VI

長軸方向:N-39° E 平面形:不整形

**確認・調査:** V層調査が終了し、VI層で遺構確認を行っていたところL・M-34区でV層が落ち窪む楕円形プランを確認した。周辺の精査を行い範囲確認した後、十字ベルトを設定し断面で立ち上がりを確認した。遺構中央付近からはフレイク・チップが多く出土するため、別途トレンチを設定して断面確認を行ったが、焼土や土坑などの付属遺構は認められなかったため範囲の記録を行った。断面・平面の記録後ベルトを外して完掘写真を撮り調査終了とした。その際柱穴の確認を行ったが検出していない。

**堆積状態:** V層主体の層にTa-d・炭化物が少量混入する自然堆積である。炭化物の供給源は不明。中央付近にはフレイク・チップを多く含む層が認められる。

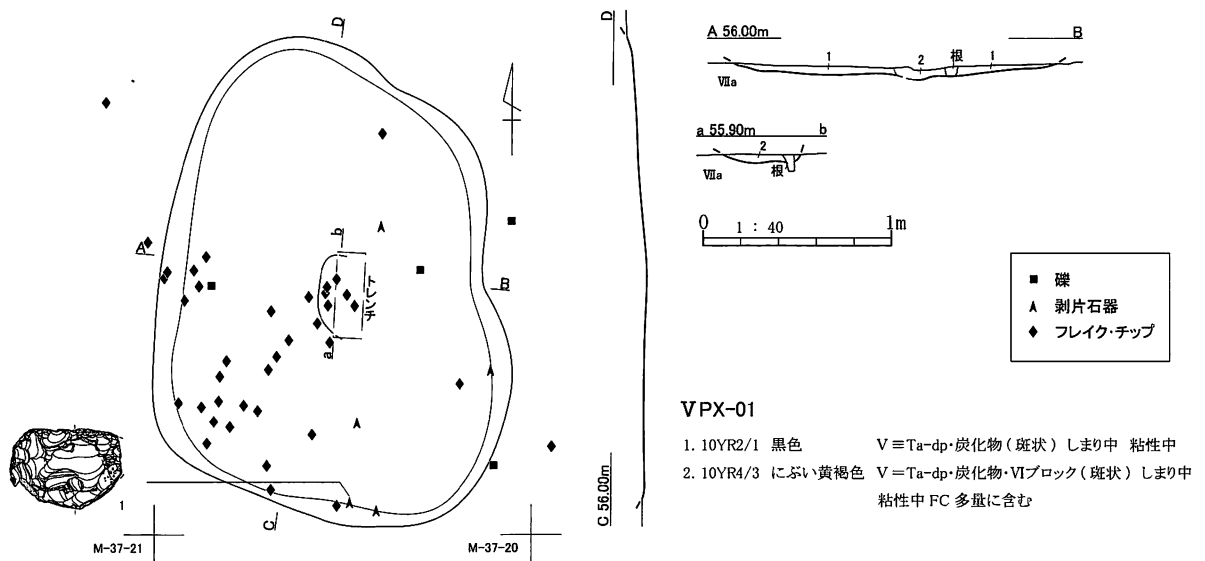
**遺物出土状態:** 中央より南側からフレイク・チップが42点、剥片石器6点が出土している。いずれも覆土からの出土である。 (奈良)

**出土遺物** (図Ⅲ-6-1 図版18-2-24) 1は下面に岩屑面が残置する平面楕円形、断面凸レンズ状の両面調整石器で、主に上方と横位から剥片を剥離した後、縁辺に微細な調整が施されている。右側縁部が欠損するが、表面の欠損面付近に集中した敲打痕が認められることから、半割を意図した可能性がある。

時期:不明

(山田)

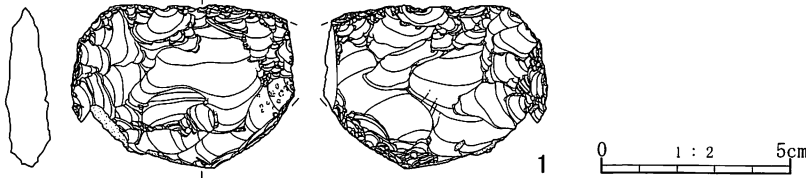
VPX-01



図Ⅲ-5 VPX-01 平面及び断面図

表Ⅲ-7 VPX-01属性表

挿図 番号	図版 番号	グリッド	層位	平面形	調査面規模 (cm)		坑底面規模 (cm)		深さ (cm)	長軸 方向	調査 面長 短比	坑底 面長 短比	出土遺物	備考
				調査面/坑底面	長軸	短軸	長軸	短軸						
Ⅲ-5	9-1	L・M-34	VI	不整形/不整形	(266)	194	254	182	4.2	N-39° E	1.9	2.1	両面調整石器	



図Ⅲ-6 VPX-01 出土剥片石器

表Ⅲ-8 VPX-01 出土剥片石器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	グリッド	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ6-1	18-24	-	M-37	37188	両面調整石器	-	1	59.0	42.7	13.3	37.5	Obs.	

### 第3節 土坑墓

1号土坑墓[VGP-01] (図Ⅲ-7 カラー図版2-2 図版8・19・20)

位置：L・M-34 規模：236×128×36 cm 検出層位：Vc

長軸方向：N-39° W 平面形：楕円形

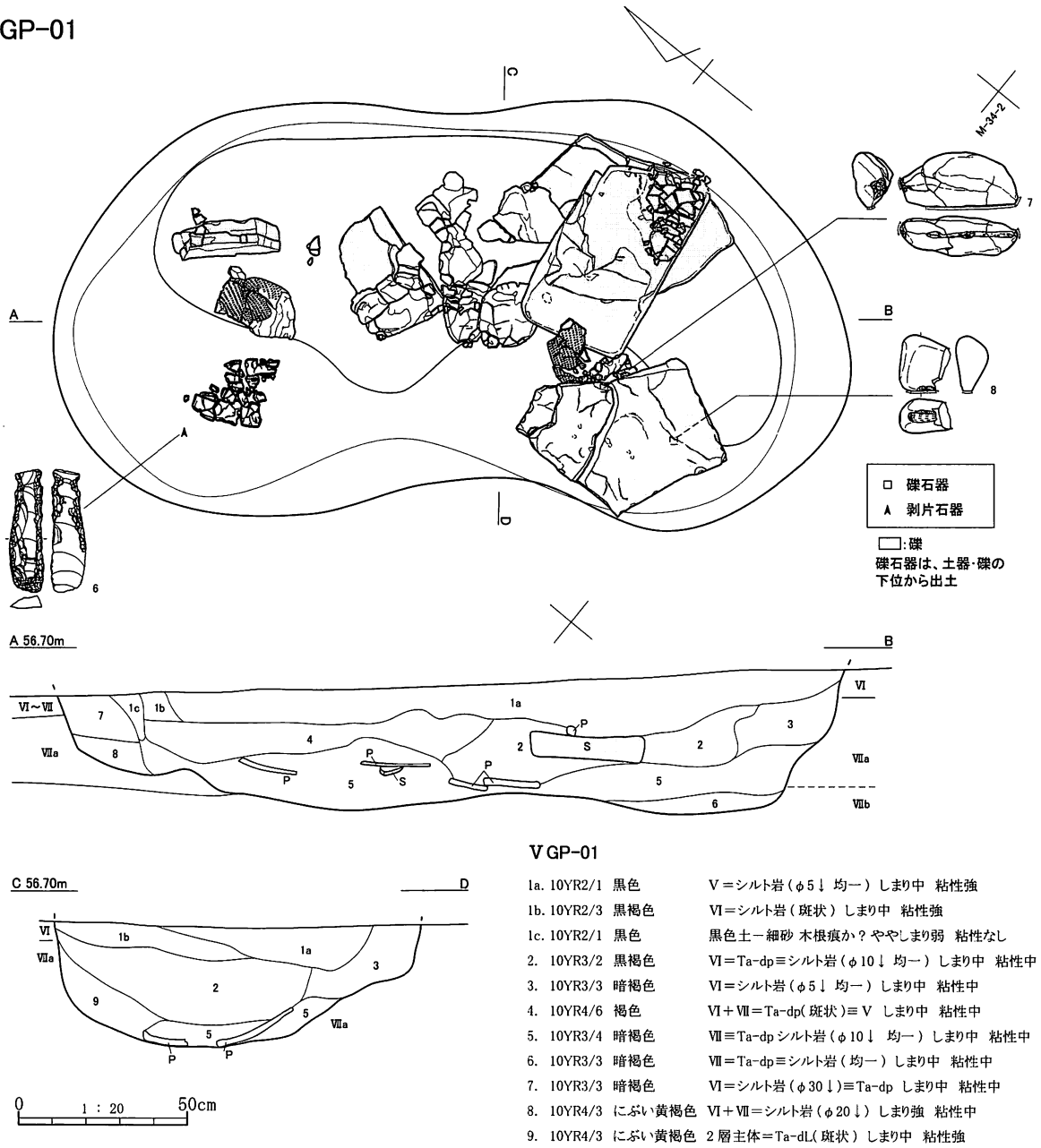
**確認・調査：**Vc層調査中にⅡ群A2a類の土器片がまとまって出土する地点を検出した。堆積状態を確認するためにトレンチを設定し掘り下げたところ、土器の北東側で砂岩の板状礫を検出したため、土坑を想定した調査に切り替えた。プランを確認するために全体を掘り下げたところ、VI層上位でV層の落ち込む範囲が認められたことから長短軸にベルトを設定し断面の記録を行った。土坑内には大型の板状礫がⅡ群A2a類の土器が折り重なるように出土したため、土坑墓と判断し断面の記録後、遺物の図化、撮影を行った。遺物は土器、礫の遺存状態が非常に脆弱であったため、5%のバインダー溶液を刷毛で塗布し、日をおいて10%の溶液を塗布した。遺物がある程度硬化した状態で土壌ごと取り上げ、坑底面の土壌サンプルを採取しながら完掘を行った。その際遺体層に注意をはらったが、明瞭な検出には至っていない。完掘後、平面の記録と写真を撮影して調査終了とした。

**堆積状態：**1a~1c層はV~VI層を基層として覆土上位に堆積する。2層から下位はVI~VII層が基層となり、シルト岩、Ta-dパミス少量から微量含む。土器や板状礫の崩落により色調や混入物が異なるため、これらの層は埋土層と考えられる。坑底面の5・6層には粘性は認められるものの、明瞭な遺体層は確認できていない。

**遺物出土状態：**遺物は検出面上位に土器片が1ヶ所まとまっている他は全て、中位から坑底面にかけて出土している。土坑内の遺物分布状態は中央から南東側にかけてまとまって出土する傾向にあり、大型の板状礫が一部折り重なるように検出される。また、北西側からは板状礫が1点ほぼ垂直になった状態で出土している。土器は中央付近でまとまりが見られるが、一部は板状礫に挟まれた状態で出土している。いずれも器表面が摩滅し、剥落が著しい。その他、坑底面からはすり石2点、つまみ付きナイフ1点が出土している。



V GP-01



V GP-01

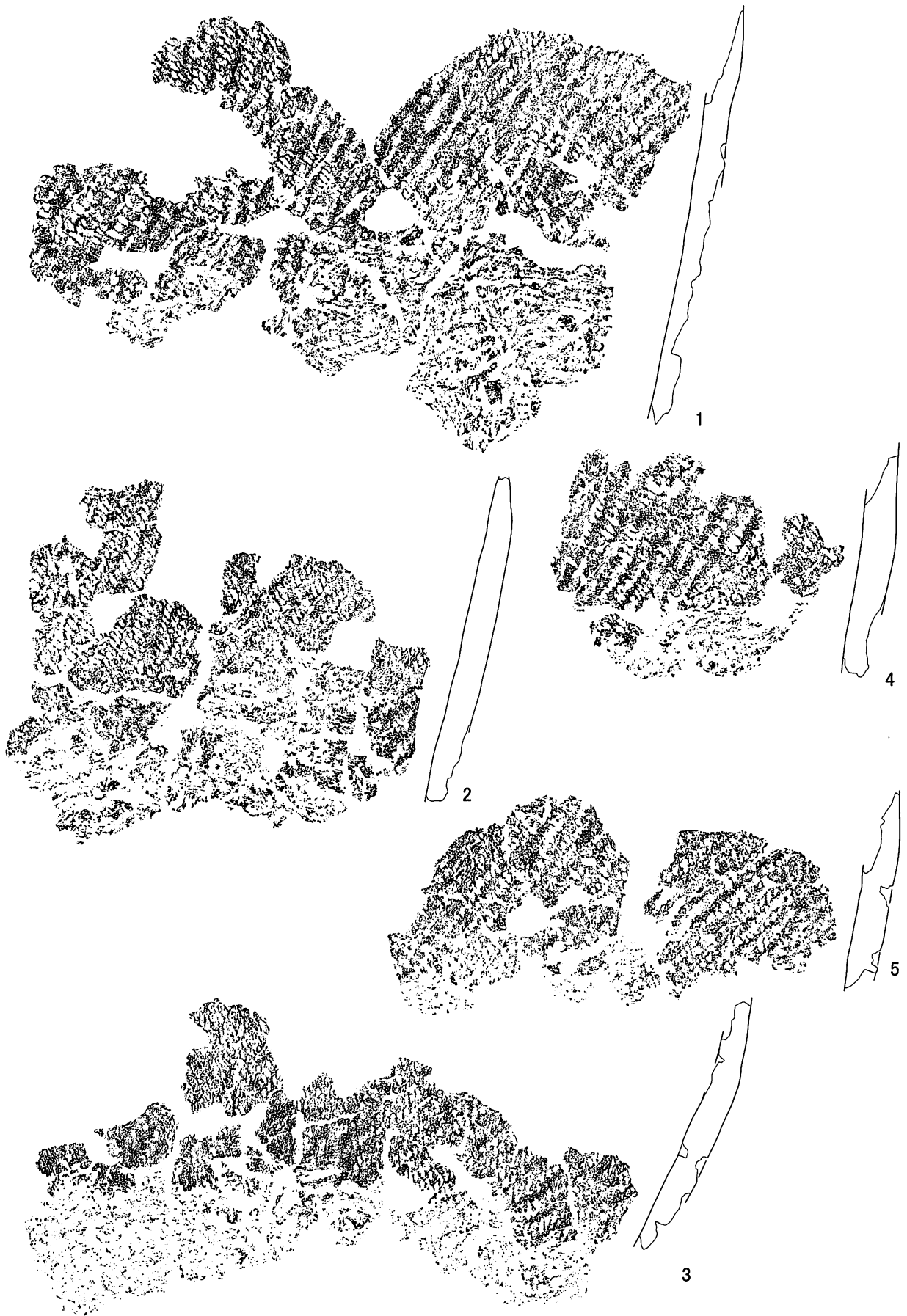
- 1a. 10YR2/1 黒色 V=シルト岩(φ5↓均一)しまり中 粘性強
- 1b. 10YR2/3 黒褐色 VI=シルト岩(斑状)しまり中 粘性強
- 1c. 10YR2/1 黒色 黒色土-細砂 木根痕か? ややしり弱 粘性なし
- 2. 10YR3/2 黒褐色 VI=Ta-dp≡シルト岩(φ10↓均一)しまり中 粘性中
- 3. 10YR3/3 暗褐色 VI=シルト岩(φ5↓均一)しまり中 粘性中
- 4. 10YR4/6 褐色 VI+VII=Ta-dp(斑状)≡V しまり中 粘性中
- 5. 10YR3/4 暗褐色 VII=Ta-dpシルト岩(φ10↓均一)しまり中 粘性中
- 6. 10YR3/3 暗褐色 VII=Ta-dp≡シルト岩(均一)しまり中 粘性中
- 7. 10YR3/3 暗褐色 VI=シルト岩(φ30↓)≡Ta-dp しまり中 粘性中
- 8. 10YR4/3 にぶい黄褐色 VI+VII=シルト岩(φ20↓)しまり強 粘性中
- 9. 10YR4/3 にぶい黄褐色 2層主体=Ta-dl(斑状)しまり中 粘性強

図Ⅲ-7 V GP-01 平面及び断面図

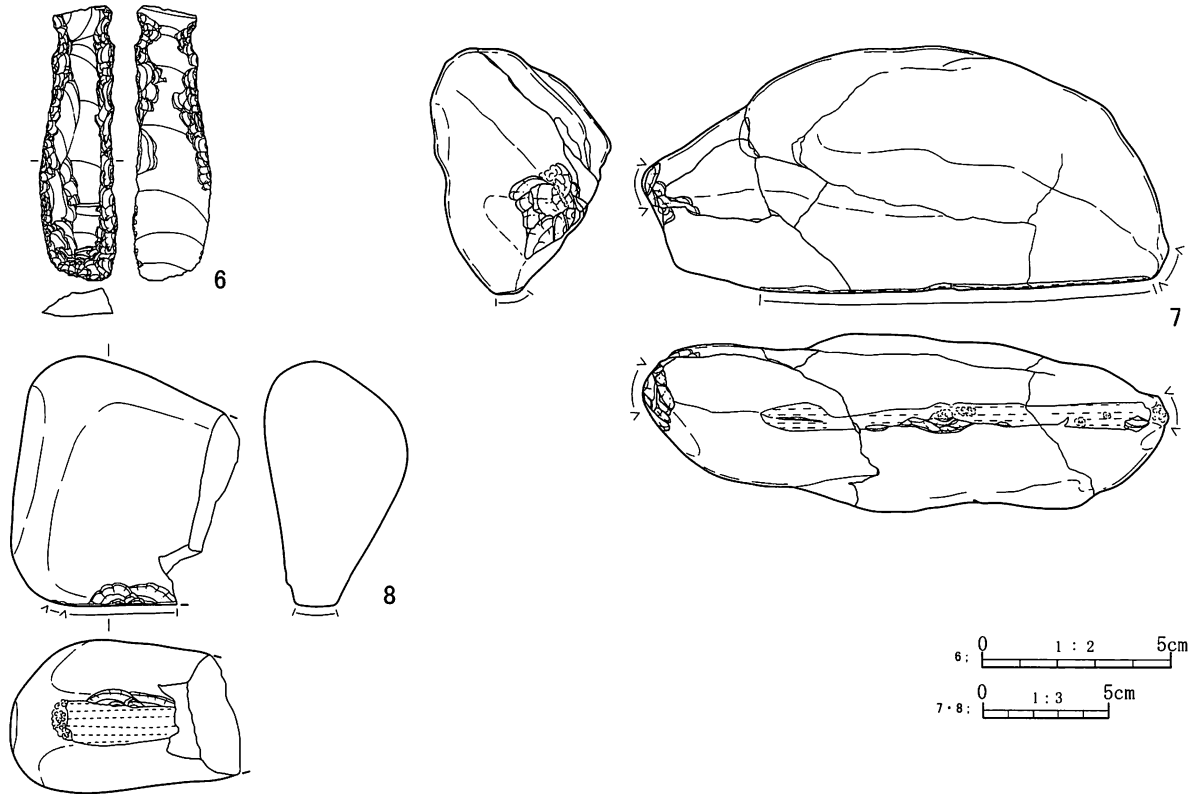
表Ⅲ-9 V GP-01属性表

挿図番号	図版番号	グリッド	層位	平面形	調査面規模 (cm)		坑底面規模 (cm)		深さ (cm)	長軸方向	調査面長短比	坑底面長短比	出土遺物	備考
				調査面/坑底面	長軸	短軸	長軸	短軸						
III-7	8-1	L・M-34	Vc	楕円形/不整形	236	128	186	80	36	N-39° W	1.84	2.33	土器 剥片石器 礫石器	

出土遺物 (図Ⅲ-8-1~5・9-6~8 図版19・20) 1~5は同一個体と思われるIIA2aの土器である。1・2は口縁部に近い部分であるが、風化、剥落が著しい。3は胴部下半と思われる。地文のLR斜行縄文のみで、胎土には滑石を多量に含む。この他接合していないが、同一片が21点出土している。6は頁岩製のつまみ付きナイフで側縁に加工が認められるA1タイプで、端部に搔器状



図Ⅲ-8 VGP-01 出土土器



図Ⅲ-9 VGP-01 出土石器

表Ⅲ-10 VGP-01出土土器属性表

挿図番号	図版番号	個体名称	分類	部位	遺物番号/ 調査区/層位	器形等	文様	胎土	備考
						口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点-底面	口唇-口縁-内面/胴部- 内面 /底側面-底面-内面		
Ⅲ-8-1	19-1	JP003A	Ⅱ A2a	口縁~ 胴部	37257・37261・ 37262/L-34/5	やや外傾	LR斜行縄文	滑石多量	
Ⅲ-8-2	19-2	JP003B	Ⅱ A2a	胴部	37256/L-34/5	直立気味	LR斜行縄文	滑石多量	
Ⅲ-8-3	19-3	JP003C	Ⅱ A2a	胴部	37260/L-34/5	外傾	LR斜行縄文	滑石多量	
Ⅲ-8-4	19-4	JP003E	Ⅱ A2a	胴部	37259/L-34/5	やや外傾	LR斜行縄文	滑石多量	
Ⅲ-8-5	19-5	JP003D	Ⅱ A2a	胴部	37250・ 37251/L-34/5	やや外傾	LR斜行縄文	滑石多量	

表Ⅲ-11 VGP-01出土石器等属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-9-6	19-6	-	37249	つまみ付きナイフ	A1	5	L-34	72.3	20.0	7.1	13.9	Sh.	
Ⅲ-9-7	19-7	-	37254	すり石	I	5	L-34	168.0	98.8	69.3	1470	Sa.	3点接合
Ⅲ-9-8	19-8	-	37253	すり石	I	5	L-34	96.4	85.4	62.3	625.0	Sa.	
-	20-11	-	37229	板状礫	-	2	L-34	660	495	10.2	2930	Sa.	
-	20-12	-	37230	板状礫	-	2	L-34	300	270	7.5	1036	Sa.	
-	20-10	-	37263	板状礫	-	2	L-34	380	248	11.2	1450	Sa.	
-	20-13	-	37252	板状礫	-	2	L-34	610	330	11.8	2870	Sa.	
-	20-9	-	37265	板状礫	-	2	L-34	49	380	55.5	1676	Sa.	

の刃部が作出されている。7・8はすり石で断面三角形状を呈し、一側縁を使用している。7は端部に敲打痕が認められる。フローテーションからはクルミが僅かに出土している。(奈良)

#### 第4節 焼土

本節で取り扱う遺構はVF-17~19及びVFCB-09である。VFCB-09については出土地点及び遺物の分布状態からVF-19と共伴すると考えられ本節に含めて掲載している。また、遺構名は平成14・15年度調査からの通し番号を使用しているため、VF-17から付番している。(奈良)

##### VF-17 (図III-10 図版9-4)

位置：M-30 規模：16×14×8 cm 平面形：不整形

**確認・調査：**TP-97の覆土上位においてTピットを半截している途中に確認した。断面の色調が明赤褐色を示していたので、焼土の可能性を考え周辺の精査を行った。精査の結果、規模は16×14 cmと小規模で、断面観察から1層が被熱層と考えられ、Tピットの窪みを利用して形成されたものと判断した。断面、平面の記録をして調査終了とした。肉眼観察で焼骨等は認められていない。

(奈良)

##### VF-18 (図III-10 図版9-5・6)

位置：M-40 規模：34×28×5 cm 平面形：楕円形

**確認・調査：**立会区の調査中、Vc層で明褐色の範囲を確認した。周囲には遺構はなく、遺物も殆ど出土していなかったが、色調等から焼土を想定し調査を行った。平面の記録後、長軸方向に半截して断面確認を行った。断面観察ではレンズ状に明褐色層が認められ焼土と判断した。また、焼骨片等は肉眼観察で確認できなかったため、サンプルは採取していない。(奈良)

##### VF-19・VFCB-09 (図III-10 図版9-7・8・10-1~3・8・21-1・2・8~10)

[VF-19] 位置：M-42 規模：73×26×6 cm 平面形：不整形

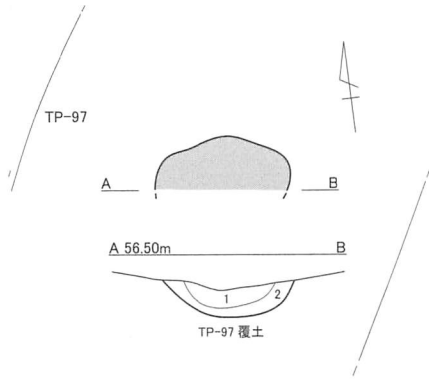
[VFCB-09] 位置：M-42・43 規模：119×61 cm 平面形：不整形

**確認・調査：**立会区をバックホーによってV層を除去している途中にVa層で黒曜石の剥片が多量に出土する地点を検出した。分布状態から集中遺物であると考えられ、黒曜石の広がる範囲を確認し平面形の記録を行った。遺物の取り上げに関しては、立会区域のため親指爪大の剥片のみ座標で取り上げ、それ以外は土壌ごと採取し、後にウォーターセパレーションを行って遺物回収した。土壌の回収後、V層を掘り下げてゆくとVc層で赤褐色の範囲を確認した。半截後に断面観察を行ったところ地山被熱層が認められ、周囲にも被熱した石皿が出土していることから焼土として調査を行った。断面、平面の記録をとって調査終了とした。骨片等は肉眼観察で認められていないためサンプルは採取していない。なお、VF-19は半截を行う際にトレンチ幅が広すぎたため西側を損失している。VF-19とVFCB-09は層位的に上下があるものの、被熱した剥片石器及びフレイクチップが出土しているため共伴関係と捉えて調査、報告を行っている。(奈良)

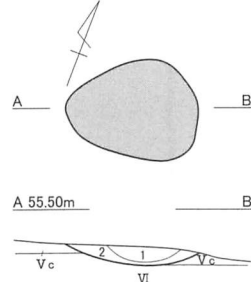
**出土遺物：**[VF-19] (図III-11-1・2 図版21-1・2) スクレイパー1点、剥片1点、石皿5点(1個体)、礫9点、計16点(9,025.98g)が出土した。剥片石器・剥片は黒曜石製、石皿は砂岩製、礫は砂岩である。

1はスクレイパー、下半が欠損する不定形剥片を素材とし、背面左側縁に平坦剥離による刃部が施されている。2は石皿、厚さ5.3 cmの板状礫を素材とし、両面とも器体のほぼ中央に平滑なすり面が形成されている。長軸方向の擦痕が観察される。破損面で5点が接合し1個体となった。1・2ともに被熱が認められる。(山田)

VF-17



VF-18

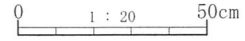


VF-17

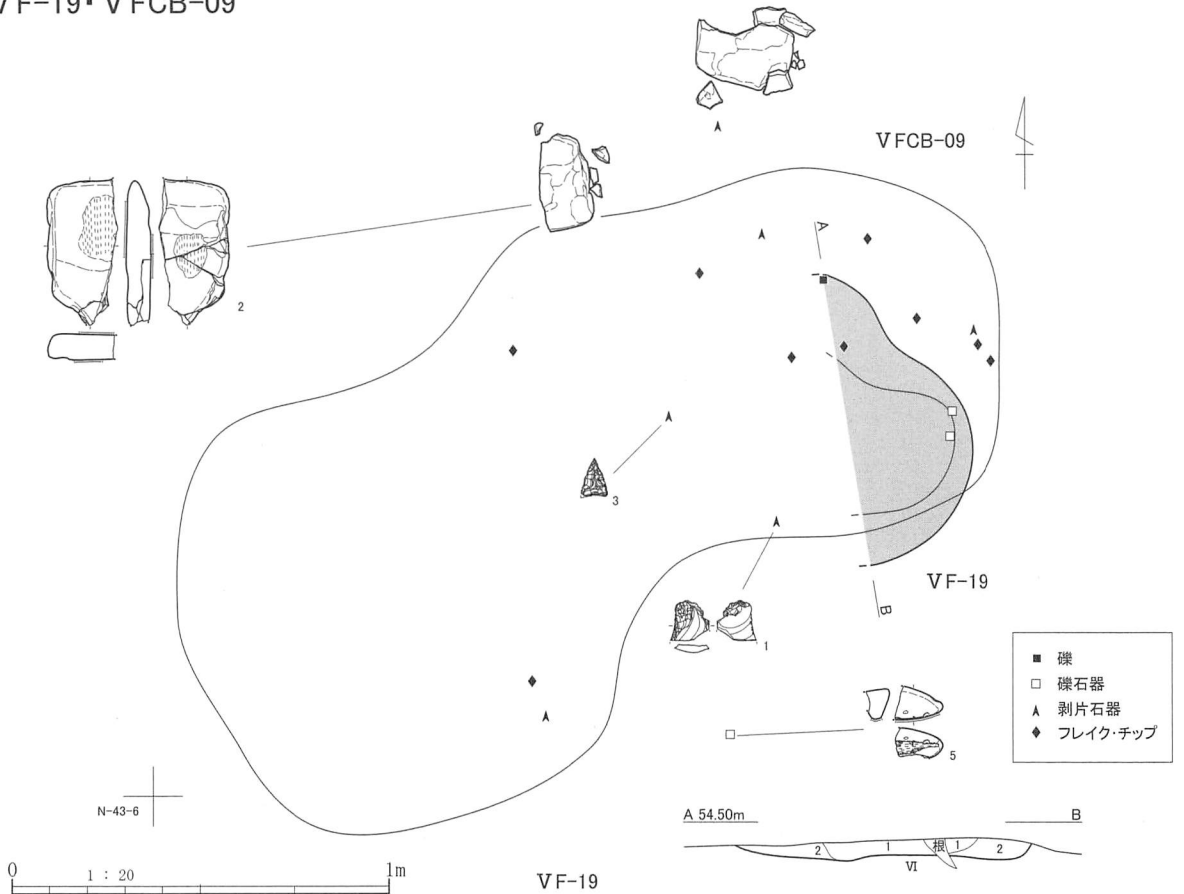
- 1. 5YR5/8 明赤褐色 強い地山被熱層 しまりやや弱 粘性弱
- 2. 7.5YR4/6 暗褐色 弱い地山被熱層 しまりやや弱 粘性中

VF-18

- 1. 7.5YR5/8 明褐色 強い地山被熱層 Vc=焼土粒 (φ10 ↓ 斑状) しまり中 粘性やや強
- 2. 7.5YR4/4 褐色 弱い地山被熱層 Vc~IV=焼土粒 (φ10 ↓ 斑状) しまり中 粘性強



VF-19・VFCB-09



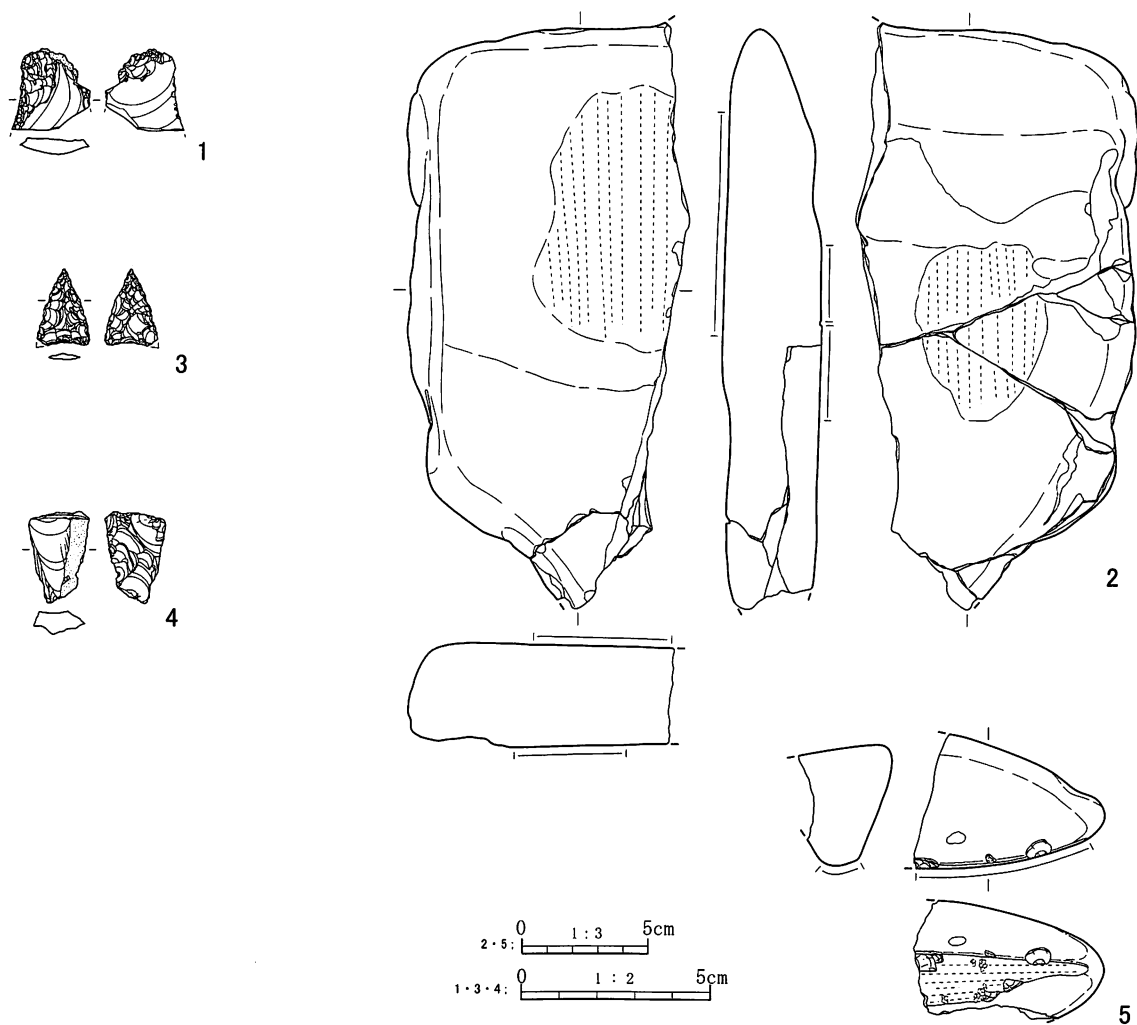
VF-19

- 1. 5YR4/8 赤褐色 強い地山被熱層 Vc=焼土粒 (φ10 ↓ 斑状) しまりやや弱 粘性強
- 2. 7.5YR5/8 明褐色 弱い地山被熱層 Vc=焼土粒 (φ10 ↓ 斑状) しまりやや弱 粘性強

図Ⅲ-10 VF-17~19・VFCB-09 平面及び断面図

表Ⅲ-12 VF-17~19・VFCB-09属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模 (cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅲ-10	9-4	VF-17	M-30	V	不整形	16	14	8	無	TP-97上層
Ⅲ-10	9-5	VF-18	M-40	Vc	楕円形	34	28	5	無	
Ⅲ-10	9-7	VF-19	M-42	Vc	不整形	73	26	6	無	
Ⅲ-10	10-8	VFCB-09	M-42・43	Va	不整形	119	61	-	無	



図Ⅲ-11 VF-19・VFCB-09 出土遺物

表Ⅲ-13 VF-19・VFCB-09出土石器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-11-1	21-1	-	37325	スクレイパー	C1	Vc	VF-19	N-42	23.7	18.4	5.2	2.1	Obs.	
Ⅲ-11-2	21-2	-	37387	石 皿	I	Vc	VF-19	M-42	300.0	142.0	52.6	2700	Sa.	
Ⅲ-11-3	21-8	-	37286	石 鏃	A2	Vc	VFCB-09	N-42	20.3	13.7	1.9	0.48	Obs.	
Ⅲ-11-4	21-9	-	37426	石 核	-	VbU	VFCB-09	-	22.8	15.6	5.6	2.38	Obs.	
Ⅲ-11-5	21-10	-	37290	すり石	I	Vc	VFCB-09	N-42	60.6	72.9	36.4	136.80	Mud.	

出土遺物：〔VFCB-09〕（図Ⅲ-11-3～5 図版 21-8～10）石鏃 4 点、RF 8 点、UF15 点、石核 1 点、剥片 1,326 点、すり石 1 点、礫 1 点、計 1,356 点（206.19g）が出土した。剥片石器はすべて黒曜石製、剥片は頁岩製 1 点を除き黒曜石製、すり石は泥岩製、礫は砂岩である。3 は石鏃、両面調整により整形された無茎三角鏃で、被熱が認められる。4 は石核、円礫面が残置する不定形剥片を素材とし、礫面を打面に腹面側へ多方向から小型の不定形剥片を剥離している。目的剥片が小型のため、石鏃など定型石器の未成品の可能性はある。5 はすり石、断面三角形礫の稜上に長軸方向のすり面が形成されている。3・5 は被熱が認められ、5 は被熱により器体半分が欠損している。

（山田）

## 第5節 Tピット (図Ⅲ-12～15-1 図版 11～13・21-11)

Tピットは8基を検出した。平成14・15年度の調査では95基を検出しており、遺跡全体では103基となる。

### 検出および調査

Vc層上面で黒色土にTa-dパミスを斑状に含む溝状および長楕円～円形プランを確認し調査した。短軸方向で半截した後、土層堆積状態の観察・記録を行い、完掘後は平面形状、エレベーションを記録して調査を終了した。

### 形態分類

Tピットの形態分類は、『厚幌1遺跡』(厚真町教育委員会 2004)、『ニタツプナイ遺跡』(厚真町教育委員会 2009b)を踏襲する。

A型：長短比が8以上で、長さに対して幅が狭い溝状のタイプ。

A1型 長軸が2m以上のもの A2型 長軸が2m未満のもの

B型：長短比が4以上、8未満で、長楕円形のタイプ。

B1型 杭跡がないもの B2型 杭跡があるもの

C型：長短比が4未満で、楕円形～円形に近いタイプ。

C1型 杭跡がないもの C2型 杭跡があるもの

D型：長軸1m、短軸0.2m前後、深さ0.5m以下の小型のタイプ。

### 形態

検出した8基の形態は、A1型、C2型、不明に分類できる。

A1型：TP-97・99・101・103の4基が該当する。長楕円形で、坑底面はすべてⅧ層まで掘り込まれている。長軸断面でオーバーハングして直立気味に開くもの(TP-99・101・103)と、坑底から坑口まで緩やかに立ち上がるもの(TP-97)がある。TP-99は短軸の片側壁面が大きく崩落したものと考えられる。調査面規模の平均値は269×85×122cm、坑底面規模の平均値は236×22cmである。最大規模のものはTP-97で310×105×166cmを測る。

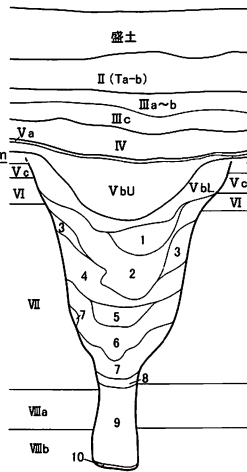
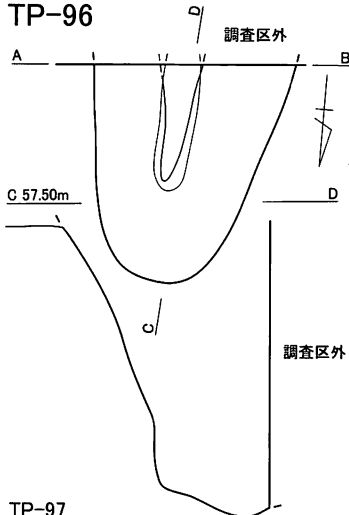
C2型：TP-98・100・102の3基が該当する。楕円形2基(TP-98・100)、円形1基(TP-102)である。坑底面はすべてⅧ層まで掘り込まれている。断面形状はオーバーハングして直立気味に開くもの(TP-98・100)と、坑底から坑口まで緩やかに立ち上がるもの(TP-102)がある。杭跡はTP-100が坑底面中央に1基、TP-98・102が長軸上に2基を検出した。TP-98 KP01は土層断面で逆茂木痕を確認した。

不明：TP-96の1基が該当する。調査区壁面にかかるため全体形状が不明であるが、A1型と考えられる。

### 堆積状態

1層はTa-dパミスを斑状に含むV層が主体である。Ta-dパミスの混入起源は不明である。覆土上位はシルト岩を含むV～VI層の堆積、覆土中～下位は崩落したブロック状のTa-dロームとTa-dパミス、青灰色砂の互層堆積がみられる。覆土の堆積は壁面の崩落による流入と考えられる。また、坑底面、下位の間層に堆積する5cm以下の腐植質の黒色土は自然堆積と考えられる。

TP-96



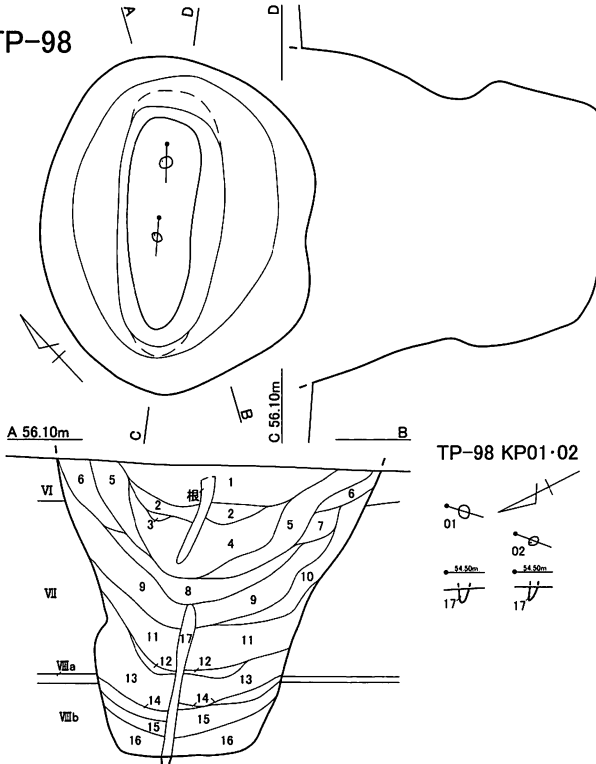
TP-96

- |                     |   |
|---------------------|---|
| 1. 10YR2/2 黒褐色      | Vc=シルト岩 (φ 50 ↓) しまり強 粘性強                       |
| 2. 10YR4/3 (にぶい)黄褐色 | VI=シルト岩 (φ 50 ↓) しまり強 粘性強                       |
| 3. 7.5YR4/4 褐色      | Ta-dL-1層 しまり強 粘性弱                               |
| 4. 10YR4/6 褐色       | Ta-dL-2層=Ta-dp (φ 10 ↓) しまり強 粘性弱                |
| 5. 10YR4/6 褐色       | Ta-dL-VI=シルト岩 (φ 30 ↓) ≡Ta-dp (φ 10 ↓) しまり強 粘性強 |
| 6. 2.5Y4/2 暗灰黄色     | Ta-dL-1層・Ta-dp (φ 10 ↓)・青灰色砂 しまり中 粘性なし          |
| 7. 10YR4/6 褐色       | 5層+6層 しまり強 粘性やや強                                |
| 8. 2.5Y4/2 暗灰黄色     | Ta-dL-青灰色砂=Ta-dp (φ 10 ↓) しまり中 粘性なし             |
| 9. 10YR4/4 褐色       | Ta-dL-Ta-dp (φ 10 ↓ 均一) + 青灰色砂 しまり弱 粘性弱         |
| 10. 10YR2/1 黒色      | V層 しまり弱 粘性強                                     |

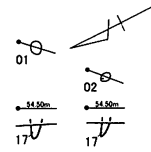
TP-97

- |                 |  |
|-----------------|--|
| 1. 10YR2/1 黒色   | Vb しまり中 粘性強                                      |
| 2. 10YR2/3 黒褐色  | Vb-Ta-dp (均一)=シルト岩 (斑状) しまり強 粘性強                 |
| 3. 10YR2/1 黒色   | Vb=シルト岩 (φ 10 ↓ 均一) ≡青灰色砂 (均一) しまり中 粘性中          |
| 4. 10YR2/1 黒色   | Vb ≡Ta-dp (均一) しまり強 粘性強                          |
| 5. 10YR2/2 黒褐色  | V=Ta-d 風化L (均一) しまり強 粘性中                         |
| 6. 10YR3/4 暗褐色  | Vc=シルト岩 (φ 10 ↓ 均一) ≡Ta-dp (均一) しまり中 粘性強         |
| 7. 7.5YR5/6 明褐色 | VI=Vc (均一)・シルト岩 (φ 20 ↓ 斑状) ≡Ta-dp (均一) しまり中 粘性強 |
| 8. 7.5YR3/4 暗褐色 | Ta-d 風化L-VI (均一)=シルト岩 (φ 30 ↓ 均一) しまり強 粘性中       |
| 9. 7.5YR4/1 褐灰色 | 青灰色砂=Ta-d 風化L 互層堆積 しまり中 粘性弱                      |
| 10. 10YR4/4 褐色  | Ta-d 風化L=青灰色砂 (均一) しまり強 粘性強                      |
| 11. 10YR4/6 褐色  | 青灰色砂 ≡Ta-dL (均一) しまり中 粘性弱                        |
| 12. 10YR3/2 黒褐色 | 青灰色砂 ≡Ta-dp (均一) しまり弱 粘性弱                        |
| 13. 10YR4/6 褐色  | Ta-dL=シルト岩 (φ 10 ↓ 均一) しまり弱 粘性中                  |
| 14. 10YR3/1 黒褐色 | 青灰色砂=Ta-dL (斑状) しまり弱 粘性中                         |
| 15. 10YR2/1 黒色  | V=Ta-d 風化L (均一) ≡青灰色砂 (均一) しまり中 粘性弱              |
| 16. 10YR3/3 暗褐色 | Ta-d 風化L=V しまり中 粘性強                              |

TP-98



TP-98 KP01-02

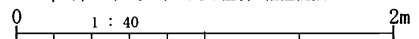


TP-98

- |                    |   |
|--------------------|---|
| 1. 10YR2/3 黒褐色     | V-Ta-dp・シルト岩 (φ 30 ↓ 均一)=VI しまり強 粘性強                    |
| 2. 7.5YR5/8 明褐色    | VI-Ta-dL=V (斑状) ≡Ta-dp (φ 10 ↓ 均一) しまりやや弱 粘性極強          |
| 3. 7.5YR5/8 明褐色    | Ta-dLブロック ≡V (斑状) しまり中 粘性中                              |
| 4. 10YR2/2 黒褐色     | V-Ta-dp (φ 30 ↓ 均一) ≡シルト岩 (φ 30 ↓) しまりやや弱 粘性強           |
| 5. 10YR2/3 黒褐色     | Vc=Ta-dp (φ 10 ↓) しまり中 粘性強                              |
| 6. 10YR3/3 暗褐色     | VI しまり強 粘性中   |
| 7. 10YR4/4 褐色      | VI-Vブロック ≡シルト岩 (φ 10 ↓) しまりやや弱 粘性強                      |
| 8. 10YR2/1 黒色      | V=Ta-dpブロック (φ 10 ↓) ≡シルト岩 (φ 10 ↓) しまり弱 粘性極強           |
| 9. 10YR4/4 褐色      | VI-Ta-dp (φ 10 ↓ 均一)=V (斑状) ≡シルト岩 (φ 10 ↓ 均一) しまり弱 粘性極強 |
| 10. 7.5YR5/8 明褐色   | Ta-dL=Ta-dp (φ 10 ↓) ≡シルト岩 (φ 10 ↓ 均一) しまりやや弱 粘性極強      |
| 11. 10YR5/8 黄褐色    | Ta-dL-青灰色砂 しまり極弱 粘性極強                                   |
| 12. 10YR2/3 黒褐色    | V層=青灰色砂 (均一) しまり極弱 粘性極強                                 |
| 13. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 | 青灰色砂-Ta-dL しまり弱 粘性弱                                     |
| 14. 2.5Y3/2 黒褐色    | 青灰色砂 しまり弱 粘性弱   |
| 15. 7.5YR5/8 明褐色   | Ta-dL-青灰色砂 しまり極弱 粘性極強                                   |
| 16. 10YR2/3 黒褐色    | V層=Ta-dp (φ 10 ↓)・青灰色砂 しまり弱 粘性極強                        |

TP-98 KP01-02

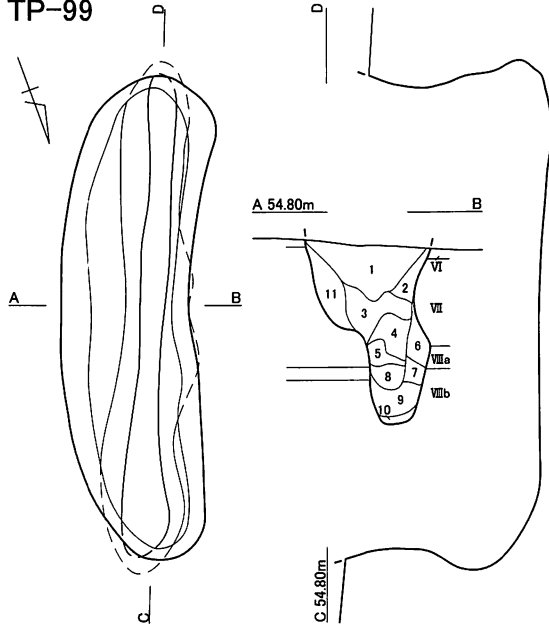
- |                |                                 |
|----------------|---------------------------------|
| 17. 10YR2/1 黒色 | V層=Ta-dp (φ 10 ↓ 均一) しまり極弱 粘性極強 |
|----------------|---------------------------------|



図III-12 TP-96 ~ 98 平面図及び断面図



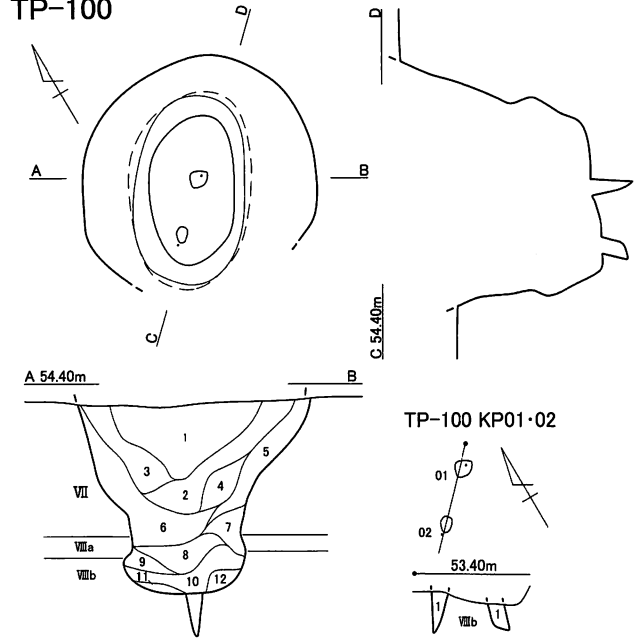
TP-99



TP-99

- |                   |                              |
|-------------------|------------------------------|
| 1. 10YR2/1 黒色     | V-Ta-d1=Ta-dp しまり強 粘性中       |
| 2. 10YR4/4 褐色     | VI=Ta-dL-Ta-d1 しまり強 粘性中      |
| 3. 10YR5/6 黄褐色    | VI+Ta-dL≡シルト岩 しまり強 粘性中       |
| 4. 10YR4/3 にぶい黄褐色 | VI-V≡Ta-dL (均一) しまり弱 粘性中     |
| 5. 10YR5/3 にぶい黄褐色 | Ta-dL しまり弱 粘性中               |
| 6. 10YR5/4 にぶい黄褐色 | Ta-dL≡Ta-dp・青灰色砂 しまり強 粘性弱    |
| 7. 10YR3/3 暗褐色    | VI≡V・Ta-dL (均一) しまり中 粘性中     |
| 8. 10YR4/2 灰黄褐色   | VI=Ta-dL-Ta-dp (均一) しまり中 粘性弱 |
| 9. 10YR4/1 褐灰色    | 青灰色砂=Ta-dL (均一) しまり中 粘性弱     |
| 10. 10YR8/6 黄橙色   | Ta-dL≡V                      |

TP-100



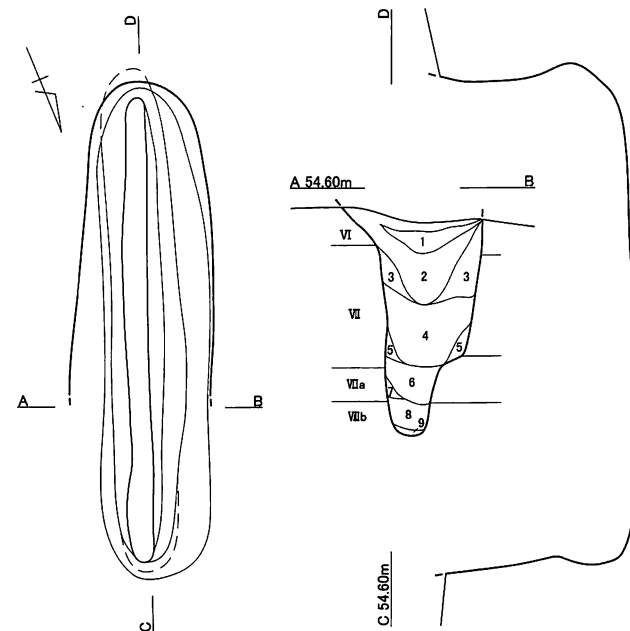
TP-100

- |                    |  |
|--------------------|--|
| 1. 10YR2/1 黒色      | V-Ta-dp (均一)≡シルト岩 (均一) しまり強 粘性中        |
| 2. 10YR1.7/1 黒色    | V≡Ta-dL・細砂 (均一) しまり中 粘性強               |
| 3. 10YR3/4 暗褐色     | V-Ta-d1 (均一)≡シルト岩 (均一) しまり中 粘性中        |
| 4. 10YR3/3 暗褐色     | VI=V≡Ta-dL しまり中 粘性強                    |
| 5. 7.5YR5/8 明褐色    | Ta-dL=シルト岩 (φ10 ↓ 均一) しまり中 粘性強         |
| 6. 7.5YR5/8 明褐色    | Ta-dL=シルト岩 (φ10 ↓ 均一)≡細砂 (均一) しまり中 粘性強 |
| 7. 10YR7/6 明黄褐色    | Ta-d 風化L=細砂 (均一) しまり弱 粘性強              |
| 8. 10YR3/3 暗褐色     | VI=V・Ta-dL・シルト岩 (斑状) 互層堆積 しまり中 粘性強     |
| 9. 10YR4/4 褐色      | Ta-d 風化L≡Ta-d1 しまり強 粘性中                |
| 10. 10YR5/4 にぶい黄褐色 | Ta-d 風化L=Ta-d1 しまり強 粘性強                |
| 11. 10YR5/6 黄褐色    | Ta-d 風化L-Ta-d1 (均一) しまり中 粘性強           |
| 12. 10YR2/2 黒褐色    | Ta-d1=V (均一) しまり中 粘性強                  |

TP-100 KP01-02

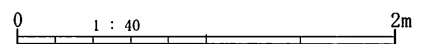
- |                |                             |
|----------------|-----------------------------|
| 1. 10YR2/2 黒褐色 | V+Ta-d2-Ta-dp (斑状) しまり強 粘性弱 |
|----------------|-----------------------------|

TP-101

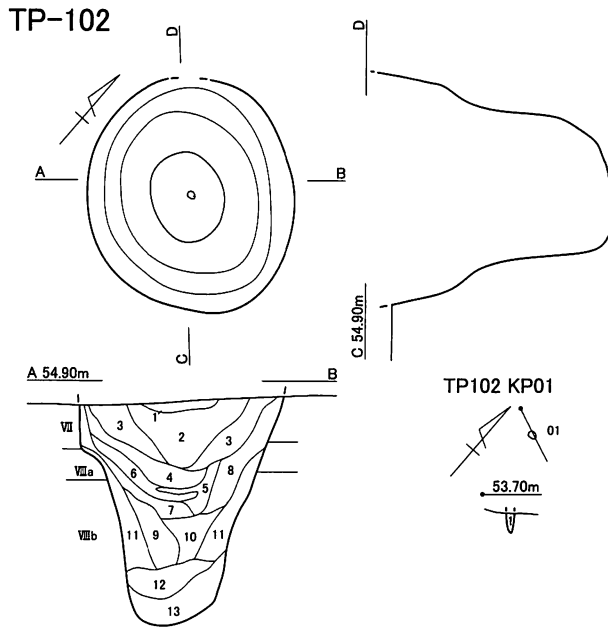


TP-101

- |                   |                                  |
|-------------------|----------------------------------|
| 1. 10YR2/1 黒色     | V-Ta-dp (斑状) しまり中 粘性強            |
| 2. 10YR1.7/1 黒色   | V=Ta-dp (斑状) しまり中 粘性強            |
| 3. 10YR4/4 褐色     | VI=Ta-d1 (斑状) しまり中 粘性中           |
| 4. 7.5YR5/8 明褐色   | Ta-dL=V (斑状)≡Ta-d1 (斑状) しまり中 粘性強 |
| 5. 10YR5/4 にぶい黄褐色 | Ta-d 風化L                         |
| 6. 10YR6/6 明黄褐色   | Ta-d 風化L≡Ta-dp (均一) しまり中 粘性中     |
| 7. 7.5YR4/4 褐色    | Ta-dp                            |
| 8. 5BG4/1 暗青灰色    | Ta-d1                            |
| 9. 10YR4/2 灰黄褐色   | 青灰色砂=Ta-dp (均一)≡V しまり中 粘性強       |



図III-13 TP-99～101 平面図及び断面図

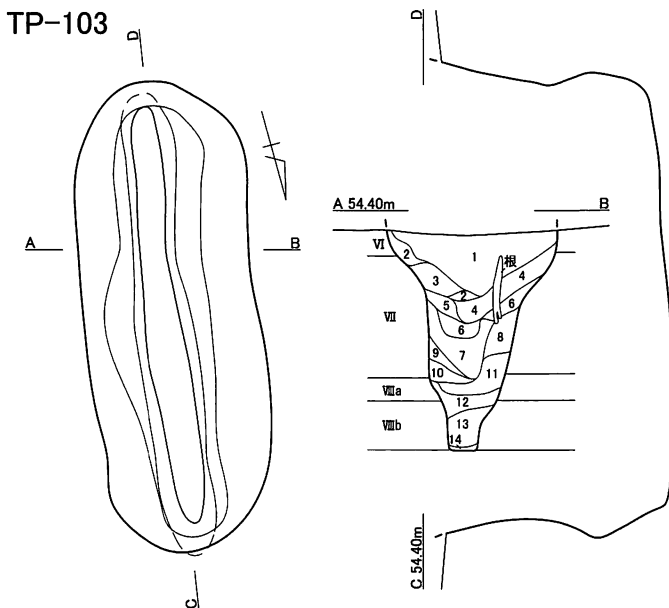


TP-102

1. 10YR3/2 黒褐色 V-Ta-dp (均一) しまり中 粘性弱
2. 10YR2/1 黒色 V-Ta-dp (均一) しまり強 粘性中
3. 10YR3/1 黒褐色 V≡シルト岩 (φ5 ↓ 均一) しまり中 粘性中
4. 10YR4/2 灰黄褐色 VI≡Ta-dp (均一) しまり中 粘性弱
5. 10YR3/2 黒褐色 VI=V (均一)・Ta-dL (斑状) しまり中 粘性中
6. 10YR5/4 にぶい黄褐色 Ta-dL=V (斑状) しまり中 粘性中
7. 10YR2/2 黒褐色 V=Ta-dp (斑状) しまり弱 粘性中
8. 10YR5/6 黄褐色 Ta-dL=V (斑状) しまり中 粘性中
9. 10YR4/2 灰黄褐色 Ta-dL=Ta-dp (均一) しまり弱 粘性中
10. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d2=Ta-d1 (均一) しまり弱 粘性中
11. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-d2
12. 10YR3/1 黒褐色 V+Ta-d2 しまり弱 粘性強
13. 10YR3/2 黒褐色 Ta-d2=V≡Ta-d1 (均一) しまり弱 粘性強

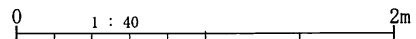
TP-102 KP01

1. 10YR3/3 暗褐色 V+Ta-dp=Ta-dL しまり強 粘性強



TP-103

1. 10YR2/1 黒色 V=Ta-dp≡Ta-dLブロック (斑状) しまり中 粘性中
2. 10YR2/2 黒褐色 VI=Ta-dp・シルト岩 (φ5 ↓ 均一) しまり中 粘性中
3. 10YR3/4 暗褐色 VI=Ta-dp≡VI (均一) しまり強 粘性中
4. 10YR3/3 暗褐色 VI-Ta-dL≡Ta-dp (均一) しまり中 粘性強
5. 10YR4/6 褐色 VI+Ta-dL=シルト岩 (φ10 ↓ 均一) しまり中 粘性中
6. 7.5YR4/6 褐色 Ta-dL=細砂 (均一) しまり中 粘性中
7. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dL
8. 10YR8/6 黄褐色 Ta-d 風化 L=青灰色砂 (均一) しまり中 粘性強
9. 10YR5/8 黄褐色 Ta-d 風化 L+青灰色砂=Ta-dp (均一) しまり中 粘性強
10. 10YR5/4 にぶい黄褐色 Ta-d 風化 L=Ta-dp・青灰色砂 (均一) しまり中 粘性強
11. 10YR5/6 黄褐色 Ta-d 風化 L-Ta-dL (均一)=青灰色砂 (均一) しまり強 粘性強
12. 10YR4/1 褐灰色 Ta-d1=Ta-d 風化 L しまり強 粘性弱
13. 10YR5/4 にぶい黄褐色 Ta-d2+Ta-dL (均一) しまり強 粘性強
14. 10YR4/4 褐色 Ta-dL≡VI・V (均一) しまり強 粘性強



図Ⅲ-14 TP-102・103 平面図及び断面図

分布と配列

調査区東側の標高 56.5~58.0mの緩斜面に 3 基、西側の標高 55.0m付近の窪地に 5 基が分布する。A1 型の長軸はいずれも南北方向にあり、等高線に並行する。C2 型の長軸は、TP-98・100 が北東-南西、TP-102 が北西-南東を向き、このうち TP-98・102 は等高線に直交する。配列が認められたのは TP-99・101・103 の 1 列である。TP-99・101・103 は長軸方向が南北にあり、約 2.5m間隔で東西方向に 3 基が並んでいる。平成 14・15 年度の配列に続くものは検出していない。

新旧関係

平成 14・15 年度の調査で古 : A1 型 → 新 : C2 型の関係を特定できる重複例があった。今年度の調査

ではTピットの重複は検出されておらず、各Tピットの新旧関係は不明である。その他の遺構との関係では、古：TP-96→新：VFCB-08、古：TP-97→新：VF-17の新旧が判明している。

出土遺物（図Ⅲ-15-1 図版21-11）TP-99からRF1点、礫1点、TP-100から礫1点、TP-101からUF1点、石皿1点が出土した。RF、UFは黒曜石製、石皿および礫は砂岩製である。

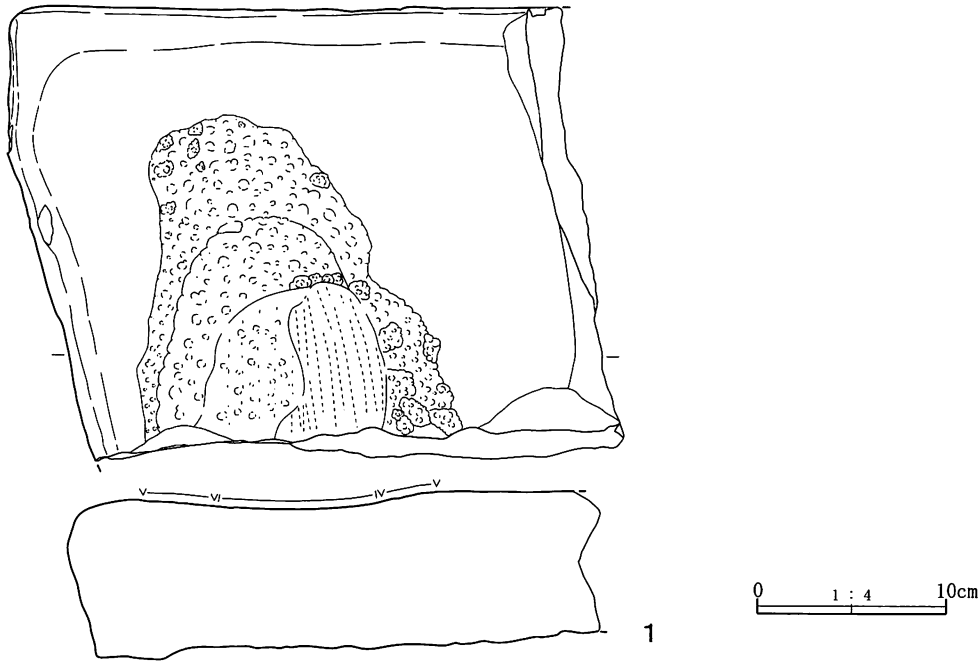
1はTP-101の覆土1層から出土した石皿である。厚さ7.5cmの板状礫の片面を使用している。使用面には敲打整形痕と、その内側にすり面がみられる。敲打痕は3段階の強弱が認められ、①面的な粗い敲打、②楕円状に浅く窪む敲打、③中央の細かい敲打の順で観察される。すり面は2面みられ、③の範囲内に形成されている。長軸方向の擦痕が観察される。（山田）

表Ⅲ-14 Tピット属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	平面形	グリッド	調査面層位	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ(cm)	長軸方向	杭跡	調査面長短比	坑底面長短比	備考
			調査面/坑底面			長軸	短軸	長軸	短軸						
Ⅲ-12	11-1	TP-96	楕円形/楕円形	N-31	Vc	106	102	60	20	162	N-5° E	-	-	-	
Ⅲ-12	11-3	TP-97	長楕円形/長楕円形	M-35	Vc	310	105	104	30	166	N-32° E	-	2.95	3.46	
Ⅲ-12	11-5	TP-98	楕円形/長楕円形	M-37	Vc	178	140	110	36	156	N-46° E	2	1.27	3.05	
Ⅲ-13	12-1	TP-99	長楕円形/長楕円形	M-42	Vc	253	70	256	24	102	N-22° E	-	3.61	10.6	
Ⅲ-13	12-3	TP-100	円形/楕円形	N-43	Vc	128	124	78	46	101	N-37° E	2	1.03	1.69	
Ⅲ-13	12-5	TP-101	長楕円形/長楕円形	M・N-41	Vc	264	72	246	12	101	N-20° E	-	3.66	20.5	
Ⅲ-14	13-1	TP-102	円形/楕円形	M-44	Vc	126	110	46	36	117	N-55° W	1	1.14	1.27	
Ⅲ-14	13-3	TP-103	長楕円形/長楕円形	M-42・43	Vc	248	92	220	20	120	N-80° E	-	2.69	11.0	

表Ⅲ-15 Tピット逆茂木跡属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	遺構名	平面形	グリッド	規模(cm)			傾き(度)	タイプ	備考
				調査面/坑底面		上端	下端	深さ			
Ⅲ-12	-	TP-98	KP01	円形/円形	M-37	5.0	2.0	7.0	2°	-	
			KP02	円形/円形		6.0	1.5	7.0	21°	-	
Ⅲ-13	-	TP-100	KP01	円形/円形	N-43	10.0	2.0	20.0	3°	-	
			KP02	円形/円形		8.0	2.0	13.0	17°	-	
Ⅲ-14	-	TP-102	KP01	円形/円形	M-44	4.0	2.0	10.0	0°	-	



図Ⅲ-15 TP-101 出土礫石器

表Ⅲ-16 TP-101出土礫石器属性表

図版 番号	挿図 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	被 熱	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ				
Ⅲ-15	21-11	-	37339	石 皿	I	1	M-42	226.0	290.0	75.0	10,000	-	Sa.	

## 第6節 遺物集中

### 土器集中出土遺物及びフレイク・チップ集中

VPB-02 (図Ⅲ-16・17-1・2 図版 10-4・5・22-1・2)

位置：M-37 規模：135×40cm 平面形：不整形 検出層位：VbU～VbL

VPB-02 は調査区域の西側で出土した。周辺にはIVA1aの土器が散在している程度で、遺物の密度は希薄である。出土状態は、15×15cm程度の口縁部から胴部の個体が器表面を表に向けて出土し、口縁部の貼付帯等の特徴からIVA1aの個体と判断できた。周辺の土器も同一層から出土しているために同じ集中区内で取上げを行っている。

出土遺物：(図Ⅲ-17-1・2) 1は口唇角状で、口縁部に幅広の貼付帯とその直下に無文帯を形成し、円形刺突文が施される。胴部には貼付帯は認められず、LR斜行縄文の施文であるが、胴部下半に一部菱形構成の羽状縄文が認められる。2は別個体の胴部下半で、貼付帯が1段認められる。胎土は1が砂礫を多量に含むのに対し、2は砂粒を少量で焼成も異なる。(奈良)

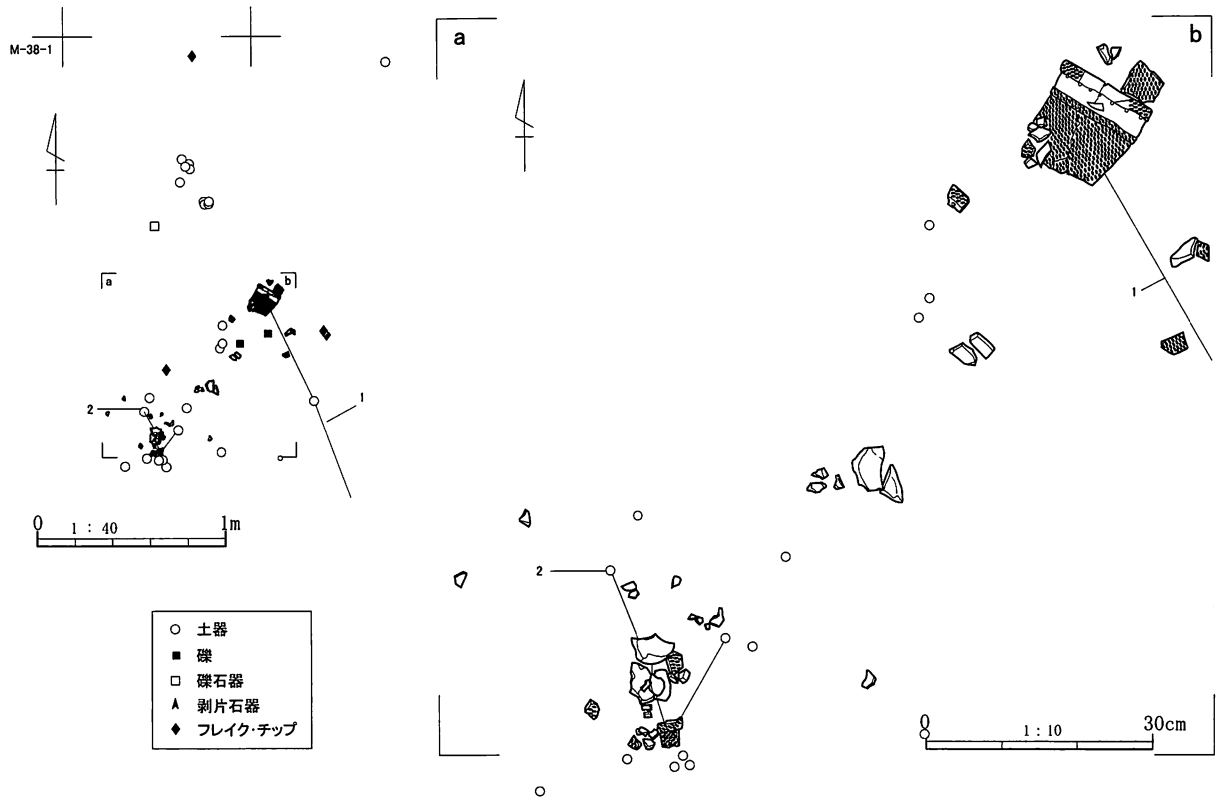
VPB-03・VFCB-08 (図Ⅲ-16・17-3～5 図版 10-6・7 21-3～7 22-1～5)

〔VPB-03〕 位置：M・N-31 規模：55×45cm 平面形：不整形 検出層位：VbU

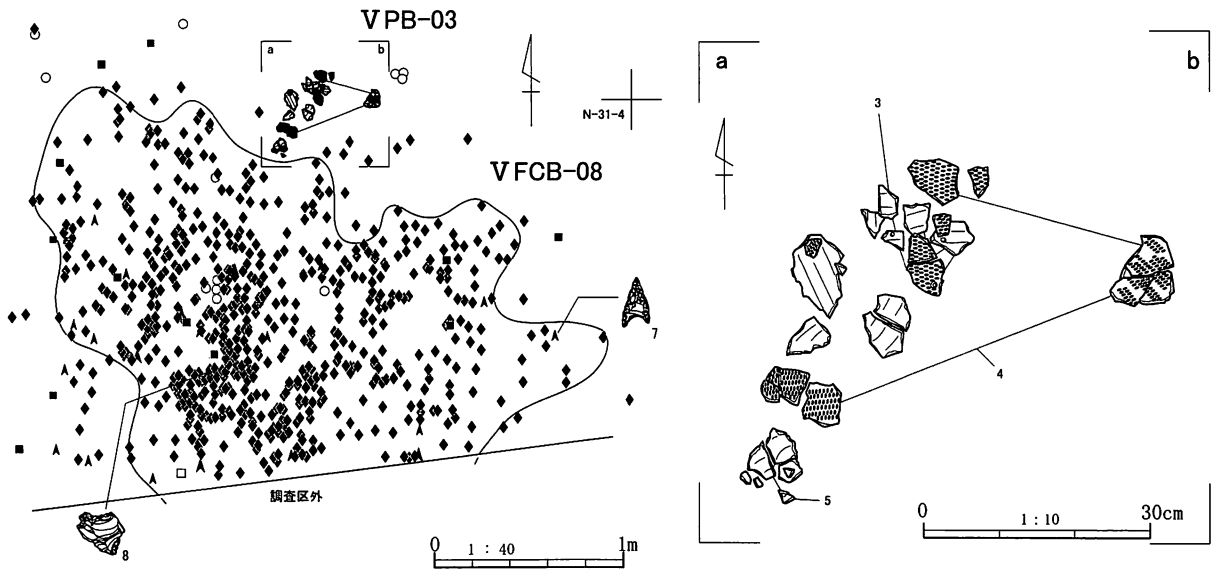
〔VFCB-08〕 位置：L・M-31 規模：252×190cm 平面形：不整形 検出層位：VbU

VaU層調査中、調査区南東側で調査区外に延びるようにフレイク・チップ集中を検出した。範囲

VPB-02



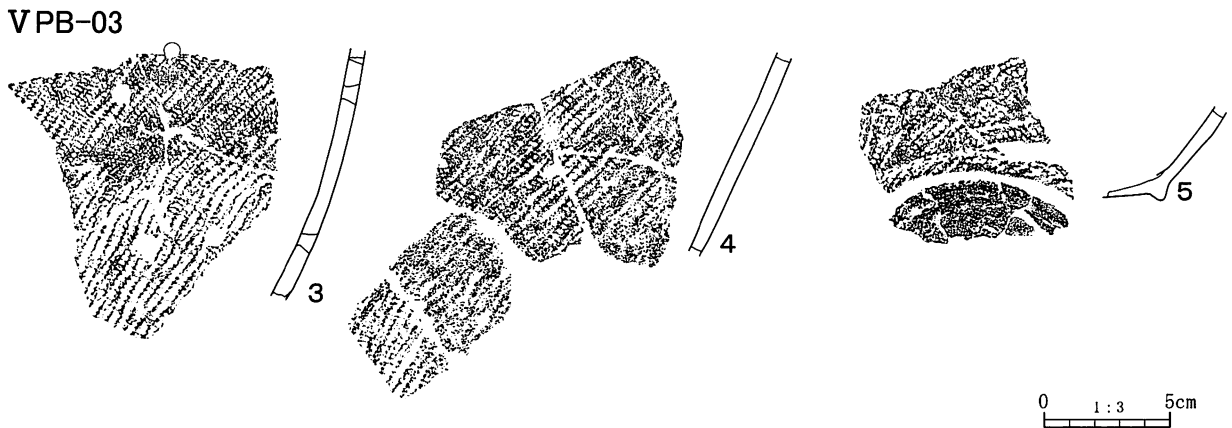
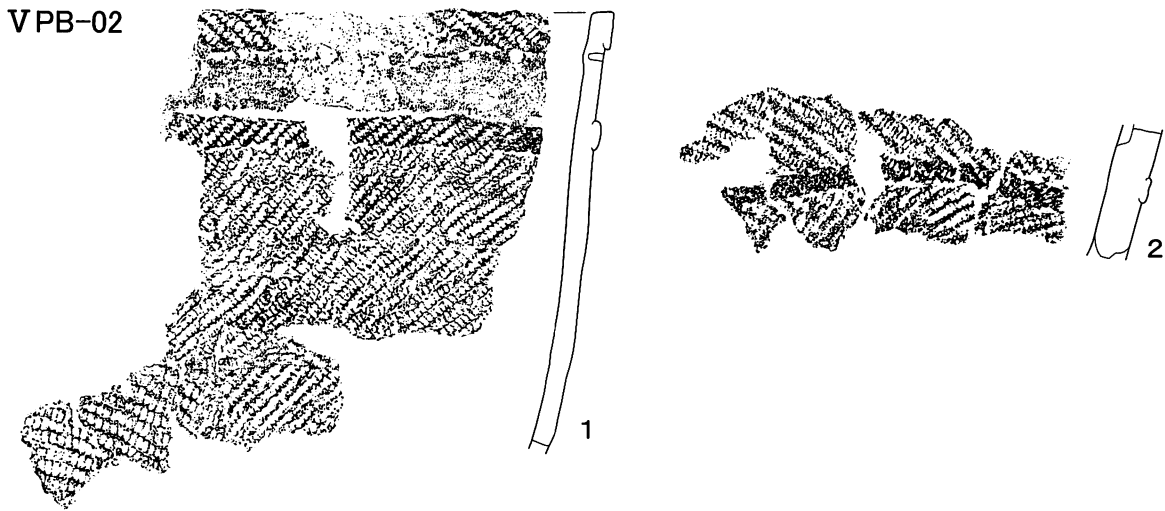
VPB-03・VFCB-08



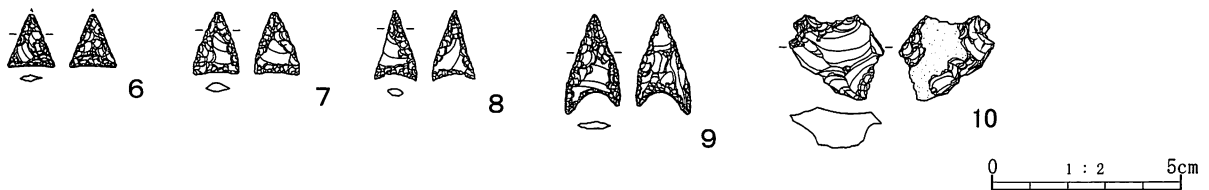
図Ⅲ-16 VPB-02・03・VFCB-08 平面図

表Ⅲ-17 VFCB-08属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅲ-16	10-7	VFCB-08	N-31・32	VbU	不整形	252	190	-	無	



図Ⅲ-17 VPB-02・03 出土土器



図Ⅲ-18 VFCB-08 出土石器

表Ⅲ-18 VPB-02・03出土土器属性表

挿図番号	図版番号	個体名称	遺構名	分類	部位	遺物番号/ 調査区/層位	器形等		文様		胎土	備考
							口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点-底面	口唇-口縁-内面/胴部 -内面/底側面-底面-内面				
Ⅲ-17-1	22-1	JP007A	VPB-02	IVA1a	口縁部~ 胴部	37028・36439 他8点/ VPB-02・M・N-37/ VbU・bL	平縁・直立-角状/直立	貼付帯1A・RL斜行縄文・無文帯 +OI円形刺突文/貼付帯2+LR斜 行縄文・羽状縄文	砂礫多量			
Ⅲ-17-2	22-2	JP008A		IVA1a	胴部下半	36998・37001 他3点 /M-37/VbL	やや外傾	異原体羽状縄文・貼付帯2・RL斜 行縄文	砂粒少量			
Ⅲ-17-3	22-3	JP004A	VPB-03	VA1	胴部下半	36037~36039 他4点/ VPB-03・M-31/V	やや外傾	RL斜行縄文	砂粒少量	補修孔4		
Ⅲ-17-4	22-4	JP004B		VA1	胴部	36028・3603 他4点/ VPB-03・M-31	外傾	RL斜行縄文	砂粒少量			
Ⅲ-17-5	22-5	JP004E		VA1	底部	36049 他2点 / V PB-03/N-31	外傾-隅丸角状-上げ底	RL斜行縄文	砂粒少量			

表Ⅲ-19 VFCB-08出土石器属性表

挿図番号	図版番号	個体名称	遺物番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-18-6	21-3	-	37413	石鏃	A2	V	VFCB-08	N-31	19.9	12.3	1.8	0.27	Obs.	
Ⅲ-18-7	21-4	-	37415	石鏃	A2	V	VFCB-08	-	16.3	11.8	1.5	0.35	Obs.	
Ⅲ-18-8	21-5	-	37414	石鏃	A2	V	VFCB-08	-	18	11.1	1.8	0.25	Obs.	
Ⅲ-18-9	21-6	-	35986	石鏃	A2	VbU	VFCB-08	N-31	26.2	13.9	2.1	0.57	Obs.	
Ⅲ-18-10	21-7	-	35988	石核	-	VbU	VFCB-08	N-31	25.0	23.8	12.7	5.24	Obs.	

確認のため精査を行ったところ、V群 A1 類の土器がまとまって出土した。両集中区は同一層で隣接していることから同時期と判断し調査を行った。フレイク・チップ集中からは石鏃6点、石槍4点、スクレイパー1点、RF2点、UF4点、石核1点（以上、黒曜石）、剥片5,346点（黒曜石5,343点、頁岩3点）、加工痕ある礫1点（砂岩）、礫4点（緑色泥岩1点、砂岩3点）の計5,369点（重量995.5g）が出土している。（奈良）

出土遺物：〔VPB-03〕（図Ⅲ-17-3～5）3・4は胴部片で地文のみである。3は補修口が4ヶ所認められる。5は上げ底の底部である。胎土には砂粒を少量含み、焼成は良好である。（奈良）

出土遺物：〔VFCB-08〕（図Ⅲ-18-6～10 図版21-1-3～7）剥片石器はすべて黒曜石製、剥片は頁岩3点を除き黒曜石製、加工痕ある礫および礫3点は砂岩製、礫1点は緑色泥岩である。

6～9は石鏃、いずれも素材面が残る無茎三角鏃である。6は正三角形に近く、7・8は基端がわずかに内湾、9は基端の抉入が深い。10は石核、円礫面が残置する不定形剥片を素材とする。礫面を打面とし、腹面側への多方向の剥離で小型の不定形剥片が剥離されている。目的剥片が小型であることから、RFの可能性もある。（山田）

### 第7節 溝状遺構

MI-01（図Ⅲ-19 図版14-1～3）

位置：L・M-38・39 規模：(244) × 74 cm 長軸方向：N-65° E

確認・調査：調査区中央のVI層上面で北東方向に延びる幅70cmほどの黒色土の不整な溝状プランを検出した。溝状プランの西側は現代の掘削により欠失していたため、掘削されていた断面で堆積状態を確認した所、黒色土がレンズ状に落ち込む堆積を確認したことから、性格不明の溝状遺構として調査した。短軸方向で2ヶ所のトレンチを設け、土層断面、完掘状態を記録し、調査を終了した。平面形は不整な溝状で、遺構底面は中央部がわずかに窪み、底面から上端への立ち上がりは緩やかである。

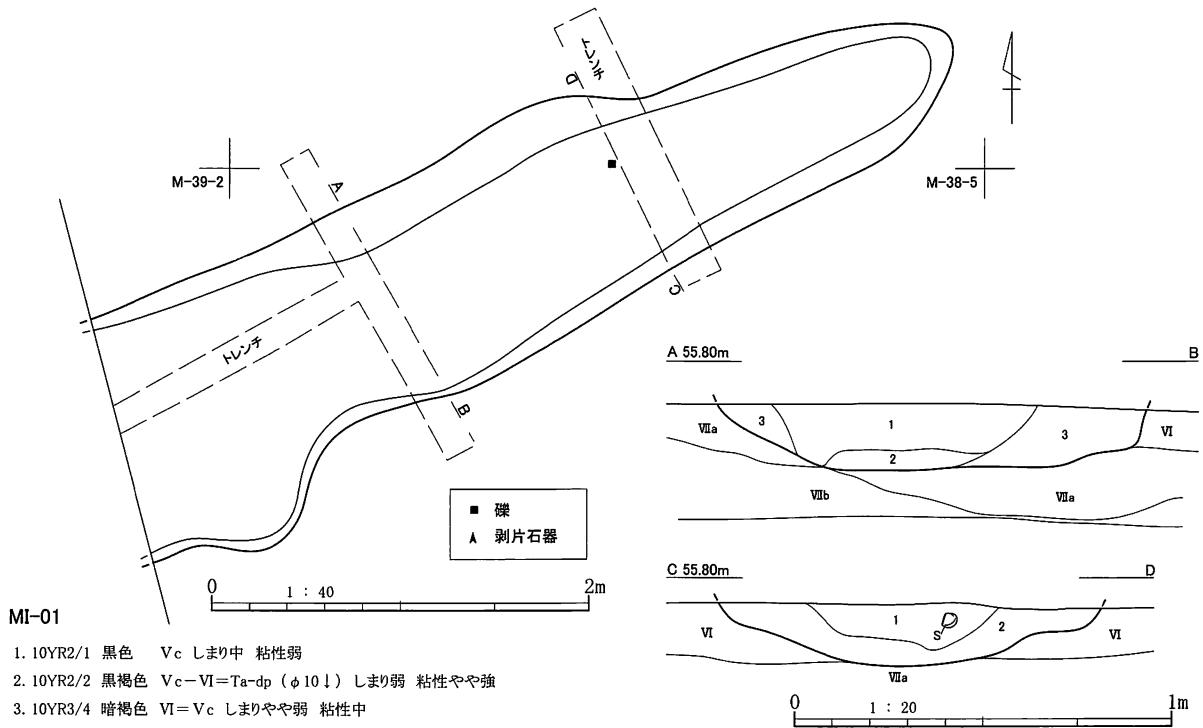
堆積状態：2層に極少量の Ta-d パミスが混ざるが、粘性、堅密度ともにV層と同じである。層境も不明瞭であることから、VI層にV層起源の黒色土が落込んだ自然堆積と判断した。

出土遺物：未掲載だが、RF1点、礫1点、計2点（重量28.03g）が出土した。RFはメノウ製、礫は砂岩である。（山田）

表Ⅲ-20 MI-01属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)			方位	備考
						長軸	短軸	深さ		
Ⅲ-19	14-1	MI-01	L・M-38・39	VI	長楕円	244	74	18	N-65° E	

MI-01



図III-19 MI-01 平面及び断面図

第8節 包含層出土遺物 (図III-20~24 図版 23~25)

1. 土器 (図III-20・21 図版 23-1~15)

土器は遺構出土のものも含めて 686 点出土している。時期は縄文時代前期前葉から晩期初頭まで各時期の資料を得ている。出土点数はIV群 A1a 類が 55%と最も多く出土し、全体の半数以上を占めている。他の型式についてはII群 A2a 類 18%、II群 A2b 類 1%、III群 B2 類 12%、III群 B3a 類 8%、V群 A1 類 6%の割合で出土している。

土器を分類するにあたっては、平成 14・15 年度に調査が行われた厚幌 1 遺跡を参考にして分類を行った。

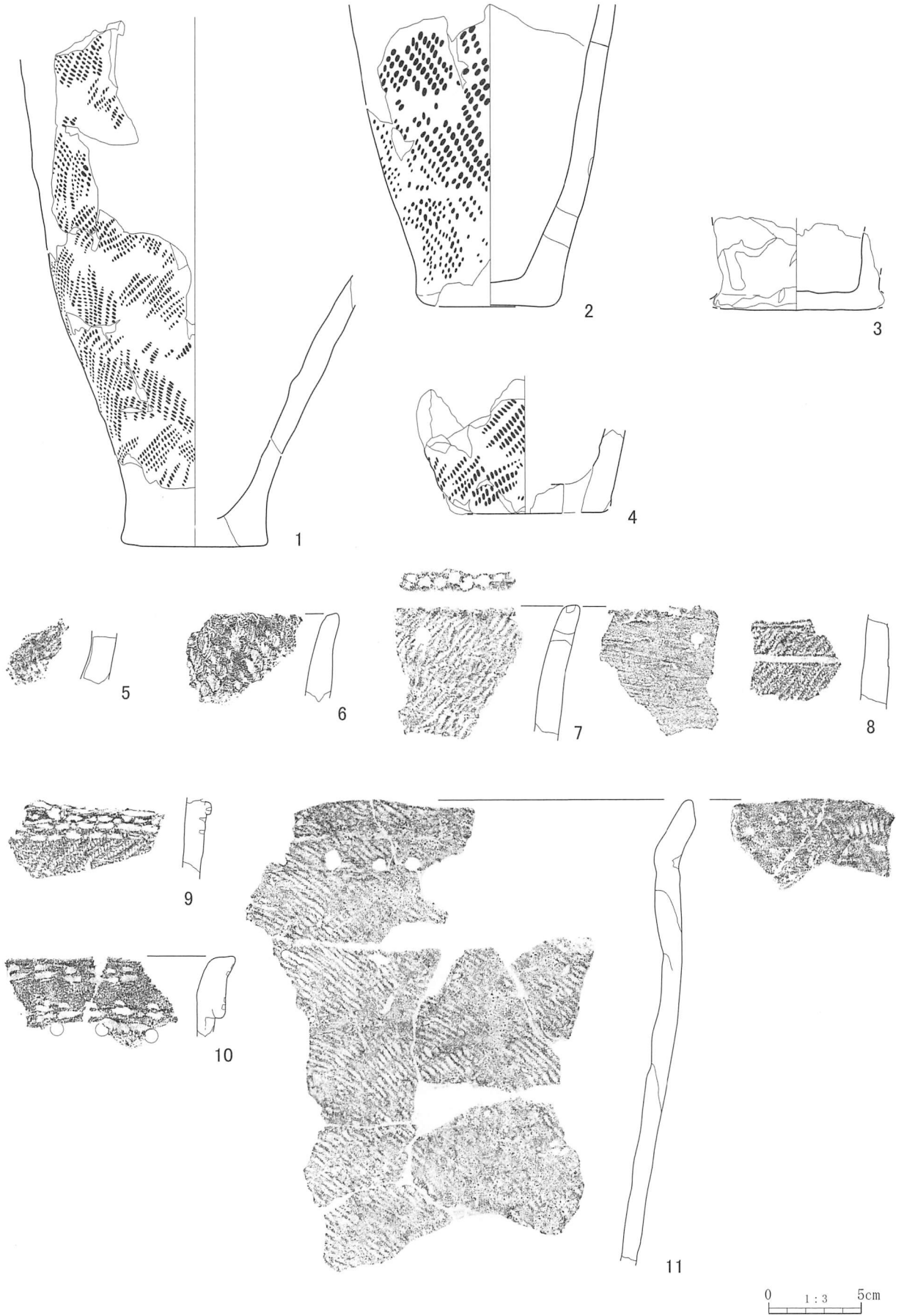
以下に分類毎の概略を記載し、掲載土器の個々の詳細については表III-21 を参考とされたい。

**II群 A2a 類土器**：(5) 5は胴部片で、胎土に滑石を多量に含み、器表面はヌメヌメとした手触り。これらの土器は他に 127 点出土しているが、接合面の摩滅が著しく土坑墓で出土した土器以外の接合には至っていない。

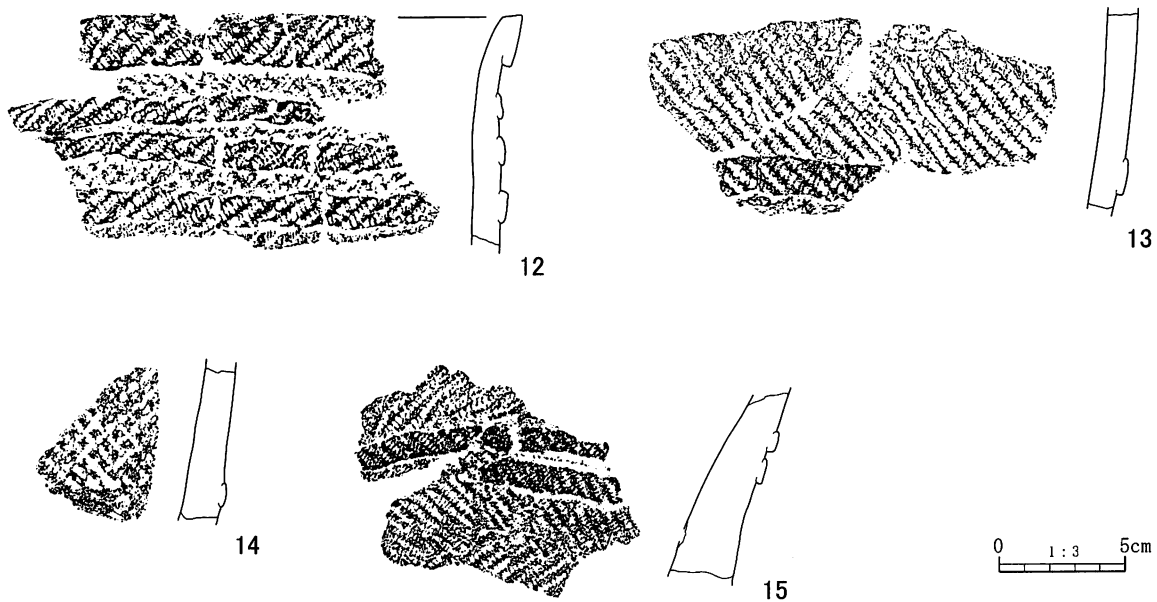
**II群 A2b 類土器**：(6) 6は隅丸角状の口縁部である。口唇部は弱いナデによって成形され、一部内削ぎ気味に作出される。地文はLR斜行縄文のみで、胎土には繊維のほか砂粒を少量含む。

**III群 B2 類土器**：(1・7~9) 1・7は同一個体片である。1は胴部から底部にかけての復元個体で地文のみ施される。7は口縁部で口唇部に棒状工具による刺突列が施され、補修孔が1ヶ所認められる。いずれも胎土に少量の繊維を含み、内面に弱いミガキが認められる。8・9は胴部片で、8は地文縄文施文後に浅い横走沈線が2段認められる。9は貼付帯を施した後、棒状工具による突引文が3ないし4段認められる。9は胎土に繊維を極少量含んでいる。





図Ⅲ-20 縄文時代包含層出土土器 (1)



図Ⅲ-21 縄文時代包含層出土土器 (2)

**Ⅲ群 B3a 類土器**：(2・3・10・11) 2は胴部から底部にかけての復元個体で、地文縄文のほか、胴部下半に一部浅い横走沈線が長さ5cm程度で1ないし2条認められる。底側縁の一部は器形再調整のためか底方向から粘土が重ねられている。胎土は石英粒を多量に含み、器表面の風化が著しく摩滅している。10は口縁部で幅広の貼付帯と2個1対の刺突文が2段、貼付帯下位には円形刺突文が施される。胎土は石英粒を多量に含むが、2より多く含まない。3・11は同一個体の資料で、3は平底の底部でやや張り出す。器表面の剥落が著しく文様は認められない。11は口縁部から胴部にかけての資料で、口縁部に肥厚帯が形成され直下に円形刺突文が施される。地文はRL斜行縄文のみで口縁部内側にも同様の原体で施文される。胎土は砂粒を中量含む。

**Ⅳ群 A1a 類土器**：(4・12~15) 4は平底の底部でやや外傾する。12は口縁部貼付帯下位に3段の貼付帯が認められる。地文は重複縄文で構成され、貼付帯貼り付け後LR斜行縄文を施している。14も別個体であるが地文は重複縄文である。13~15は胴部で13・14は貼付帯が1段、15は2段認められ、13・15は羽状縄文である。胎土はいずれも砂粒を中量含み、焼成などから12・13は同一個体と考えられる。  
(奈良)

## 2. 剥片石器 (図Ⅲ-23-1~19 図版24-1~19)

V・VI層包含層からは石鏃、石槍、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、RF、UF、計61点(重量350.94g)が出土した。石器類全体では器種に対する剥片数の割合が低く、素材もしくは半成品・成品の状態で搬入された状況が考えられる。石鏃、スクレイパーがやや多く出土している。

石材は黒曜石製55点、頁岩製2点、青色片岩製3点、砂岩製13点である。点数・重量ともに黒曜石が多数を占める。

分布は散漫で、調査区東側の緩斜面や遺構周辺に多く出土する傾向にある。この傾向は調査区西側でも同様である。層位別の剥片重量分布ではVbU~Vc層にかけて分布の主体がみられる。なお、Vb層で縄文後期~晩期、Vc層で縄文前期の土器が多く出土している。

表Ⅲ-21 縄文時代包含層出土土器属性表

属性表記載において、下記の認識のもと行っているが、「部位」・「器形」・「胎土」の記載については、相対比較によるもので観察者の主観による。  
 (個体名称) 同一個体にアラビア数字、破片資料にアルファベットを付番した。

〔分類〕 「第1部 第4章 第1節 土器」に記載している。

〔器形等・文様〕 各部位毎の形態を示した。「口縁」は口縁部器表面、「底部側面」は底部器表面、「変換点」は底側面と底面との状態を記載した。

〔器形等〕 「外反」は反る状態。「外傾」は直線的に開く状態を示している。

〔文様〕 以下の認識で記載した。

記載順序: 部位の口縁→胴部→胴部へへの記載順、部位の底→胴部: 底部→胴部への記載順となっている。

記号: + ; 文様要素の重複施文 ; 文様要素の複合ないしは充填構成

文様要素

2段異原体羽状縄文: 縞りの異なる2段の原体(LR・RL)による羽状縄文

突引文: 器面に対し施工工具が斜め方向に突き刺され、水平方向に連続して動く。文様の観察としては、圧痕が深く施文が連続している。

押引文: 器面に対し施工工具が垂直方向に押し当てられ、水平方向に連続して動く。文様の観察としては、圧痕が浅く施文が連続している。

半截竹管工具による施文: ( ) 内に器面に当てた工具面を記載している。(内)は半截竹管の内側、(外)は竹管の外側を用いて施文されたもの。

細線文: 器表面に対し、2段以上の幅広の貼付帯

細刻文: 器表面の圧痕

貼付帯1A: 口唇直下の幅広の貼付帯

貼付帯1B: 口唇直下の細い貼付帯

貼付帯2: 貼付帯1以外の胴部に横環する貼付帯。

重複縄文: 縞りの異なる原体を新旧重複して施文する。文様の観察としては、条が交差状に見られる。

〔胎土〕 組織・破断面や剥離面に観察できる「板状の平行な割れ目」組織。(花岡 1992)

挿入番号	図版番号	個体名称	分類	部位	遺物番号/調査区/層位	器形等		文様		胎土	備考
						口縁-口唇/胴部/底側面-変換点-底面	口縁-口唇-内面/胴部-内面/底側面-底面-内面				
III-20-1	23-1	JP006A	III B2	胴部上半~底部	36260・36262 他9点/M・N-31・32/VbL・c・VI	やや外傾/張出し-角状-平底	LR斜行縄文・ミガキ(弱)/LR斜行縄文	繊維中量 砂粒少量	器表面ナデにより 地文不明瞭		
III-20-2	23-2	JP005A	III B3a	胴部上半~底部	35383~35387 他19点/N-35/Va・bu・bL	やや外傾/やや外傾-丸状-平底	RL斜行縄文/RL斜行縄文	石英粒多量	富良野盆地系土器		
III-20-3	23-3	JP009B	III B3a	底部	37278-37379/N-46/VbU	直立-張出し-尖状-平底	ナデ	砂粒多量 石英粒極少量	器表面剥落		
III-20-4	23-4	JP026	IV A1a	底部	36574-36952 他2点/L-32・34・35/VbL	やや外傾-角状-上付底	LR斜行縄文	砂粒少量			
III-20-5	23-5	JP027	II A2a	胴部	36802/L-32/Vc	やや外傾	LR斜行縄文	繊維多量 滑石多量			
III-20-6	23-6	JP025A	II A2b	口縁部	36510/M-32/VbL	平縁-直立-隅丸角状-内削	LR斜行縄文	繊維中量 砂粒少量			
III-20-7	23-7	JP006B	III B2	口縁部	36922/N-34/VbL	平縁-やや外傾-隅丸角状	棒状工具刺突列-LR斜行縄文・ミガキ(弱)	繊維少量 砂粒少量	補修孔1		
III-20-8	23-8	JP020	III B2	胴部	35401/N-35/Va	直立	LR斜行縄文・半截竹管(外)注線	砂粒極少量			
III-20-9	23-9	JP021A	III B2	胴部	36364-36719/N・M-35/VbL	直立	LR斜行縄文・貼付帯・棒状工具突引文(外)	繊維極少量 砂粒少量			
III-20-10	23-10	JP022A	III B3a	口縁部	36301-36304/N-34/VbU	平縁-外反-隅丸角状-外削	ナデ-貼付帯1A・2個(対押引文(外)) /RL斜行縄文+O円形刺突文	石英粒多量	富良野盆地系土器		
III-20-11	23-11	JP009A	III B3a	口縁~胴部下半	37383-37384 他5点/N・O-46/VbU	平縁-直立-隅丸角状	肥厚帯+RL斜行縄文+O円形刺突文-RL斜行縄文 /RL斜行縄文	砂粒中量	地すべり下出土		
III-21-12	23-12	JP010A	IV A1a	口縁~胴部	36328-36357他5点/N・M-35・N-36/VbU	平縁-直立-角状	貼付帯1B+RL斜行縄文・重複縄文+貼付帯2+LR斜行縄文	砂礫中量			
III-21-13	23-13	JP010E	IV A1a	胴部	36319-36320他2点/N-35/VbU	直立	異原体羽状縄文+貼付帯2+LR斜行縄文	砂礫中量			
III-21-14	23-14	JP019	IV A1a	胴部	36259/N-31/VbL	直立	重複縄文+貼付帯2+LR斜行縄文	砂礫中量			
III-21-15	23-15	JP015A	IV A1a	胴部上半~下半	35370-36302/N-34/Va・bU	やや外傾	2段異原体羽状縄文+貼付帯2+RL斜行縄文	砂礫中量			



## 石鏃（1～5）

17点が出土した。A2型11点、A3型3点、A4型2点、不明1点。すべて黒曜石製である。

1・2（A2型）は無茎三角鏃で、1は背腹両面に素材面が残る薄手のもの、2は断面凸レンズ状を呈する。3～5（A3型）は、いずれも有茎三角鏃で、3は断面凸レンズ状、4は断面レンズ状で腹面側に素材面が残る。5は薄手で身部が幅広になる。

## 石槍（6～10）

6点が出土した。B1型2点、B2型2点、B3型2点。すべて黒曜石製である。

6（B1型）は有茎で、縁辺がわずかに外湾する幅広の身部に返しのない基部が作出されている。7・8（B2型）は木葉形・菱形で、7は器体中央の左右が突起した歪な形態を呈し、基端は平坦である。裏面身部右側の斜平行剥離により尖頭部が再加工されている。8は縁辺がやや内湾する菱形で、腹面側に素材面が残置する。基端は丸い。9・10（B3型）は無茎で、9は左右非対称の歪な形態で、断面は厚みのある凸レンズ状を呈する。10は左右対称、厚手で断面レンズ状を呈する。表面全体を調整した後に裏面の調整が施されている。9・10とも裏面に素材腹面が残置し、基端は平坦である。

## 石錐（11）

1点が出土した。D型。頁岩製である。11は厚手の剥片を素材とする。両側縁に二次加工を施して、素材打点側に錐部が作出されている。錐部は背面側への粗い急角度剥離の後、腹面側への連続する微細な平坦剥離により整形されている。基端は腹面側への剥離により整形されている。錐部先端には回転穿孔による磨滅光沢が認められる。

## つまみ付きナイフ（12・13）

5点が出土した。A1型4点、A2型1点。黒曜石製4点、頁岩製1点である。

12・13（A1型）は側縁調整が施されたものである。12は頁岩製、13は黒曜石製。12は薄手の縦長剥片を素材とする。背面両側縁に二次加工が施された後、素材打点側の抉入剥離により、T字形に近いつまみ部を作出している。刃部は右側縁に位置し、わずかに内湾する。13は幅広の剥片を素材とする。背腹両側縁に二次加工が施された後、素材打点側に円形につまみ部を作出している。刃部は右側縁に位置し、わずかに外湾する。

## スクレイパー（14～18）

12点が出土した。B1型3点、B2型1点、C1型5点、C3型3点。黒曜石製9点、青色片岩製3点（1個体）である。

14～17は黒曜石製、18は青色片岩製である。14（B2型）は末端部、15～18（C1型）は側縁に刃部が作出されている。いずれも素材形状を維持している。14は薄手の素材剥片の末端部に背面側への二次加工で弧状の刃部が作出されている。15は円礫面が残置する厚手の剥片を素材とする一側縁加工のものである。器体中程に達する背面右側縁への二次加工により、内湾する刃部が作出されている。16は縦長剥片を素材とする二側縁加工のもので、両側縁に背面側への二次加工で背稜にほぼ平行する直線的な刃部が作出されている。17は不定形剥片を素材とし、背腹両側縁に二次加工が施されたものである。18は欠損面のある大型の剥片を素材とする。一側縁加工の青色片岩製スクレイパーである。破損面で3点が接合し1個体となった。刃部は背面左側縁下半に位置する。

## 石核（19）

3点が出土した。すべて黒曜石製である。19は小型の角柱状礫を素材とした両設打面石核である。

石核正裏上下面に岩屑面が残置する。石核正面、右側面に剥離初期段階の石核調整痕が残る。打面調整が施されている上面、岩屑面が残置する下面を打面とし、正面、左右側面を剥離作業面にして剥片が剥離されている。残核形態はサイコロ状を呈する。(山田)

### 3. 礫石器・石製品 (図Ⅲ-24-1~10 図版 25-1~10)

V・VI層包含層からは石斧・石斧片、たたき石、すり石、砥石、台石、加工痕ある礫、計27点(重量6042.53g)が出土した。この他、石製品1点(7.93g)が出土した。破片資料が少なく、欠損は認められるが完形に近いものの割合が高いことが剥片石器と共通する。

石材は緑色泥岩15点、青色片岩2点、砂岩10点である。

礫は271点(重量76,688g)が出土した。礫の石材は砂岩254点、泥岩6点、蛇紋岩3点、メノウ1点、礫岩4点、片麻岩1点、珪藻土2点である。細・粗粒含む砂岩が点数・重量ともに多い。被熱痕跡のある礫は44点で砂岩・泥岩・片麻岩に認められる。

#### 石斧・石斧片 (1~4)

石斧12点、石斧片5点が出土した。石斧の分類はI類9点、II類2点、III類1点。石斧石材は緑色泥岩11点、青色片岩1点。石斧片は緑色泥岩4点、青色片岩1点である。

1~3(I類)は磨製石斧、4(III類)は磨製もしくは打製石斧の欠損品か未成品である。1・3・4は緑色泥岩製、2は青色片岩製である。1は扁平礫を素材とした平面撥型の片刃直刃石斧で、表裏面に素材面が残る。器体表裏面と側面の部分的な敲打調整の後、表裏面は器体長軸方向に対して斜位の研磨、刃部は長軸方向で研磨している。刃部平面形はわずかに弧状となる。2は裏面に素材面が残る平面短冊形の両刃円刃石斧で、薄手である。表面全体と裏面刃部周辺を研磨した後、左側縁側からの剥離調整が施されている。刃部は器体長軸に対して斜位の研磨である。3は平面撥型の片刃円刃石斧で、器体の表・側面が研磨されている。裏面は器体上半に素材面と敲打調整痕が残る。刃部は器体長軸方向で研磨している。4は細長い扁平礫を素材とする。裏面は自然破砕面である。器体両側縁から剥離調整が施されているが、研磨痕はみられない。刃部側が欠損している。

#### たたき石 (5)

1点が出土した。IIIB類。砂岩製である。球状礫を素材とする。敲打痕は正面、右側面に集積し、わずかに凹んでいる。

#### すり石 (6)

2点が出土し1個体となった。I類。砂岩製である。6は断面三角形の亜円礫を素材とし、下縁稜に2面のすり面が形成されている。すり面幅は約3.0cmで、器体正面にも一部弱いすり面が観察される。被熱により破損している。

#### 砥石 (7)

4点が出土し1個体となった。IB類。砂岩製である。7は扁平礫の両面に砥面が形成されている。両面とも同一方向の擦痕が観察される。表面の使用が顕著であり、湾曲が認められる。

#### 台石 (8)

1点が出土した。I類。砂岩製である。8は扁平な亜円礫の片面に敲打痕が集積している。

#### 加工痕ある礫 (9)

2点が出土した。I類1点、II類1点。すべて砂岩製である。9(II類)は板状角礫の斜縁辺に連続する粗い剥離痕がみられる。

石製品 (10)

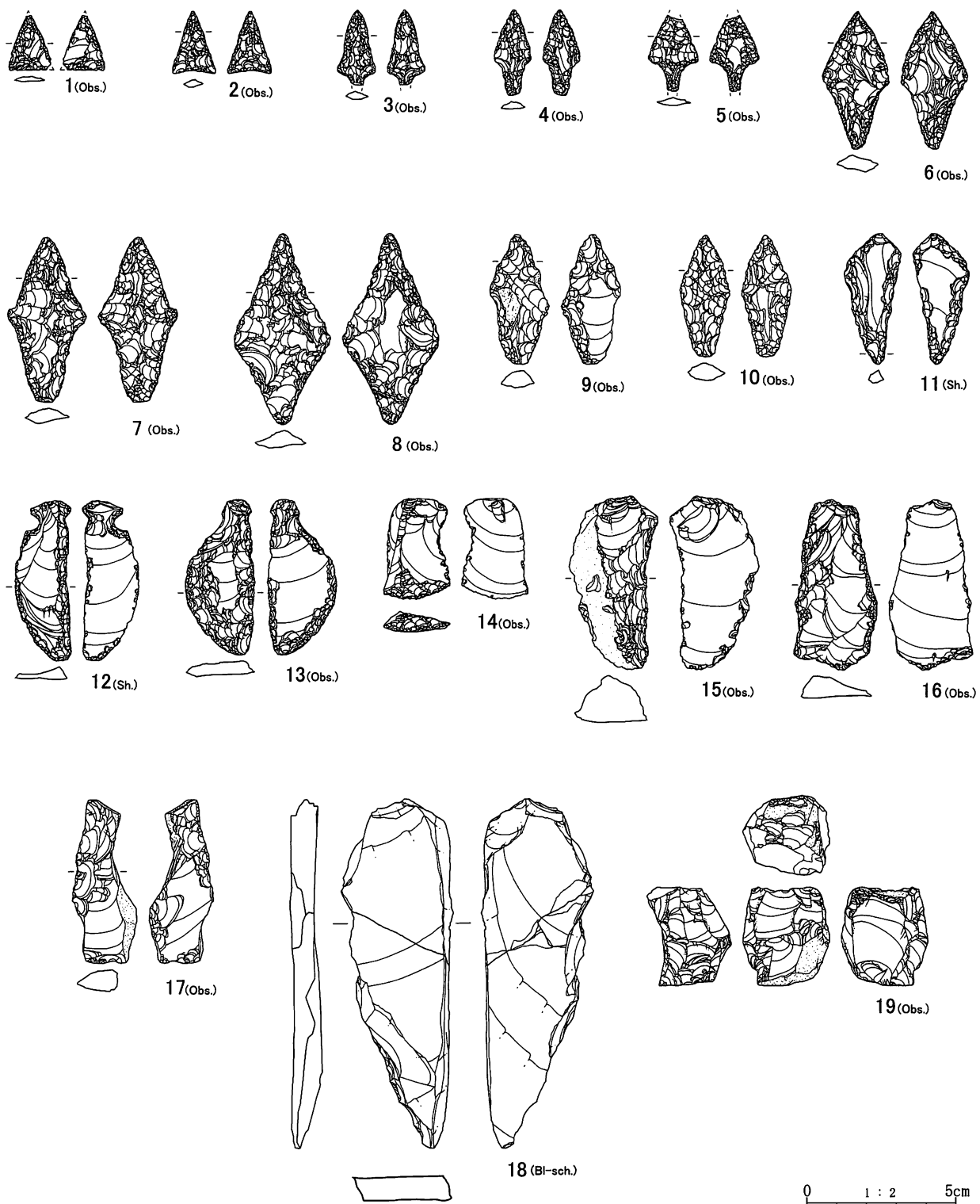
1点が出土した。滑石製である。10は裏面に自然破砕面が残る扁平礫を素材とし、片面上端に1面、正面に6面の研磨痕が確認できる。上端および正面縁辺付近の研磨後、正面を研磨している。研磨は上端が器体長軸方向、正面が主に器体長軸に対して斜位方向で施されている。(山田)

表Ⅲ-22 縄文時代包含層出土剥片石器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	グリッド	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-23-1	24-1-1	-	N-31	36267	石 鏃	A2	VbL	18.2	13.9	2.3	0.53	Obs.	
Ⅲ-23-2	24-1-2	-	N-32	35360	石 鏃	A2	Va	20.4	14.4	3.3	0.73	Obs.	
Ⅲ-23-3	24-1-3	-	M-35	36120	石 鏃	A3	VbU	24.6	12.5	4.0	0.91	Obs.	
Ⅲ-23-4	24-1-4	-	M-34	36114	石 鏃	A3	VbU	28.6	12.1	3.6	1.09	Obs.	
Ⅲ-23-5	24-1-5	-	K-31	36778	石 鏃	A3	Vc	25.5	16.4	2.7	0.89	Obs.	
Ⅲ-23-6	24-1-6	-	L-32	36790	石 槍	B1	Vc	45.7	22.1	8.6	4.89	Obs.	
Ⅲ-23-7	24-1-7	-	N-32	36240	石 槍	B2	VbL	54.4	26.1	6.0	6.37	Obs.	
Ⅲ-23-8	24-1-8	-	N-34	35369	石 槍	B2	Va	63.6	31.7	6.9	9.71	Obs.	
Ⅲ-23-9	24-1-9	-	N-30	36767	石 槍	B3	Vc	43.1	18.8	7.0	4.99	Obs.	
Ⅲ-23-10	24-1-10	-	N-37	35439	石 槍	B3	Va	40.5	16.5	5.7	3.24	Obs.	
Ⅲ-23-11	24-1-11	-	M-36	36712	石 錐	D	Vc	43.2	18.3	6.9	6.36	Sh.	
Ⅲ-23-12	24-1-12	-	N-31	36266	つまみ付きナイフ	A1	VbL	53.2	17.0	4.1	4.61	Sh.	
Ⅲ-23-13	24-1-13	-	M-43	37359	つまみ付きナイフ	A1	VbL	51.7	22.6	5.6	6.85	Obs.	
Ⅲ-23-14	24-1-14	-	L-32	36097	スクレイパー	B2	Va	33.2	22.3	5.1	4.00	Obs.	
Ⅲ-23-15	24-1-15	-	N-30	35331	スクレイパー	C1	Va	57.1	26.0	16.0	22.51	Obs.	
Ⅲ-23-16	24-1-16	-	K-33	35246	スクレイパー	C1	VaU	56.9	27.2	7.5	12.36	Obs.	
Ⅲ-23-17	24-1-17	-	M-34	36112	スクレイパー	C1	VbU	54.8	20.6	7.0	7.46	Obs.	
Ⅲ-23-18	24-1-18	VFT001	N-35	36365	スクレイパー	C1	VbU	116.3	36.1	9.6	49.12	Bl-Sch.	
Ⅲ-23-19	24-1-19	-	L-34	36866	石 核	-	Vc	32.4	28.4	22.2	26.37	Obs.	

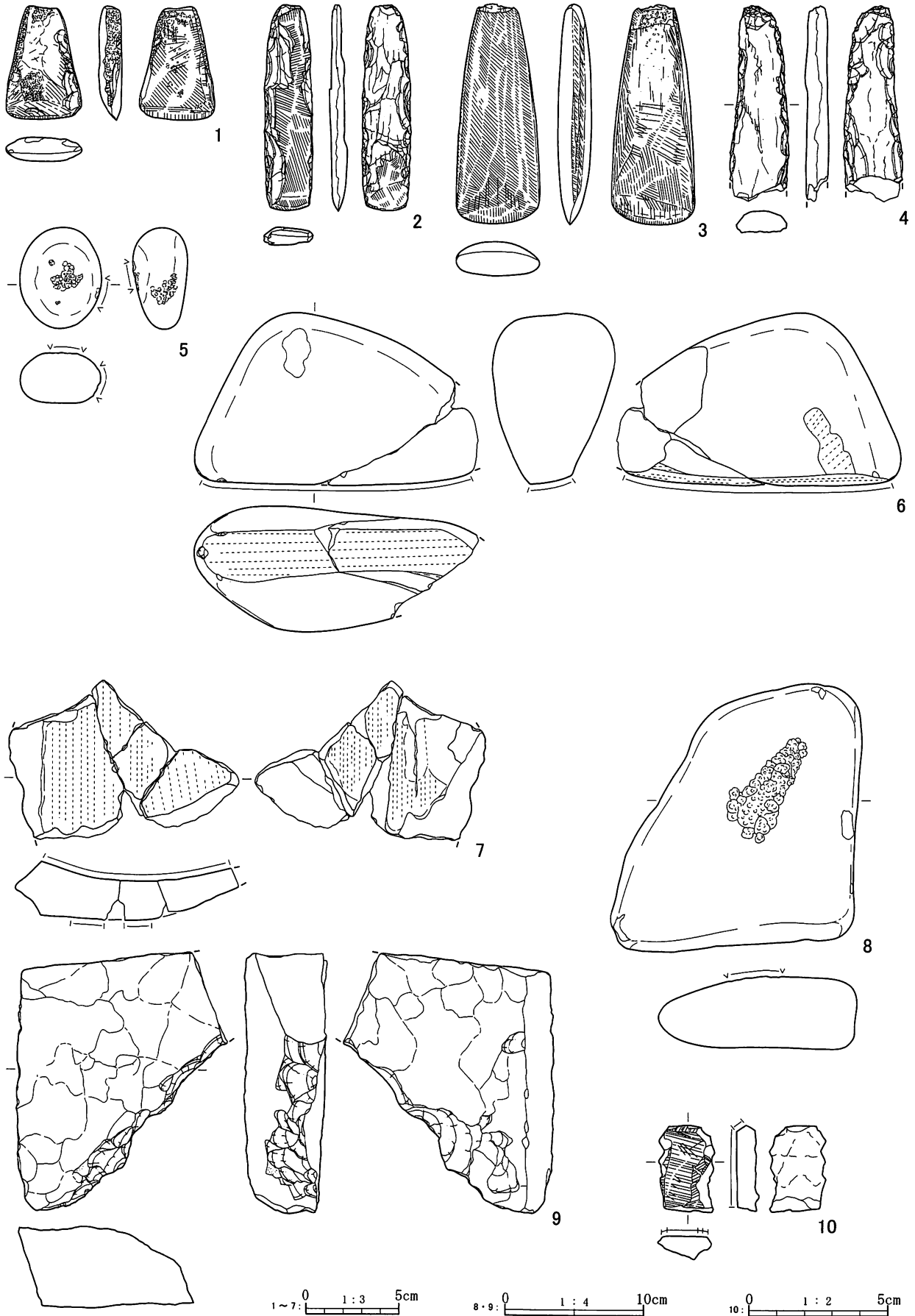
表Ⅲ-23 縄文時代包含層出土礫石器・石製品属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	グリッド	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-24-1	25-1-1	-	L-36	36668	石 斧	I	Vc	60.9	39.9	12.8	47.7	Gr-Mud.	
Ⅲ-24-2	25-1-2	-	L-34	36108	石 斧	I	VbU	110.5	26.3	9.4	36.0	Bl-Sch.	
Ⅲ-24-3	25-1-3	-	M-42	37351	石 斧	I	Vc	117.5	44.4	18.9	147.0	Gr-Mud.	
Ⅲ-24-4	25-1-4	-	L-35	36642	石 斧	Ⅲ	VbL	104.2	30.5	13.1	60.6	Gr-Mud.	
Ⅲ-24-5	25-1-5	-	N-32	36742	たたき石	ⅢB	VbL	28.9	53.6	30.2	80.5	Sa.	
Ⅲ-24-6	25-1-6	VST002	M-31	36895	すり石	I	Vc	90.9	146.8	66.1	71.9	Sa.	
Ⅲ-24-7	25-1-7	VST001	L-32	36792	砥 石	I B	Vc	80.5	116.4	27.1	225.0	Sa.	
Ⅲ-24-8	25-1-8	-	L-35	36487	台 石	I	VbU	196.0	174.0	48.9	2058.0	Sa.	
Ⅲ-24-9	25-1-9	-	L-33	36970	加工痕ある礫	Ⅱ	VI	153.0	185.0	58.7	1800.0	Sa.	
Ⅲ-24-10	25-1-10	-	N-42	37323	石製品	-	VbL	30.8	21.1	8.3	7.9	Tul.	

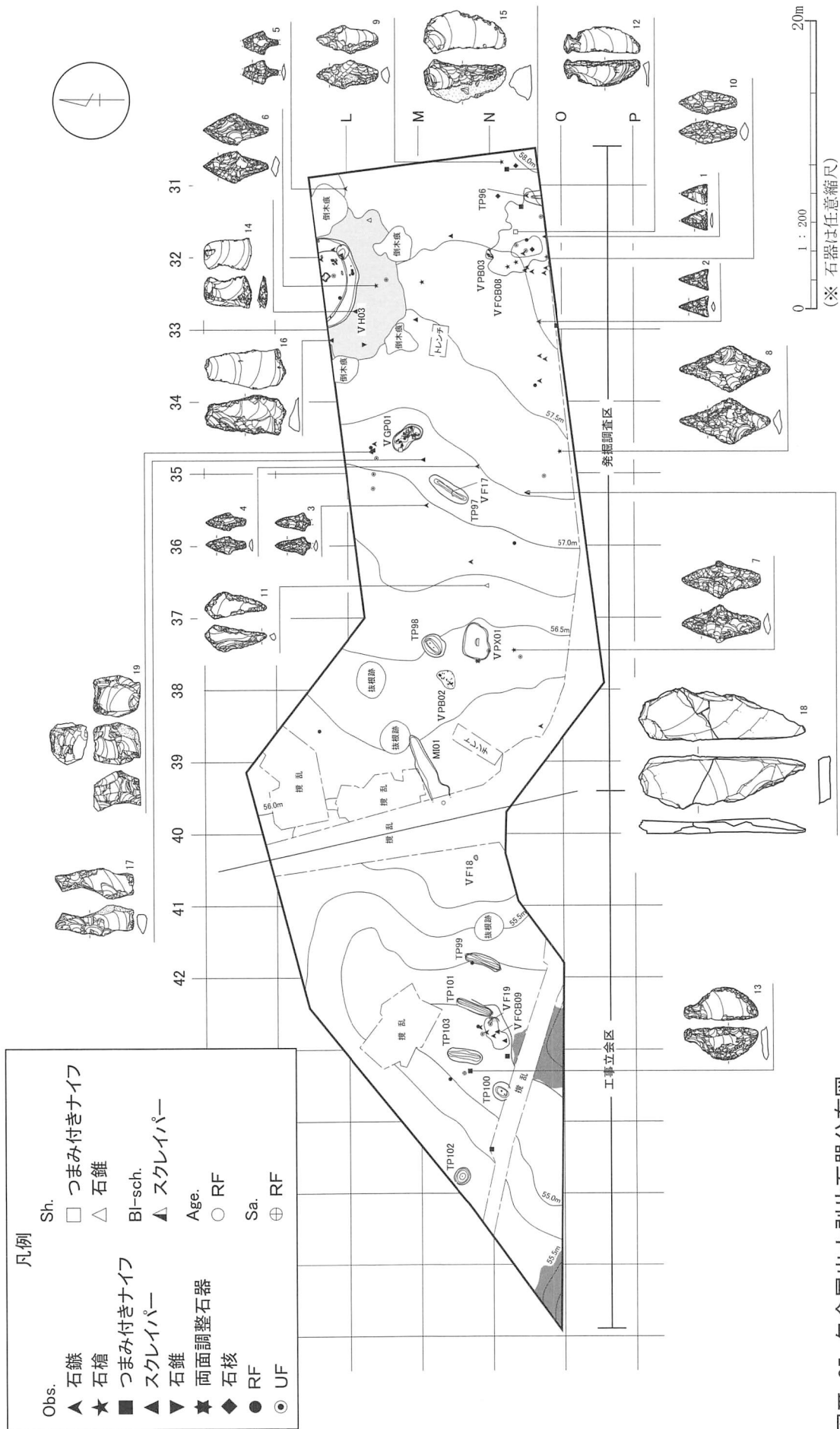


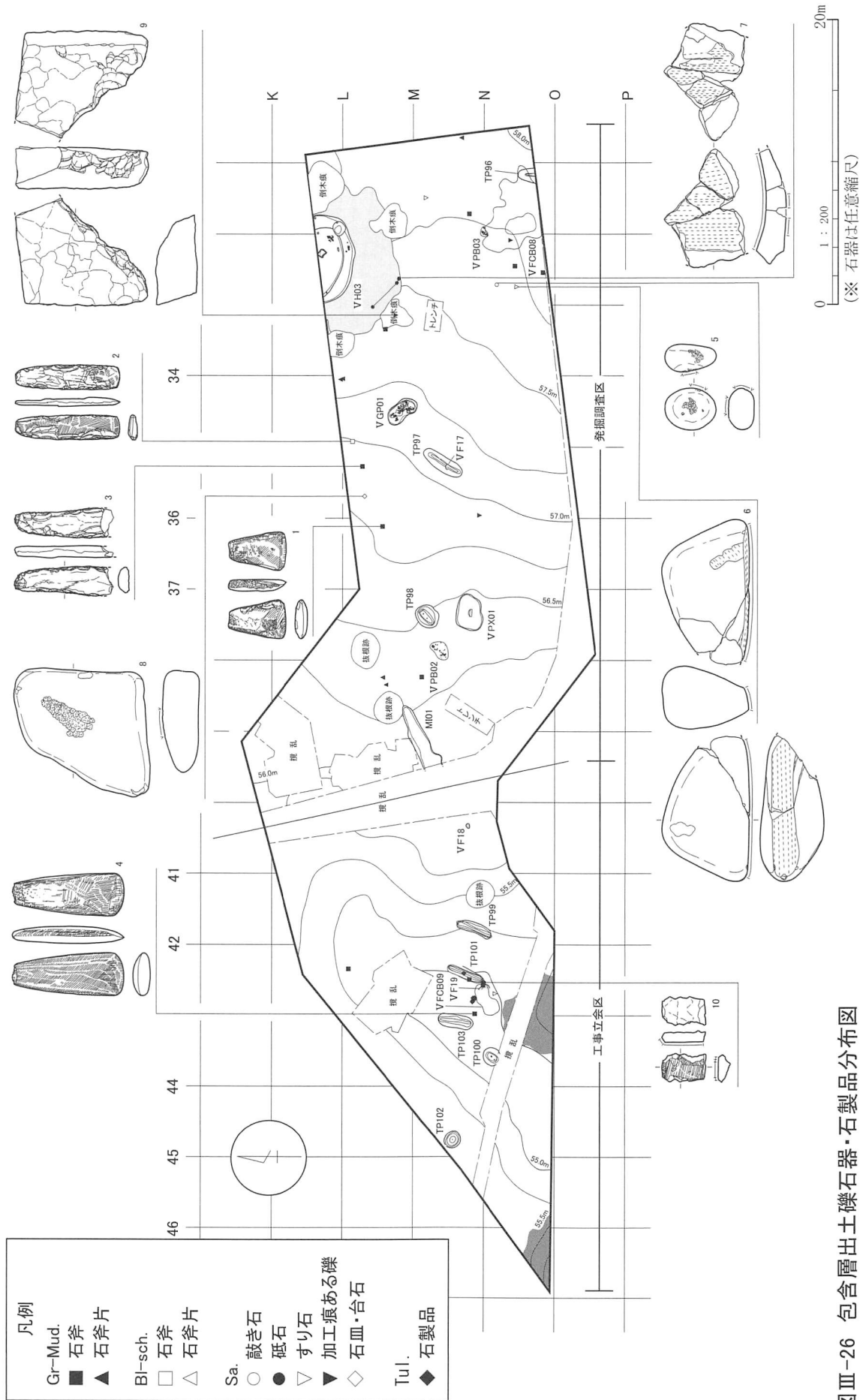
図Ⅲ-23 縄文時代包含層出土剥片石器





図Ⅲ-24 縄文時代包含層出土礫石器・石製品

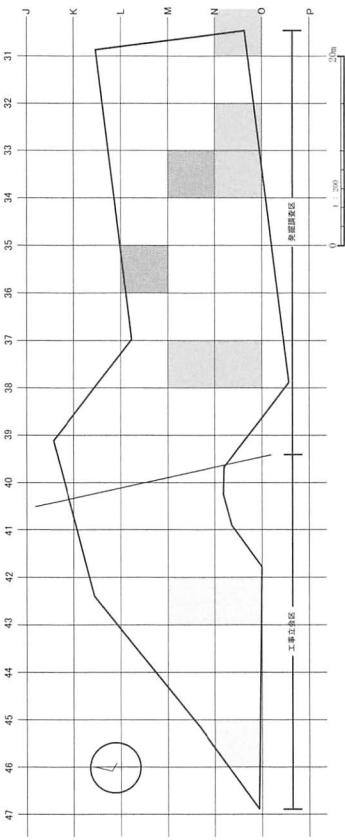




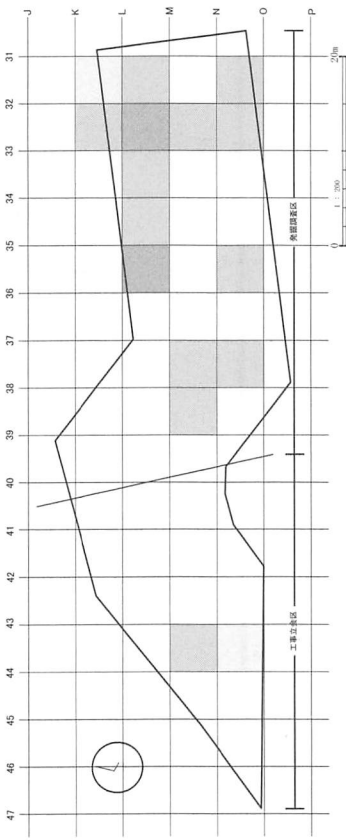
図Ⅲ-26 包含層出土礫石器・石製品分布図

※遺構・包含層の集計

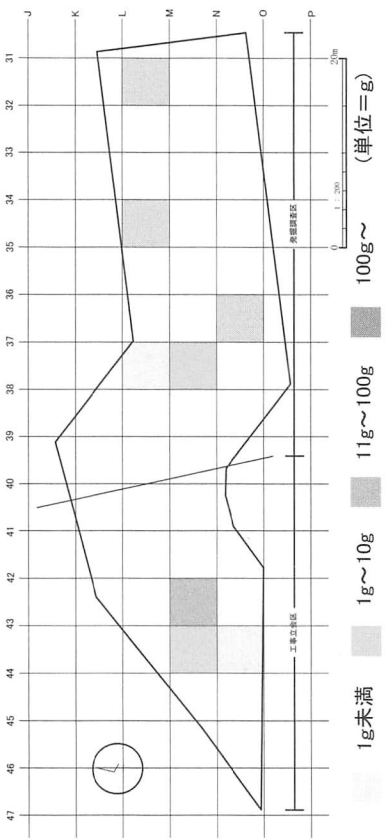
Va層



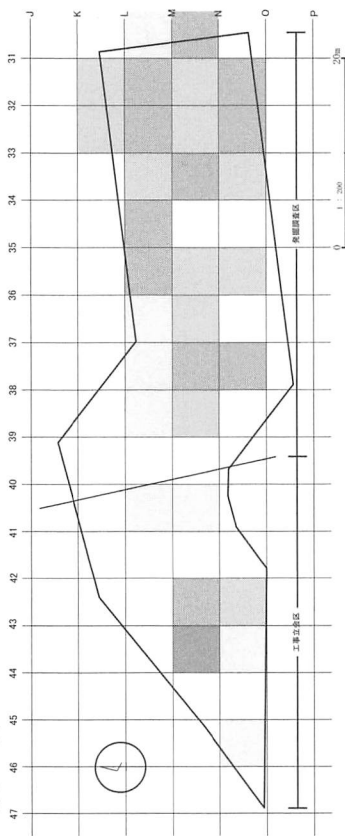
VbL層



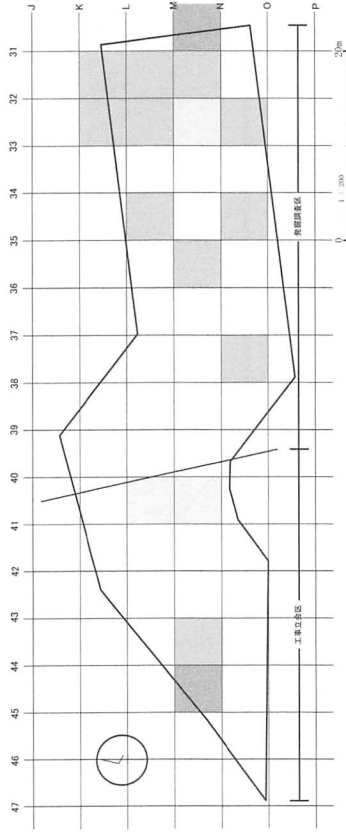
VI層



V層全体



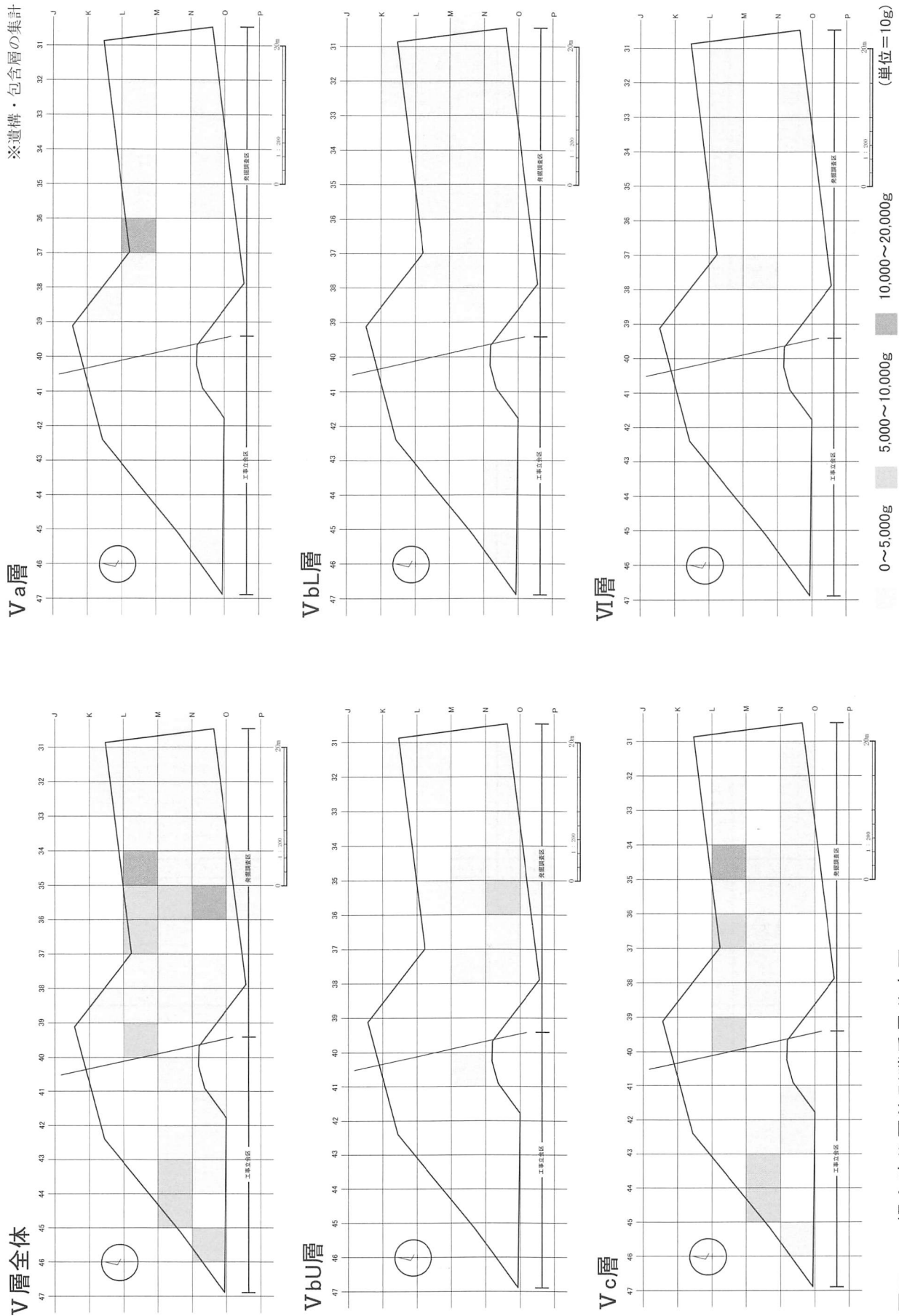
VbU層



Vc層



図Ⅲ-27 縄文時代層位別剥片重量分布図



図Ⅲ-28 縄文時代層位別礫重量分布図

表Ⅲ-24 剥片石器種別グリッド集計表

※遺構・包含層の集計 SC:スクレイパー BF:両面調整石器 FC:フレイクチップ

グリッド	石鏃	石槍	石錐	つまみ	S	B	R	U	石核	F	C	合計	グリッド	石鏃	石槍	石錐	つまみ	S	B	R	U	石核	F	C	合計			
K-31	2				1					17	20		K-31	3.91				5.62							2.85	12.38		
K-32	1	1			1		1	1		4	9		K-32	2.32	3.85			15.96		13.83	2.69				10.60	49.25		
K-33					1						1		K-33					12.36								12.36		
K-38								1			1		K-38							1.36						1.36		
L-30										1	1		L-30					1.11							0.01	0.01		
L-31					1					18	19		L-31					1.11							18.40	19.51		
L-32		1			2		1	1		20	25		L-32		4.89			12.35		3.49	0.91				17.93	39.57		
L-33			1							6	7		L-33			1.06									7.68	8.74		
L-34	1			1	2		2	2	1	10	19		L-34	0.88			13.85	11.06		17.15	11.24	26.37			28.56	109.11		
L-35									1	62	63		L-35								1.44				91.55	92.99		
L-36										1	1		L-36												0.02	0.02		
L-37										1	1		L-37												0.06	0.06		
L-38										1	1		L-38												0.71	0.71		
L-40										1	1		L-40												0.86	0.86		
M-30										23	23		M-30												34.94	34.94		
M-31					1					2	3		M-31					3.28							2.97	6.25		
M-32		1								4	5		M-32		1.04										3.07	4.11		
M-33										3	3		M-33												18.90	18.90		
M-34	1				1					2	3		M-34	1.09				7.64								8.73		
M-35	1									2	3		M-35	0.91												3.02	3.93	
M-36	1				1					1	3		M-36	1.81				6.36								1.55	9.72	
M-37						1		1		49	51		M-37						37.50		0.37				29.71	67.58		
M-38										2	2		M-38													3.93	3.93	
M-39							1			1	1		M-39							10.33						10.33	10.33	
M-40										3	3		M-40													0.61	0.61	
M-41							1			1	1		M-41							1.03						1.03	1.03	
M-42	2					1	3			22	28		M-42	1.56						2.27	8.46				16.30	28.59		
M-43			1				2			28	31		M-43			6.85			60.95						392.07	459.87		
M-44			1							1	1		M-44			6.14										6.14	6.14	
N-30		1			1				1		3		N-30		4.99			22.51							4.06	31.56		
N-31	3			1	1		1	3	2	502	513		N-31	1.43			4.61	2.00		0.73	4.21	9.74			35.56	58.28		
N-32	6	3		1						92	102		N-32	2.90	8.02		4.89									15.58	31.39	
N-33	3						1			6	10		N-33	5.53						1.82						10.40	17.75	
N-34		1								1	1		N-34		9.71												9.71	9.71
N-35					3		1	1		3	8		N-35					49.12		2.25	1.65				2.62	55.64		
N-37		1						1		6	8		N-37		3.24						11.25					12.07	26.56	
N-38	1										1		N-38	1.25													1.25	1.25
N-42	1				2					7	10		N-42	0.48				3.36								3.60	7.44	
N-43				1						3	4		N-43				4.55										0.38	4.93
N-45										1	1		N-45														0.01	0.01
土壌水洗	6	2					10	16	1	6234	6269	土壌水洗	1.96	1.35						4.79	13.23	2.38			149.86	173.57		
表探					1						1	表探						5.14									5.14	5.14
合計	29	11	1	6	19	1	23	30	5	7,135	7,260	合計	26.03	37.09	1.06	40.89	157.87	37.50	120.00	55.45	42.55	916.38			1434.82	1434.82		

(単位=点)

(単位=g)

表Ⅲ-25 礫石器等器種別グリッド集計表

※遺構・包含層の集計

グリッド	石斧	石斧片	たたき石	すり石	砥石	石皿	台石	加工痕ある礫	石製品	合計	グリッド	石斧	石斧片	たたき石	すり石	砥石	石皿	台石	加工痕ある礫	石製品	合計		
K-43		1								1	K-43		0.20									0.20	
L-32					3					3	L-32					225.00						225.00	
L-33	1				1			1		3	L-33	123.73				-					1800.00	1923.73	
L-34	1	1		2						4	L-34	36.01	0.76		2095.00							2131.77	
L-35	1						1			2	L-35	60.56							2000.58			2061.14	
L-36	1									1	L-36	47.66										47.66	
L-38		2								2	L-38		2.82									2.82	
L-42	1									1	L-42	6.75										6.75	
M-30		1								1	M-30		0.20									0.20	
M-31	1			1						2	M-31	95.54			71.93							167.47	
M-35								1		1	M-35										43.18	43.18	
M-38	1									1	M-38	33.54										33.54	
M-42	3					6				9	M-42	286.00						12700.58				12986.58	
N-32	2		1	1				1		5	N-32	137.62		80.45	990.00							108.57	1316.64
N-42				1					1	2	N-42				136.80							7.93	144.73
合計	12	5	1	5	4	6	1	3	1	38	合計	827.41	3.98	80.45	3293.73	225.00	12700.58	2000.58	1951.75	7.93		21091.41	21091.41

(単位=点)

(単位=g)

## 第IV章 まとめ

### 第1節 総括

厚幌1遺跡は平成14・15年度に発掘調査が行なわれ報告書が刊行されている(厚真町教育委員会2004)。平成20年度の発掘調査区は前回調査した地点の北側にあたり、より厚真川本流に近い緩斜面に位置している。調査結果ではⅢ層から縄文～擦文文化期に帰属するⅢF-08の1ヶ所とⅢPB-01の1ヶ所で殆ど検出されなかった。遺物は擦文土器229点、倒木痕の窪みから縄文時代初頭の土器が1個体出土している。Ⅴ層からは竪穴式住居跡1軒のほかTピット8基検出しており、縄文時代後期初頭には生活の場として、縄文時代中期～後期にかけて狩猟場として利用されていたことがわかる。遺物は縄文時代前期から晩期にかけての土器が686点出土するほか、礫やフレイクチップなど合わせて8,307点の遺物が出土している。Ⅲ層については、前回の調査で焼土や集石、炭化物集中、灰集中、獣骨集中等の遺構が検出され、大木の根痕に伴う灰送りの場所が2ヶ所見つかっていることから、生活の場ではなく、送り場や小規模なキャンプサイトの場であったと考えられる。縄文時代については、平成14・15年の調査で住居跡が2軒見つかっているほか、Tピットが95基と狩猟場としての性格を強く示しており、今年度8基検出し3年間の合計で103基の検出となっている。平成14・15年の調査ではTピットの配列は山側斜面裾に分布する傾向にあったが、今回の調査区に配列の続きを示すような分布状態は認められない。検出されたTピットの形態は細長いタイプのA1型と円から楕円形の逆茂木跡をもつC2型がほぼ同数検出され、前回の調査でもC2型37%、A1型30%と主体を示している。住居跡は調査区北側壁面にかかるように1軒検出されており、ベンチ状の構造をもっている。床面、ベンチ上からは縄文時代後期初頭に位置づけられる余市式土器が出土しており、本住居跡もこの時期に所属する住居跡であると考えられる。また、平成14・15年の調査で検出されている住居跡も、石組炉構造と一端にピットを有する(VH-01)同じ余市式期の所産である。その他、平成14・15年に報告された土坑については今回の調査では検出されず、C2型のTピットの配列前に目的的に配置された可能性もあると考えられているが、性格は依然として不明である。土器についてはⅣ群A1a類の余市式土器が全体の半分以上で、後期初頭が主体的な遺跡であることが分かる。今年度出土した余市式土器においては貼付帯が多段構成となる資料が圧倒的に多い。胎土については上幌内モイ遺跡(厚真町教育委員会2006)で胎土に石英結晶を多量に含む土器を分析し、富良野盆地特有の土器であるという結果を得ている。胎土に石英を多量に含む土器は富良野にその産地を求めることができ、当時の流通や交易の一端を知る材料として大変参考となっている。富良野盆地系土器は本遺跡でも50点確認されており、うち10%の5点がⅣ群A1a類、90%がⅢ群B3a類という結果になっている。これは主体に出土する後期初頭よりも、中期末の北筒式期の方が富良野盆地との交易が活発であったことが伺えるが、これが時期的なものなのか、遺跡の立地によるものなのかはこれからの調査で判断していきたい。また、北筒式土器において出土点数は全体の8%と僅少であるが、図Ⅲ-20-3・11は立会区西端に確認された地すべり堆積物の下層より出土しているため、厚幌1遺跡で調査された地すべり堆積は北筒式土器より後の時代であることが明らかとなった。分布密度は住居周辺を除けば、調査区南側に多少の濃い分布が認められるものの、時期によって分布域が異なるなどの特徴は認められない。以下に住居跡と墓塚について若干の考察を述べる。

(奈良)

## 第2節 住居跡

調査区の北側壁面にかかるように検出した住居跡はベンチ構造をもち、中央付近には石組炉が1ヶ所、南東側端部にはピットが1基確認されている。住居周辺にはV層とTa-dパミス混じりの掘り上げ土が分布しており、覆土内にも同様の堆積が認められることから屋根土が堆積したものと思われる。覆土内には屋根材や柱材と認められるような炭化材は認められなかったため、焼失家屋の可能性は低いと考えられる。住居の規模については平成15年に調査を行ったVH-01が960cm×606cmで北東-南西軸であるのに対して、今回調査をしたVH-03は南東-北西軸で、規模もVH-01に比べてやや小さくなると推察される。本遺跡で検出したVH-01と03の共通する特徴は、石組炉をもち、楕円形である、周辺に掘り上げ土が認められる、住居端部に土坑が構築されている、余市式土器が多段構成であるなどが挙げられる。しかし、VH-03のベンチ上より出土した土器については口縁部に幅広の薄い貼付帯が認められるのみで、地文はLR斜行縄文のみである。(図Ⅲ-4-3)。出土状態から住居廃絶後の流れ込みとは考えづらく、器表面に弱いナデが認められることから、タプコプ式に近いと考えられ、本住居跡は縄文後期前葉の可能性も考えられる。炉跡の炭化物からAMSによる年代測定を行なっているが $3,850 \pm 30$ という結果を得ており $1\sigma$ が2350BC-2281BC、 $2\sigma$ が2462BC-2271BCであり、時期的には縄文時代後期前葉に位置づけられる。このような年代測定の結果を踏まえると、多段構成になる余市式土器も僅かに年代幅をもつことも考えられ、一部漸移的にタプコプ式の初期に並存する可能性もあるが、今後共伴する資料を基に検討していきたい。(奈良)

## 第3節 土坑墓

VGP-01とした土坑墓は、Vc層で胎土に滑石を多量に含むII群A2a類がまとまって出土したことにより確認された。ここではVGP-01とした遺構が縄文前期の土坑墓であるのか、堆積状態、遺物出土状態、現場所見などを合わせて考察を行ないたい。堆積状態は上位にV層起源の黒色土がレンズ状に堆積し、下位にTa-dパミスを多量に含む褐色土で充填されていた。しかし、埋土に大型の板状礫が副葬されていたために坑底面及び埋土中位の堆積状態が判然としない。上位の黒色土はレンズ状に堆積することから、遺体の腐食過程におこる陥没後の自然堆積と思われる。2層以下のTa-dパミス及びシルト岩が多量に混入する層は、VI層及びTa-dパミスが斑状に堆積していることから埋め戻し土と考えられる。本文ではこの埋土を8層に分層しているが、板状礫の倒壊などによって色調、混入物が異なるだけであり基本的には同一層と考えている。遺物については土坑墓内の南東側に板状礫が4点折り重なるように検出している。礫はやや中心に向かって傾く状態で出土しており、間には埋土及び土器が認められる。土器は土坑墓の一面に分散している傾向にあり、坑底面、覆土中位、検出面とレベル差が著しい。土器はいずれもII群A2a類の同一個体と思われる資料で、胎土に滑石を多量に含む静内中野式土器である。これら以外に板状礫1点が倒立した状態で北側壁面に出土する。また、南東側の坑底付近に断面三角形のすり石が2点、北西側から頁岩製のつまみ付ナイフ1点出土している。このような出土状態から板状礫は意図的に配置され、他の板状礫も本来は土坑墓の上面または壁面近くに配されていたと考えられる。土器はその出土状態から意図的に破損させた土器を数回にわたって埋土とともに副葬した結果と考えられる。墓の認定については人骨以外の要素として遺体層やベンガラ等の確認が挙げられ、今回は両方確認できていない。しかし、上記に示した遺物出土状態や埋め戻し土の状態から土坑墓として報告している。(奈良)



# 厚幌1遺跡(2)

写真図版

図版 1



1. 厚幌1遺跡 遠景 (SW→)

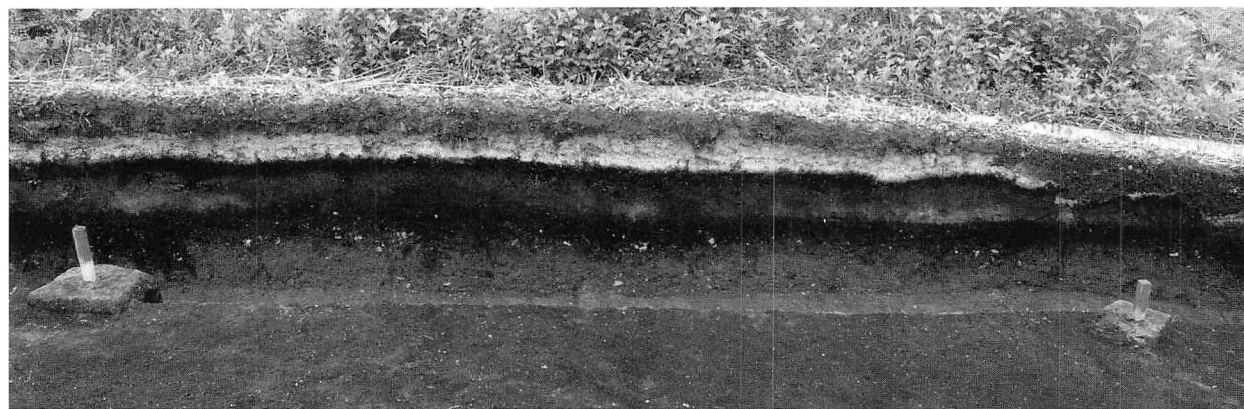


2. 厚幌1遺跡 近景 (SW→)

図版 2



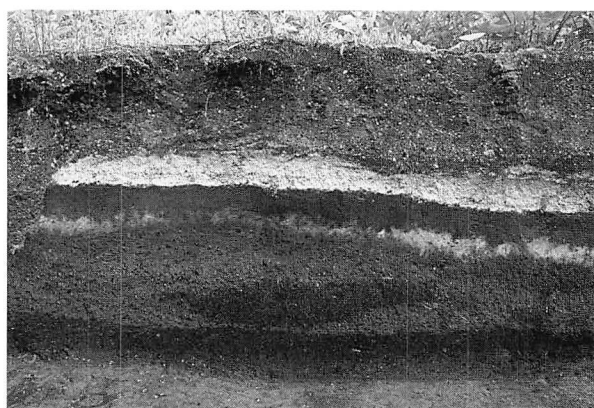
1. N-32区 土層断面 (N→)



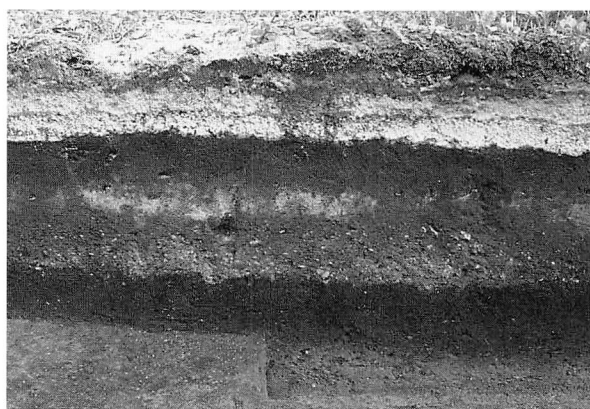
2. N-33区 土層断面 (N→)



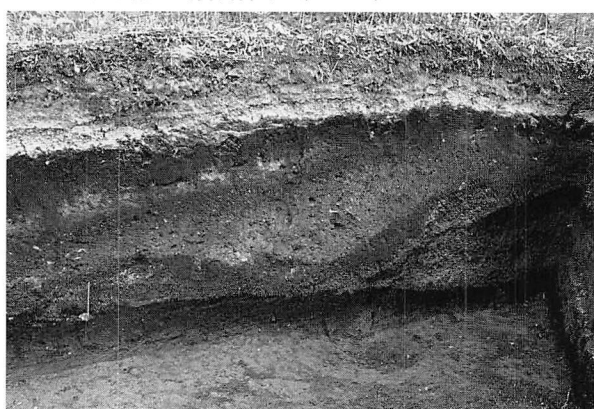
3. 立会地点作業状況



4. 立会地点土層断面1 (NE→)



5. 立会地点土層断面2 (NE→)



6. 立会地点土層断面3 (NE→)

図版 3



1. III層調査状況1 (NE→)



2. III層調査状況2 (SE→)



3. III層PB-01調査状況 (N→)



4. IV層火山灰除去状況 (N→)



5. V層調査状況 (S→)



6. V層H-03調査状況 (E→)



7. V層GP-01調査状況 (NE→)

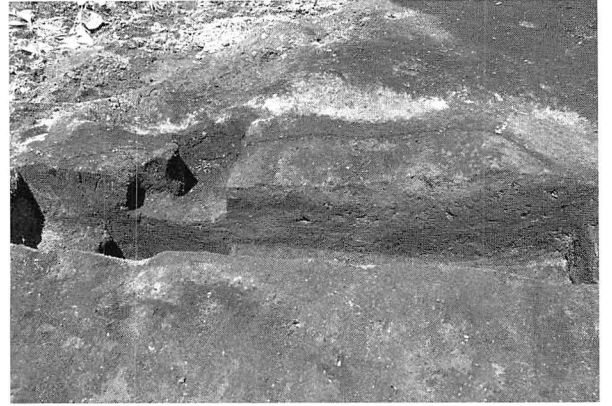


8. V層TP-98調査状況 (N→)

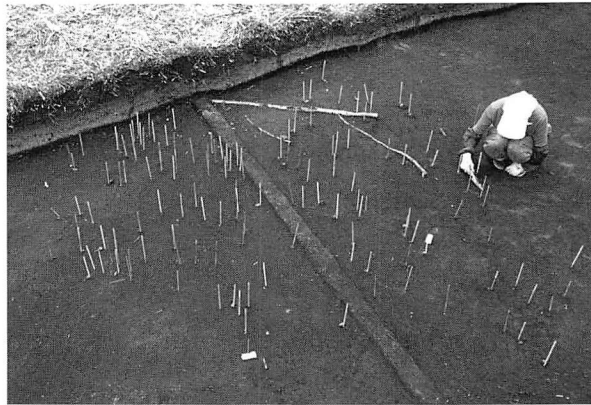
図版 4



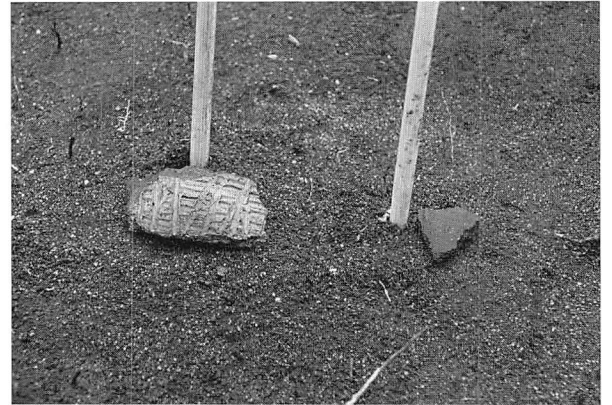
1. III F-08検出 (SE→)



2. III F-08断面 (SE→)



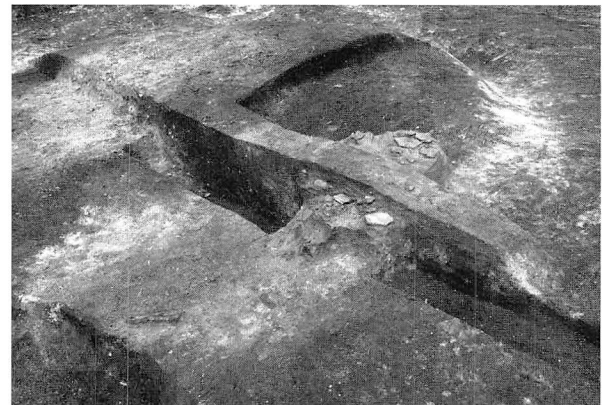
3. N-31・32区 擦文土器出土状態 (N→)



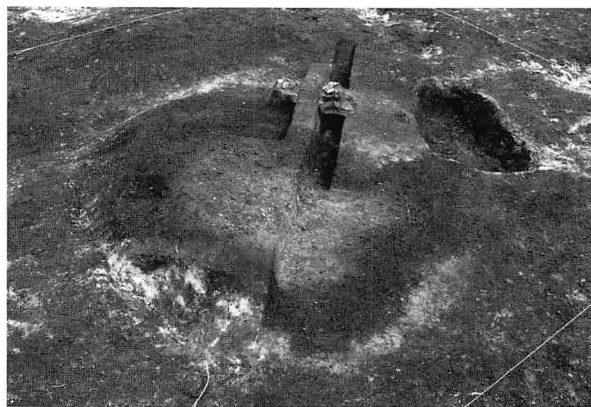
4. N-32区 擦文土器出土状態 (W→)



5. III PB-01出土状態1 (N→)



6. III PB-01土層断面 (NE→)



7. III PB-01出土状態2 (NE→)



8. III層25%調査終了 (SW→)

図版5



1. VH-03長軸土層断面 (S→)



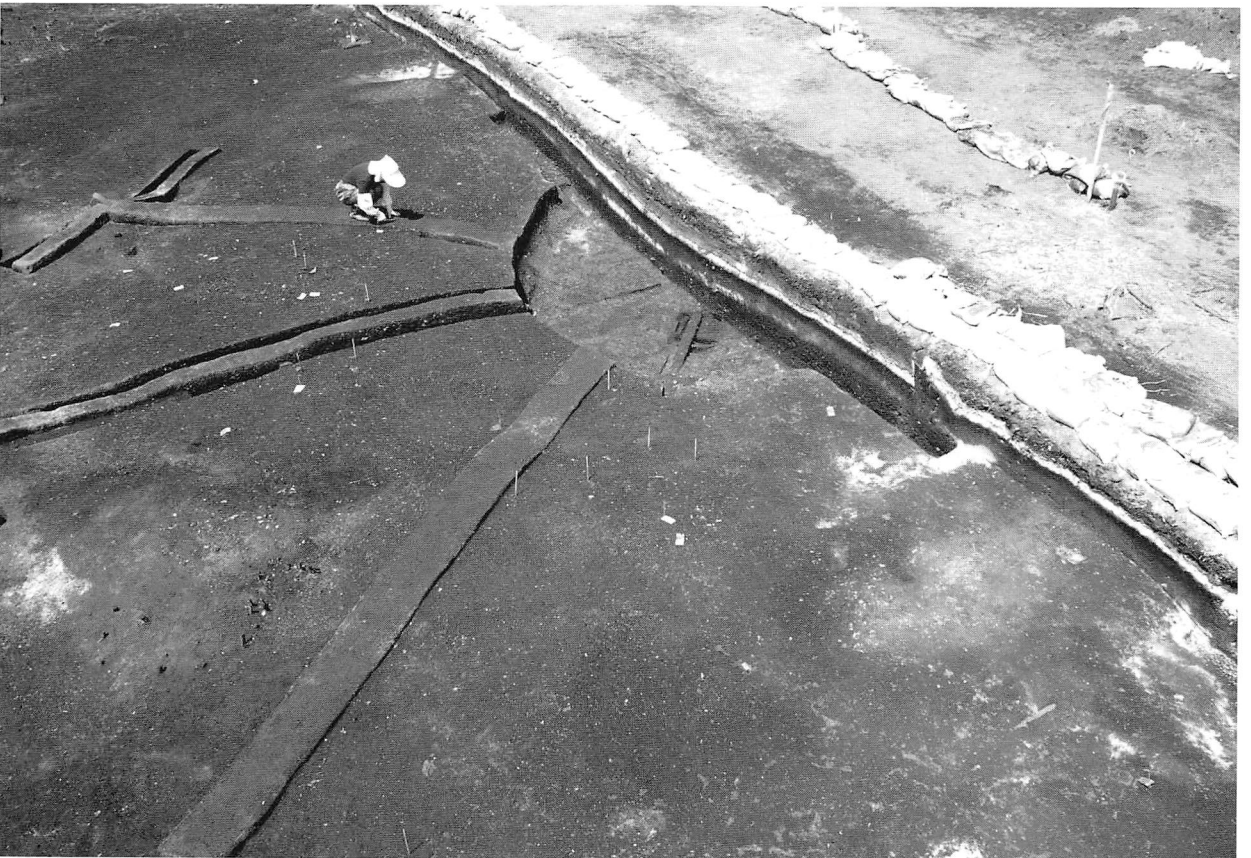
2. VH-03短軸土層断面 (W→)



3. VH-03床面遺物出土状態 (E→)



4. VH-03.HF01及び床面遺物出土状態 (S→)



5. 掘り上げ土検出 (SE→)

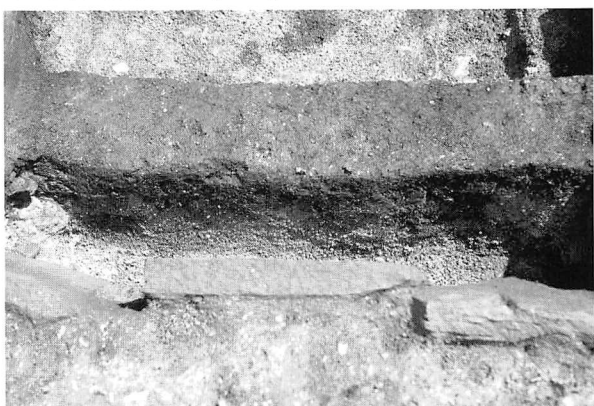
図版 6



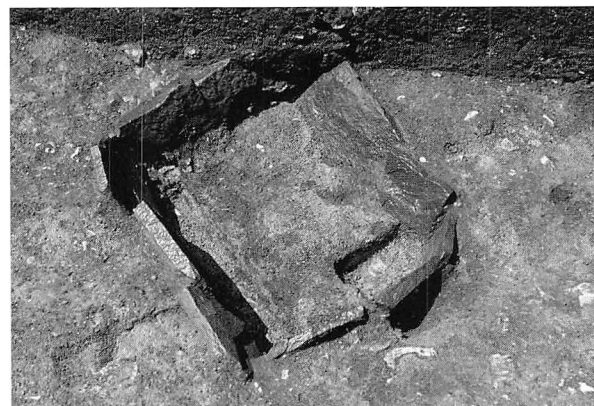
1. VH-03.HF01 (W→)



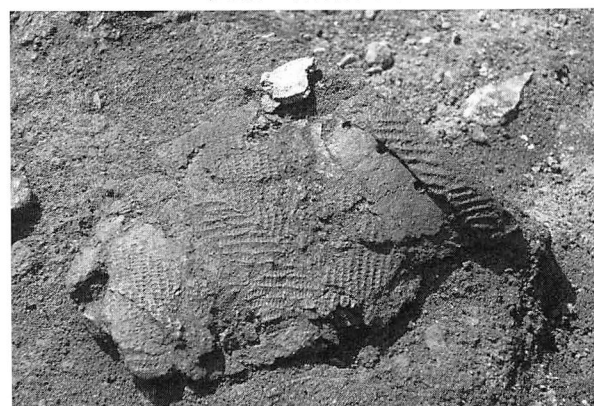
2. VH-03.HF01短軸土層断面 (NW→)



3. VH-03.HF01長軸土層断面 (SW→)



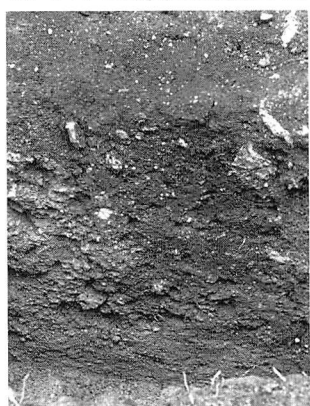
4. VH-03. HF01完掘 (S→)



5. VH-03床面遺物出土状態 (SE→)



6. VH-03ベンチ遺物出土状態 (W→)



7. HP01断面 (S→)



8. HP03断面 (S→)



9. HP06断面 (S→)



10. HP03完掘 (S→)

図版 7



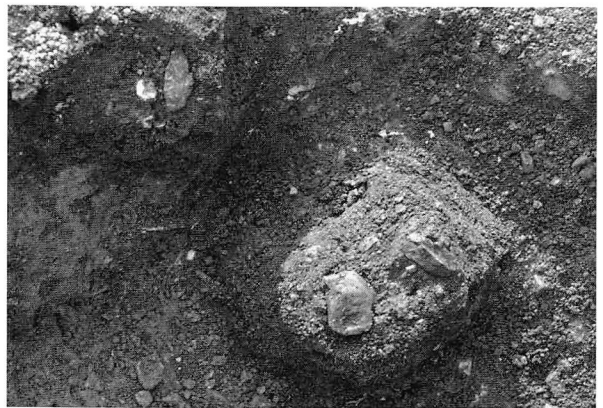
1. VH-03.PT01検出 (NW→)



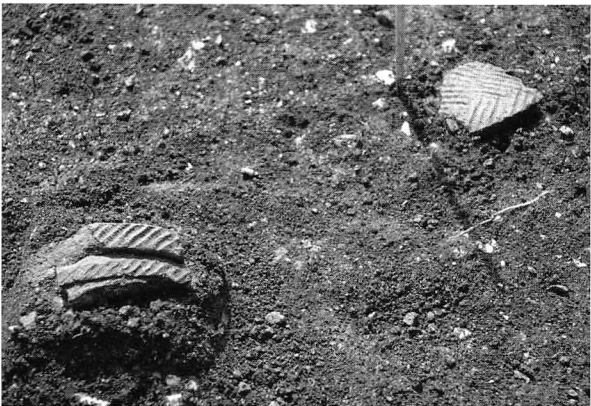
2. VH-03.PT01断面 (NE→)



3. VH-03.PT01完掘 (E→)



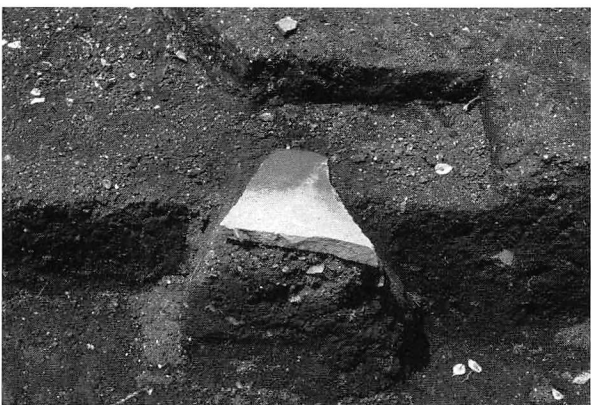
4. VH-03.PT01遺物出土状態 (E→)



5. VH-03掘り上げ土遺物出土状態 (SE→)



6. VH-03掘り上げ土内遺物出土状態 (E→)



7. VH-03掘り上げ土遺物出土状態1 (W→)



8. VH-03掘り上げ土遺物出土状態2 (SW→)



図版 8



1. VGP-01遺物出土状態 (SE→)



2. VGP-01土層断面 (SW→)



3. VGP-01遺物出土状態拡大1 (SE→)



4. VGP-01遺物出土状態拡大2 (SE→)



5. VGP-01完掘 (NE→)

図版 9



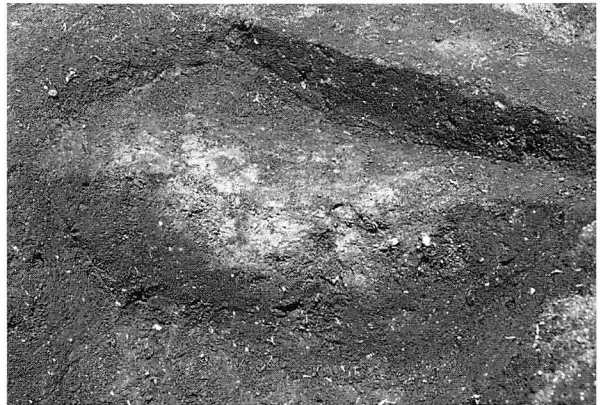
1. VPX-01遺物出土状態 (NW→)



2. VPX-01土層断面 (W→)



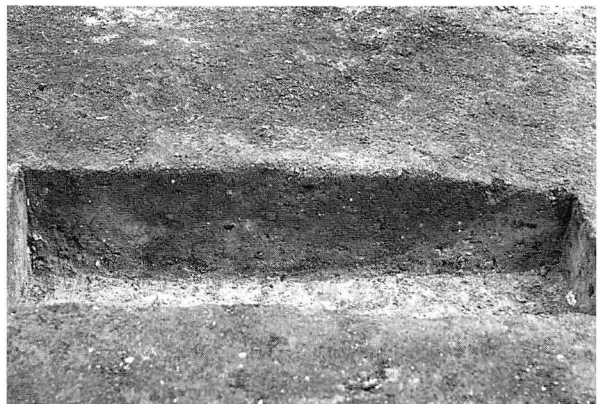
3. VPX-01完掘 (NW→)



4. VF-17断面 (SW→)



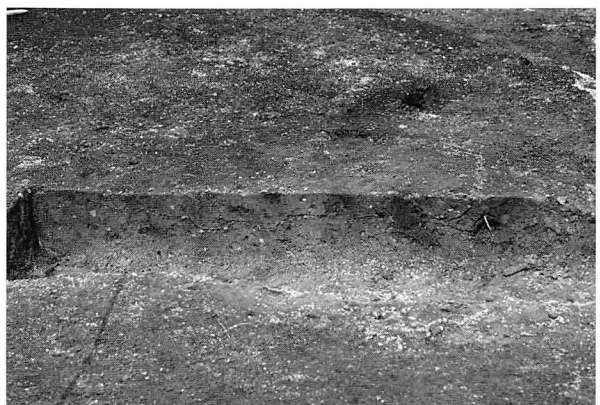
5. VF-18検出 (NW→)



6. VF-18断面 (NW→)



7. VF-19検出 (SW→)



8. VF-19断面 (N→)

図版 10



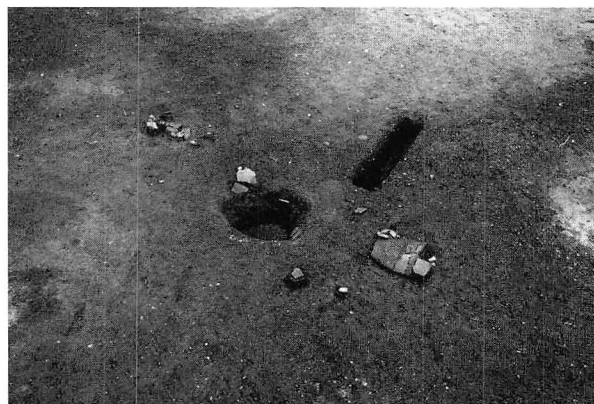
1. VF-19遺物出土状態 (SW→)



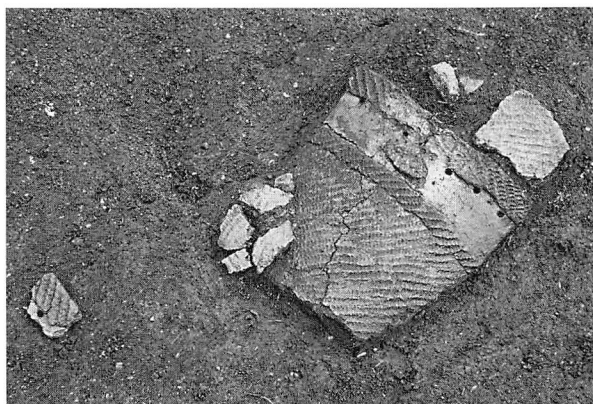
2. VF-19石皿 (NE→)



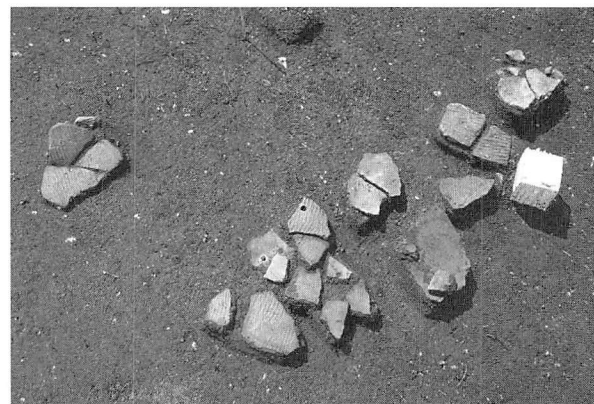
3. VF-19石斧 (NE→)



4. VPB-02遺物出土状態 (SE→)



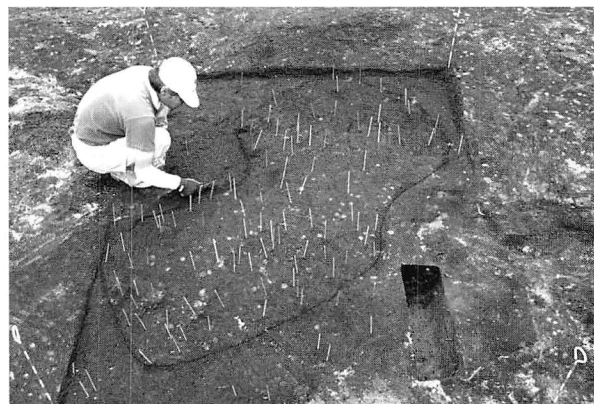
5. VPB-02遺物出土状態拡大 (SE→)



6. VPB-03遺物出土状態 (NW→)



7. VFCB-08遺物出土状態 (NW→)



8. VFCB-09遺物出土状態 (NW→)

図版 11



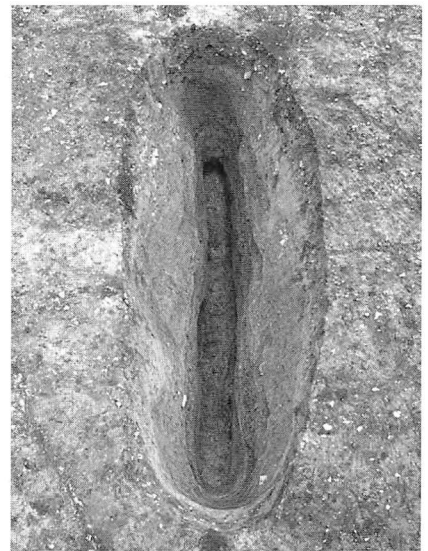
1. TP-96土層断面 (N→)



2. TP-96完掘 (N→)



3. TP-97土層断面 (NE→)



4. TP-97完掘 (N→)



5. TP-98土層断面 (W→)



6. TP-98完掘 (NE→)

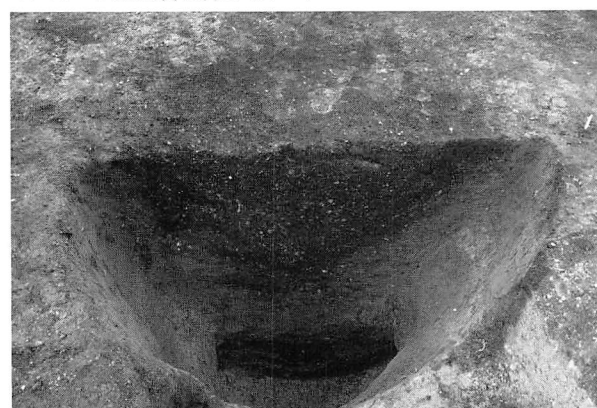
図版 12



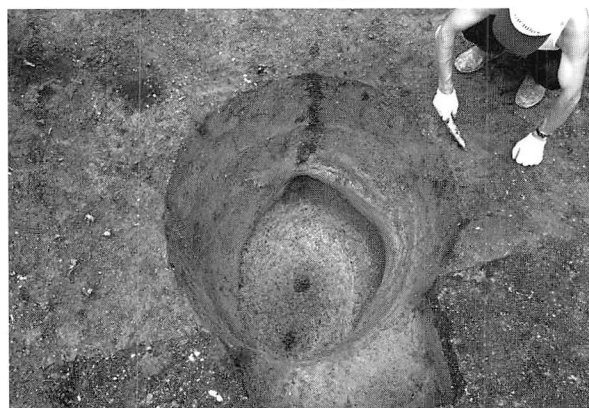
1. TP-99土層断面 (N→)



2. TP-99完掘 (NE→)



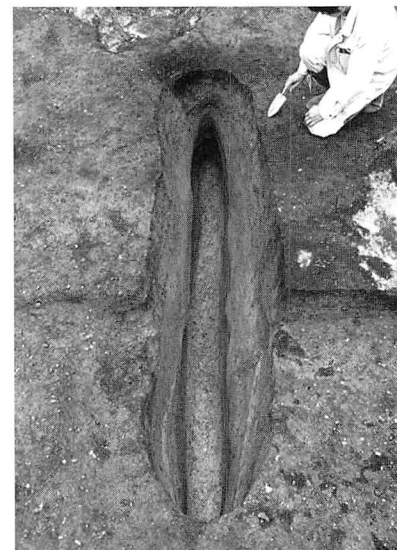
3. TP-100土層断面 (S→)



4. TP-100完掘 (SE→)

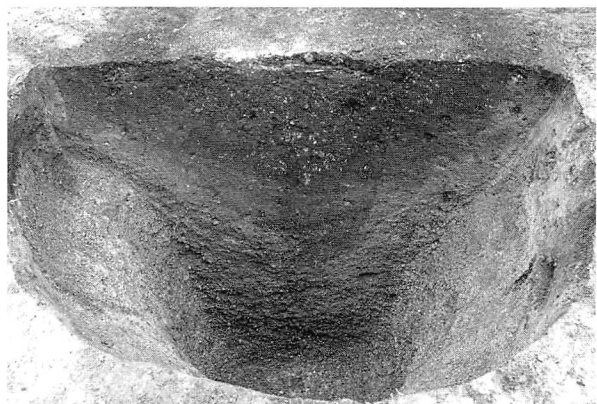


5. TP-101土層断面 (NE→)



6. TP-101完掘 (NE→)

図版 13



1. TP-102土層断面 (SE→)



2. TP-102完掘 (S→)



3. TP-103土層断面 (NE→)



4. TP-103完掘 (N→)

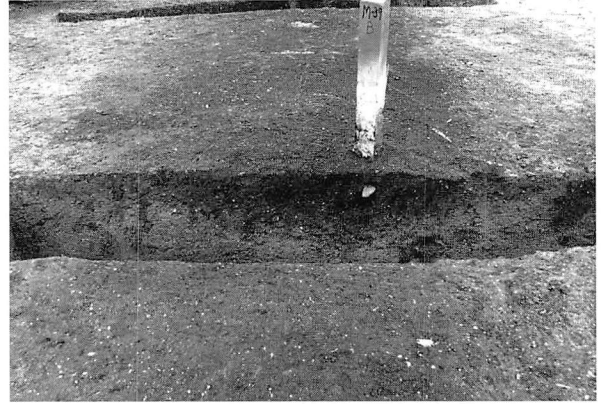


5. TP-99~103 (NE→)

図版 14



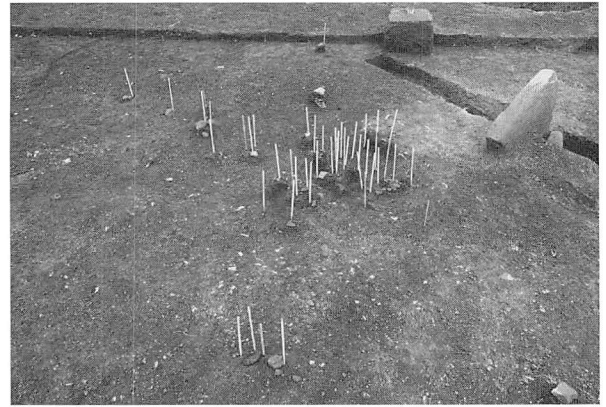
1. MI-01検出 (NE→)



2. MI-01土層断面 (NE→)



3. MI-01完掘 (NE→)



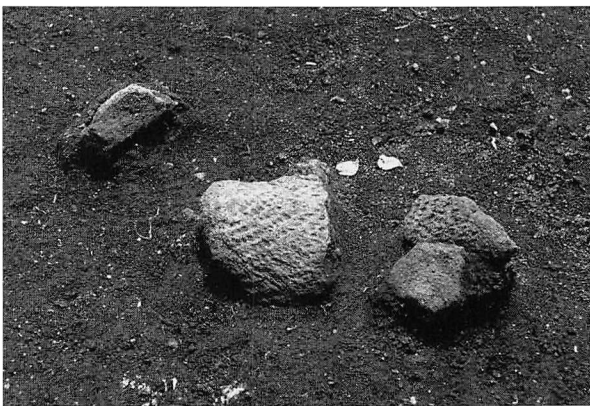
4. L-32区 遺物出土状態 (SW→)



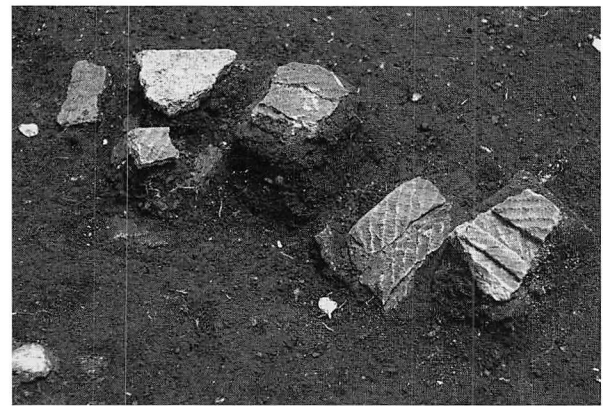
5. M-31区 すり石 (NW→)



6. N-35区 遺物出土状態1 (W→)



7. N-35区 遺物出土状態2 (N→)



8. N-35区 遺物出土状態3 (S→)

図版 15



1. 地すべり堆積土検出1 (NE→)



2. 地すべり堆積土検出2 (NE→)



3. 地すべり堆積土下土器検出状態1 (NE→)



4. 地すべり堆積土下土器検出状態2 (S→)



5. 地すべり堆積土検出 (NE→)



6. 地すべり堆積土下北筒式土器検出状態 (N→)



7. 地すべり堆積土下北筒式土器出土状態 (N→)



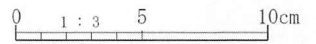
8. 立会区調査終了 (NE→)



図版 16



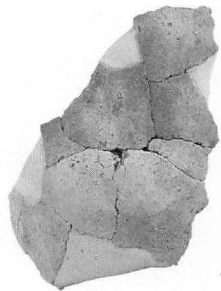
1



1. III PB-01出土土器



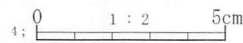
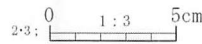
2



3

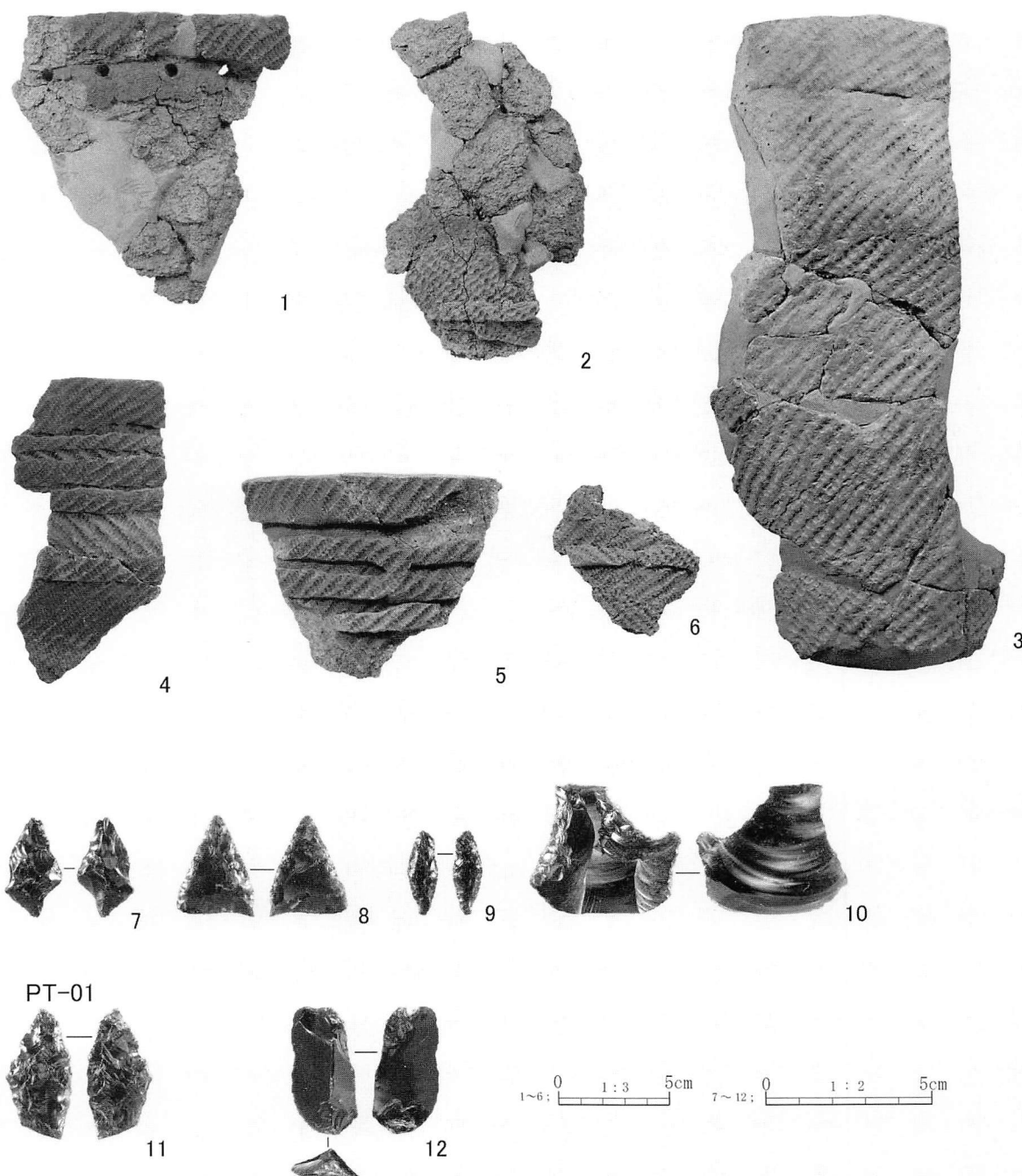


4



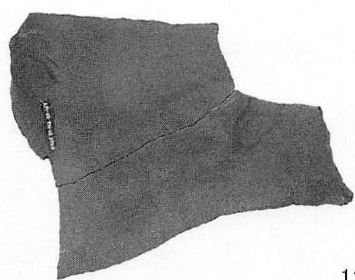
2. 続縄文・擦文文化期包含層出土遺物

図版 17

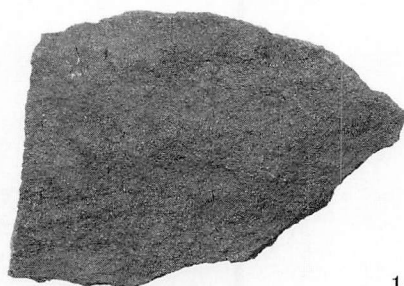


1. VH-03出土遺物(1)

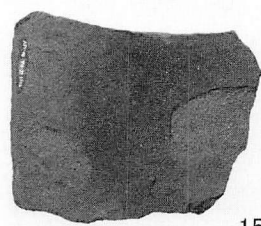
図版 18



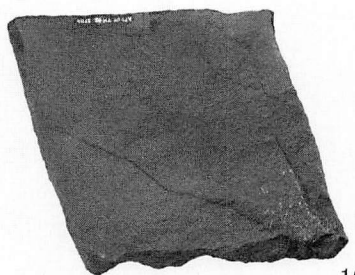
13



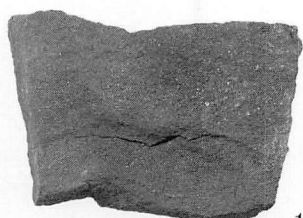
14



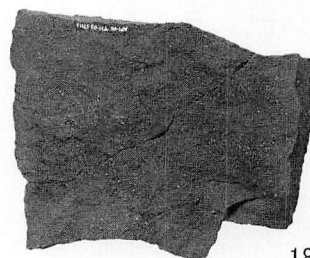
15



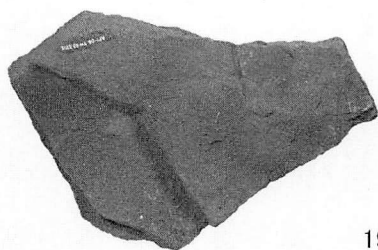
16



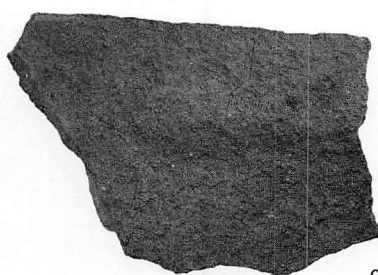
17



18



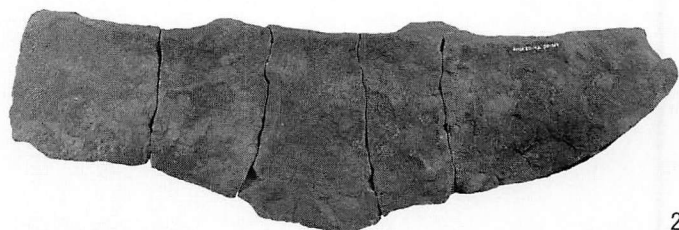
19



20



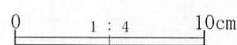
21



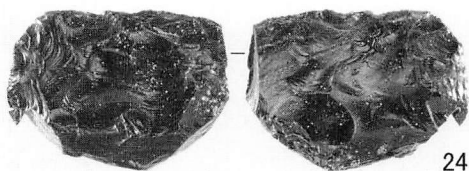
22



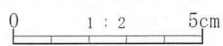
23



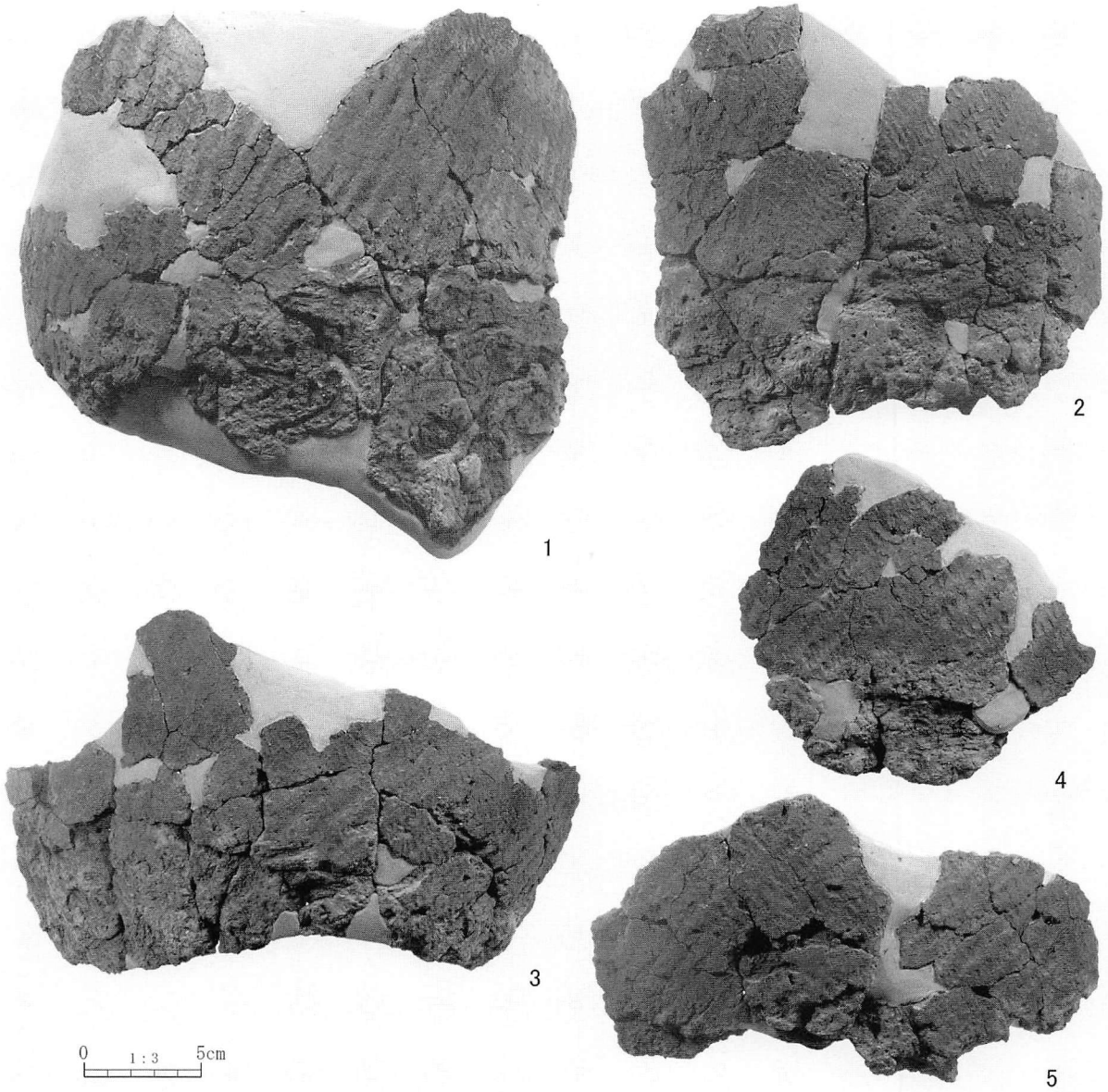
1. VH-03出土遺物(2)



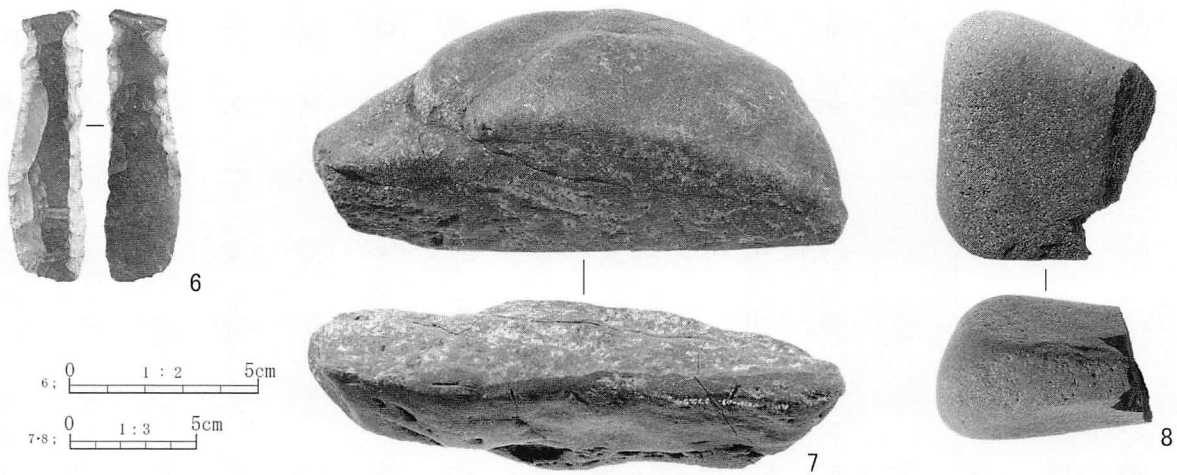
24



2. VPX-01出土石器

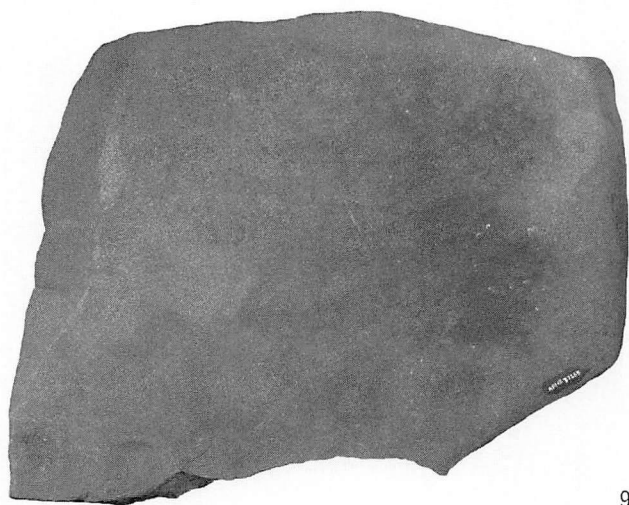


1. VGP-01出土土器

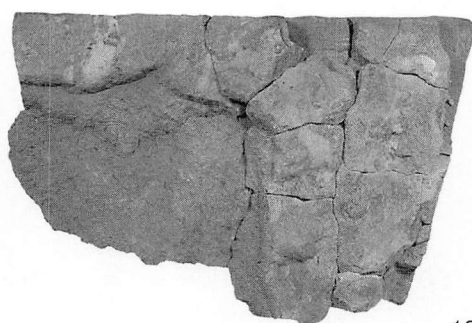


2. VGP-01出土石器

図版 20



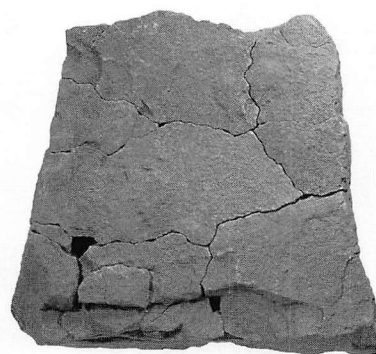
9



10



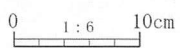
11



12



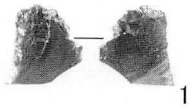
13



1. VGP-01出土礫

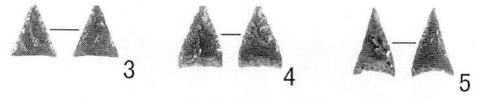
図版 21

VF-19



1

VFCB-08



3

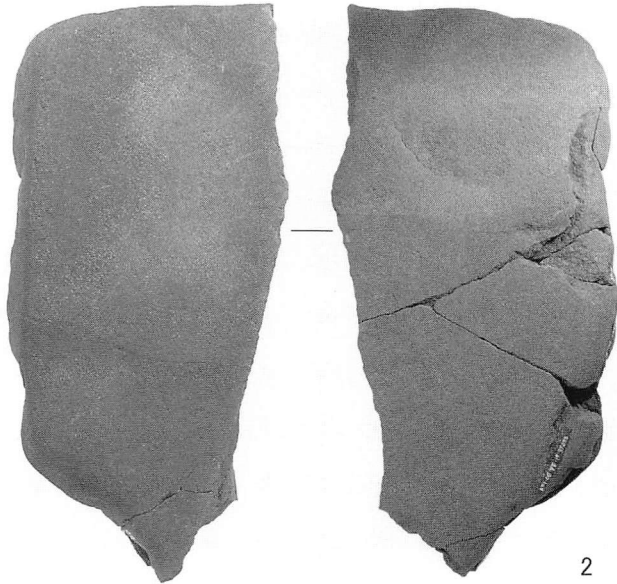
4

5



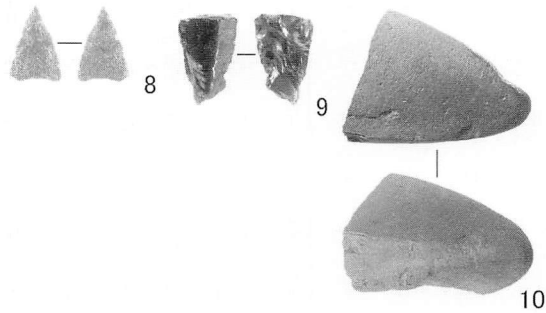
6

7



2

VFCB-09



8

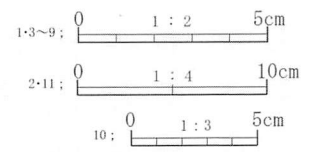
9

10

TP-101



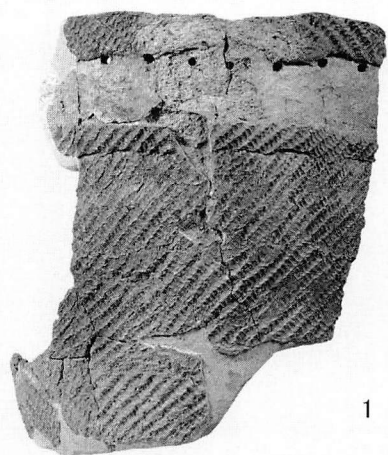
11



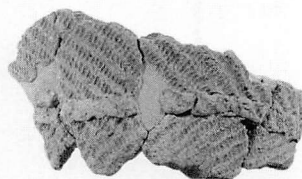
1. VF・VFCB・TP出土遺物

図版 22

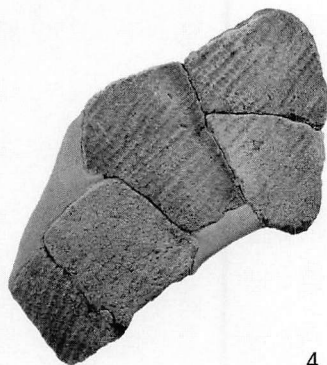
VPB-02



1



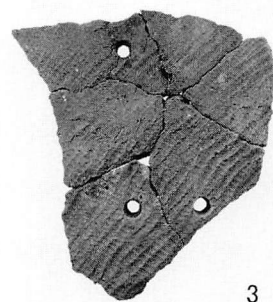
2



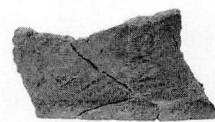
4

0 1:3 5cm

VPB-03



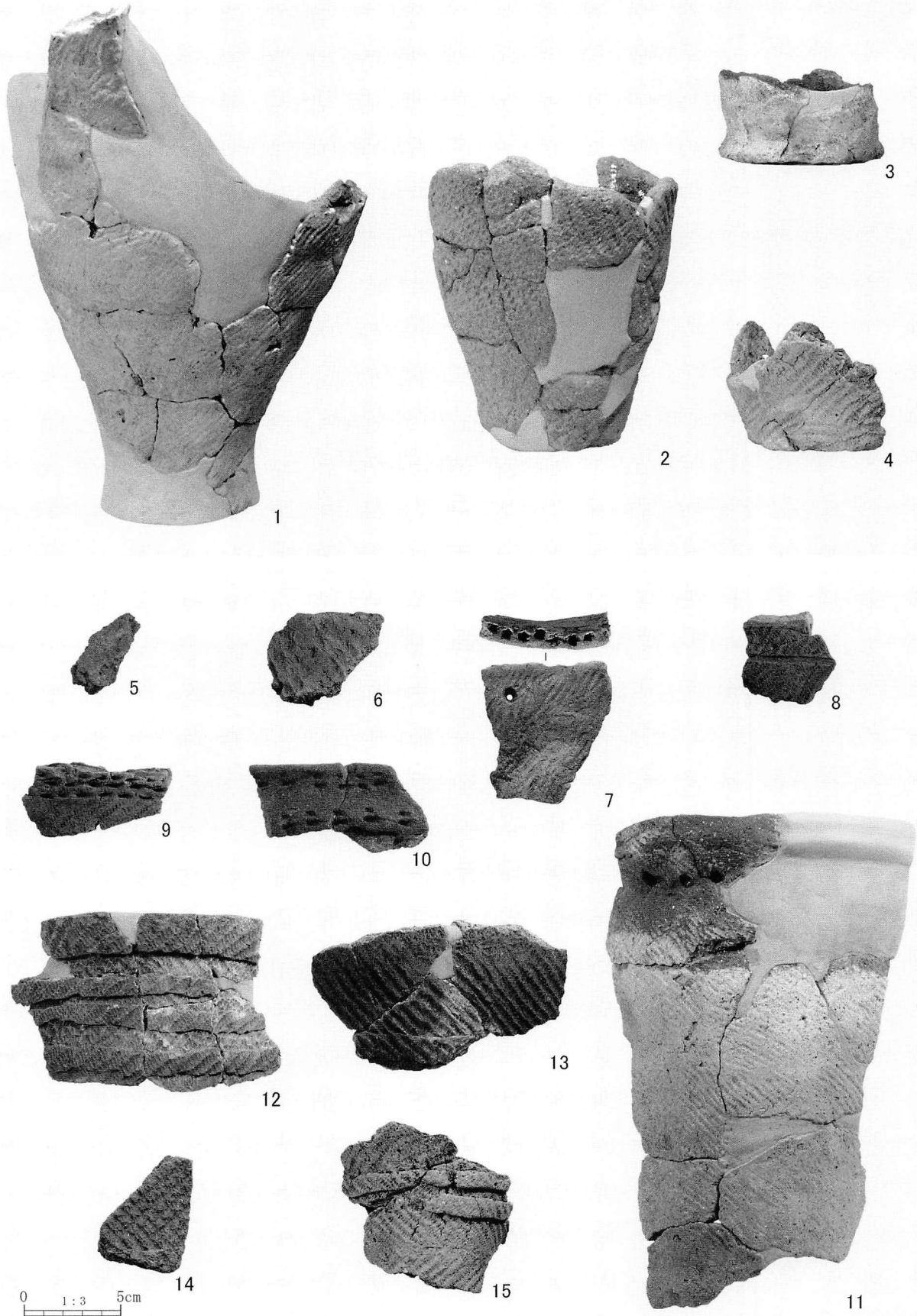
3



5

1. VPB出土土器

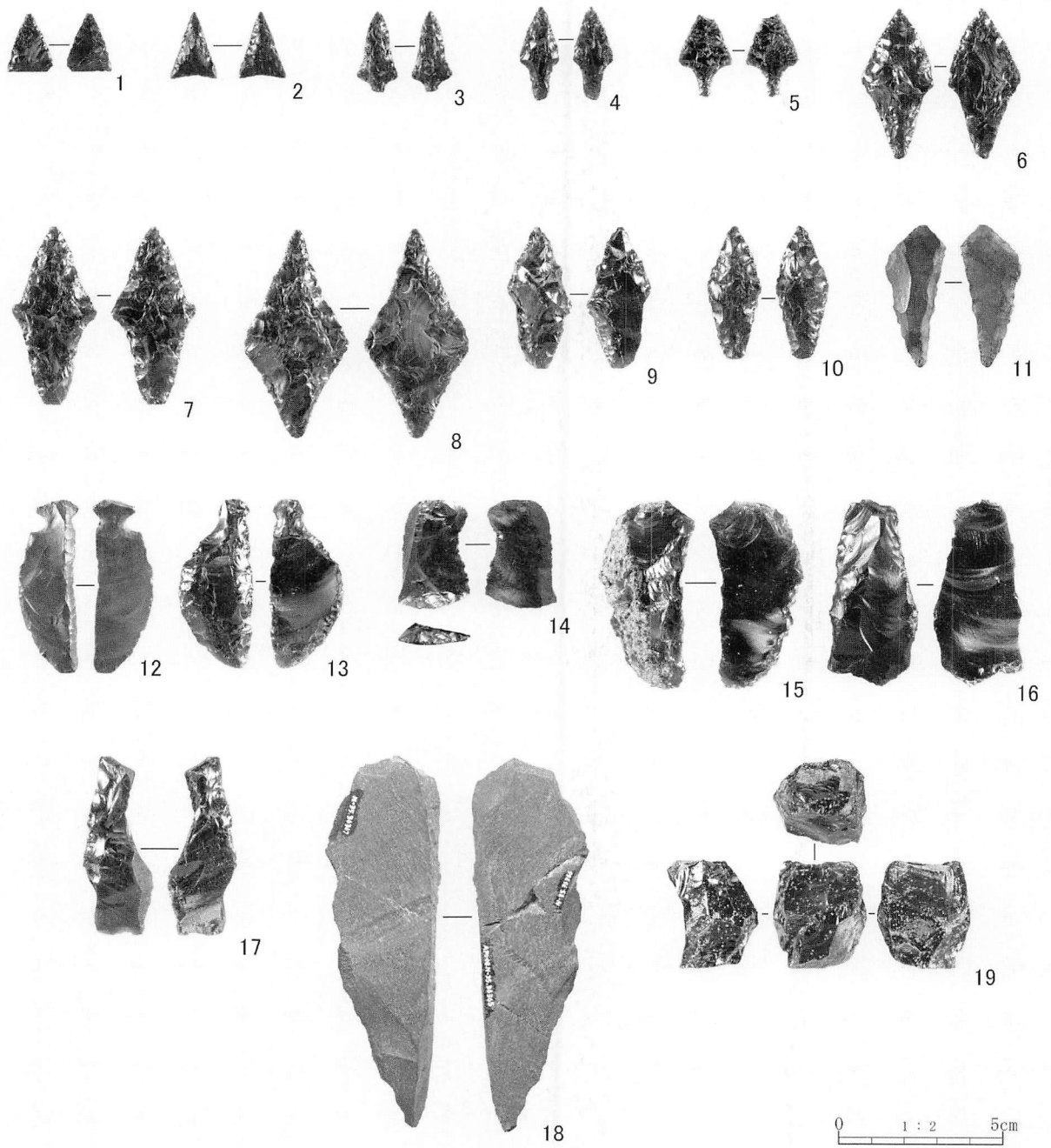
図版 23



1. 縄文時代包含層出土土器

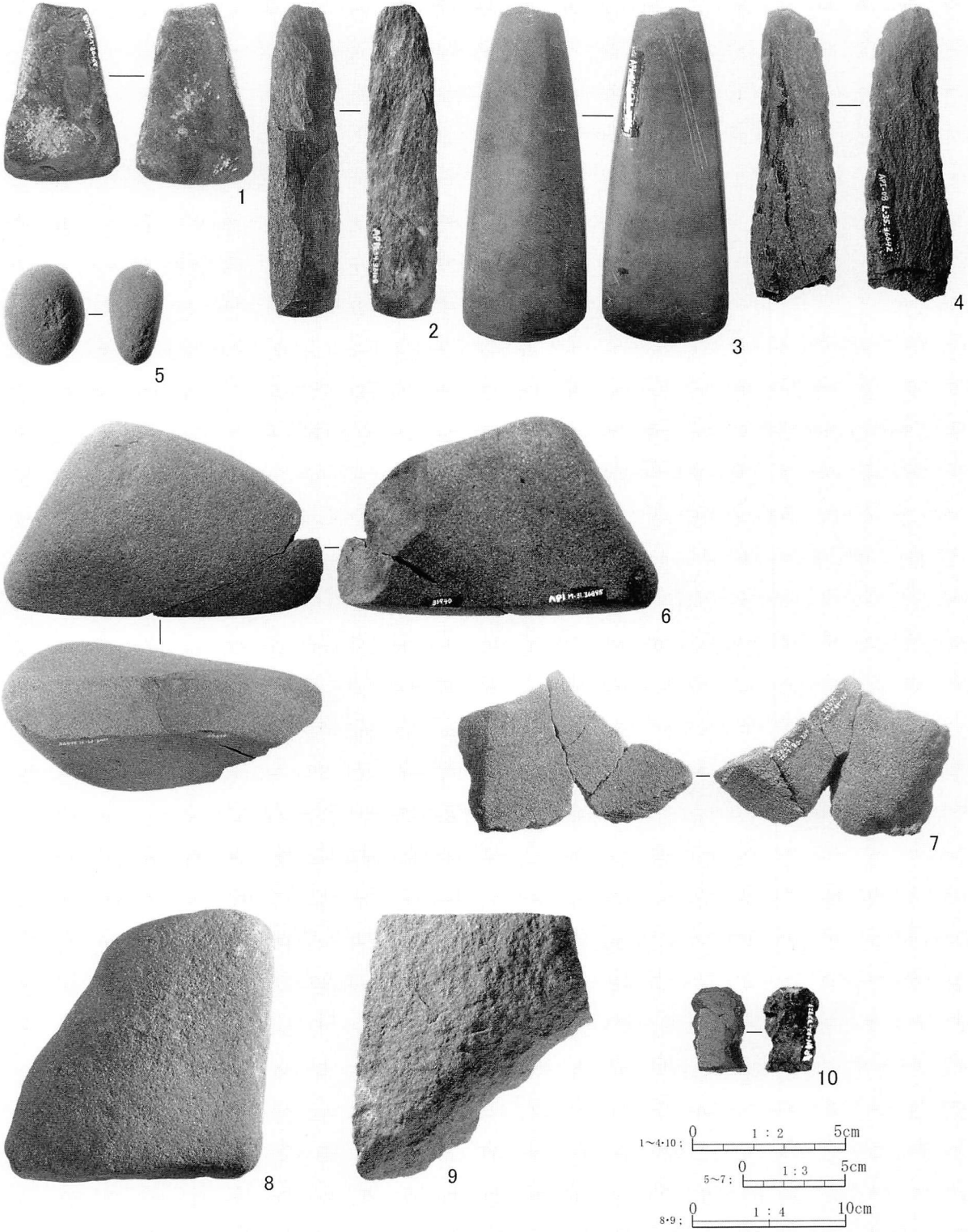


図版 24



1. 縄文時代包含層出土剥片石器

図版 25



1. 縄文時代包含層出土礫石器・石製品